

クリエイティング・チェンジ

障害の世界から生まれたイノベーション



社会変革の最もパワフルな原動力とは？

アショカ創設者ビル・ドレイトンによる序文



世界中で、社会を革新する上で最もパワフルな原動力とは何だろうか？

社会の中で、長い年月をかけて習慣化されてきたやり方や在り方を、変えるのはたやすいことではない。とはいえ、社会起業家としての精神と能力に富んだ人の手にかかる、そういった社会に染み込んでしまったパターンを根本的に変える発想も比類なき効力を発揮する。

歴史を振り返れば、時代の舵が切り替わる度に、この「パターンの根本的転換」が起こっている。

さて、こういった変革を起こすことができるのは、障害のない人だけだろうか？答えは、もちろんNOである。

アショカの認定したフェローの中には、多くの障害と生きる人が存在する。イノベーションに、障害の有無は関係ない。

障害のあるアショカ・フェローを見れば、私たちが定義するところの「障害」は、社会を変革する「障害」ではないことは、一目瞭然である。アショカの核をなす目標は、数千年のあいだ続いた「ごく少数のエリート階級が社会全体を牛耳る時代」から、「社会を構成するひとりひとりが社会を変える当事者（チェンジメーカー）となる時代」への移行を推進することである。例えば、18世紀の農業革命は、特権階級が楽に暮らすために農耕から得られるごく僅かな利潤を独占することをやめさせ、生産性の向上により人口のほんの一部の人々が農業に従事するようになるというスキームだった。私たちは、毎日、倍速で変化が起こるような目まぐるしい時代に生きている。この「新しい時代」において、これまでのような「少数のエリート層が社会を牛耳る」というスキームは、もはや作用しない。

いま移行しつつある新しい時代において組織や社会変革の正否を計る尺度はなにか？それは、「チェンジメーカー」（変革の当事者としての個人）が、その組織や社会にどれだけ多く存在するかということだ。さらに言えば、その個人が変革したいという想いだけでなく、変革を達成するための高度なスキルを持ち、そうした個人間のつながりがどれだけあるか、ということが決まる。なぜ、デトロイトやカルカッタなどのかつての工業都市が衰退し、サンノゼやバンガロールなどの情報集積都市が、めきめきと活力を増しているかを考えればわかっていたただけるだろう。

新しい時代において、重要な資質とは何だろうか？カづくで、自分の思うように人を動かす時代は過去のものである。今、始まりかけている新しい時代で輝くプレーヤーとなるには、「エンパシー」「リーダーシップ」「チェンジメイキング」という非常に高度で複雑な3つのスキルが備わっていないとてはならない。そして、これらの資質を自分が習得できると信じる自信、さらに「私は変革の当事者である」と言い切る自信も欠かせない。

私が言及している新しい時代では、誰もが変革の当事者"チェンジメーカー"となり得ることを知ってほしい。そこには、性別、年齢、人種、経済的格差、障害の有無など何の制限もない。

世界人口の10%を占める何らかの障害のある人々に対する新潮流が起こっている。障害のある人とない人の間の壁を崩すこのムーブメントは、直感的に新しい時代の到来を察知した人々が先導している。

その最終目標は、障害のある人々に潜む可能性を引き出し、「与えられる」側から、「与える」側へと変えること。つまり、彼らがチェンジメーカーとしての市民権を得るということにほかならない。

それは、明確で反論の余地もない。そして、その目標に到達する過程で活躍するプレイヤーこそが、社会起業家である。本書の内容は、その道程を映し出す光であり、「社会起業という魔法」の解説でもある。

クリエイティング・チェンジ 障害の世界から生まれたイノベーション

エディー・バートニック

2009年3月18日

障害を持っていることで、人は世界で最も大きな少数派グループとされる。世界保健機構（WHO）の推計によると、世界の人口の10%—約6億5千万人、うち2億人は子どもたち—が何らかの障害を持っているとされる。人口の高齢化に伴い、この数字は更に増えるであろう。WHOはまた、「障害は貧困の原因でも結果でもあり、世界の障害者の80%は低所得国に居住し、社会的・経済的な不利益や人権侵害を被っている」と報告している。

障害の分野で実践されている創造的な問題解決について、国際的な事例をまとめた本を出す時は熟した。世界的な不況は、貧困という厳しいハンディを背負った人たちには、より暗い影を落としている。大きな問題に我々を引き入れる思想は、我々を引き出してくれる思想ではないだろう。世界的経済成長に見合うだけの対応を我々はしてこなかった。そしてもし歴史が繰り返すならば、縮小を続ける政府予算はサービスの削減につながり、さらに悲惨な状況を生み出すだろう。このままでいいはずがない。新しい考え方、新しいパートナー、そして新しい問題解決の方法が、切実に求められている。

幸いなことに、経済的な陰りの中で、「クリエイティング・チェンジ」は一筋の光だ。「クリエイティング・チェンジ」は、ひとりひとりの障害者やその家族の生活を変化させるだけでなく、地域、企業、そして政府が障害を持つ人を価値のある、社会に貢献する市民として歓迎し受け入れるようにする、世界中のアショカ・フェローによるユニークで創造的な物語を紹介している。16人のアショカ・フェローは全員、社会的にも認められた障害の世界におけるリーダーであり、社会起業家たちだ。彼らパイオニアたちは一緒に、障害の分野で、自国のみならず世界全体に影響を及ぼすような新しいパラダイムを創り出している。

「クリエイティング・チェンジ」は、2007年から始まった国際アショカ・フェロー協働の取り組みから生まれた成果である。この協働プロジェクトは、「『できる人（健常者）』と『できない人（障害者）』とが交じり合うことを邪魔するのは、往々にして固定観念や恐怖心、忌避、そして偏見である」という考えに基づいている。

「クリエイティング・チェンジ」には3つのねらいがある。一つ目に、障害の分野における可能性について、人々の考えに疑問を呈し、新しい創造を生み、固定観念を変えること。二つ目に、社会の指導者、企業、政府、国際機関を戦略的なパートナーとしてフェローの活動に巻き込むこと。そして三つ目に、社会変革を国際的に広め、国際的な政策に反映させること。

本書に収められたアショカ・フェローの世界的な活動は、世界15カ国に及び、教育、雇用、

人権、経済的自立、障害を持つ女性の地位向上、ITスキルへのアクセス、社会的支援ネットワークの構築、ヘルスケア商品を低価格で提供するための社会的企業、移動支援とそのための機器、レクリエーション、芸術、メディアといった幅広い分野にわたる。

アショカ・フェローの活動の背景にある考え方には、哀れみやチャリティに基づいた考え方から、障害を持つ一人一人の市民権と地域に貢献する能力への勢いある変化が見て取れる。障害者ができないこと（彼らの欠損など）に注目するのではなく、彼らが生まれ持った個々人としての価値や尊厳、自立と他者に与える能力が強調される。またそこには、障害を持つ人々と、その支



援者、そして地域や企業、政府系機関の間にあるものは平等なパートナーシップだという自然な信念がある。強い社会起業的な手法が現れ、創造性に富んだ経済活動や公益性とつながった「可能な」アプローチを体現している。それによって、ネガティブで受動的なものとは異なる、ポジティブで力強い道が拓かれた。

それぞれの物語は個人的であるとともに、勇気と、革新的思考、企業との連携、構造変革の意味深い事例を読者に贈り物として与えてくれる。それぞれの物語は、小さな地域単位での試みから始まり、社会そのものの構造や文化を変える「社会運動」に発展していく道筋を辿る。

「クリエイティング・チェンジ」は、小額の投資がいかにして倍増し、実質的な結果と学識的な価値を創り出したかを示している。

「クリエイティング・チェンジ」は、私たち読者に実行を呼びかける。私たちは、人にやさしいインクルーシブな地域を創ることができる。地域での解決方法を広めることができる。そして、貧困と孤立という、障害を持つ人々が直面するふたつの大きな古くからあるハンディに打ち勝つことができる。

最後に、この本を通して先駆的な試みから学んだ、またこれから学ぶであろう幸運な人々に代わって、アショカ・フェローの皆さんに心から感謝したい。あなたがたの仕事が、その意思に共感し、ビジョンの実現に支援してくれる国や国際機関の関心を惹きつけることを、私は強く期待している。

エディー・バートニックは、西オーストラリアの障害サービス委員会による大都市コミュニティ支援のディレクターであり、オーストラリア知的障害者研究ソサイエティのフェローである。彼は、政策や基金、そして支援提供において幅広い上級政府職を経験しながら、障害者とその家族を支援する30年間の展望を持っている。そしてここ数年は、社会サービス分野、また個

人コンサルタントとして働いている。エディーは、全国的な地域調整プログラムの開拓において主要な指導的役割を担ってきた。そのプログラムは現在、西オーストラリア全体の8000人以上の障害者とその家族を支援している。さらに、選択と管理、そして個人と家族のリーダーシップと地域関与を強化するためのイニシアチブを増大させるため、個人化と個別化された基金メカニズムに集中した西オーストラリアの支援改革のリーダーでもあった。1999年から、エディーは、地域調整アプローチを計画し、制度変革に影響を与えるためにオーストラリア、イギリス、オランダ、ポーランド、アメリカ、カナダ、ニュージーランドで会議論文を発表し、家族やコミュニティ・グループ、そして政府の相談に乗っている。彼は、ブリティッシュ・コロンビアのアショカ・フェロー、アル・エトマンスキーと親密に働いており、ブリティッシュ・コロンビアと西オーストラリアで一連の相互社会起業協力を展開している。そして、2006年にポーランドでアショカ・フェローと会い、それがこの重要な書籍化プロジェクトのコネクションとなった。

アショカの（ディス）アビリティ・イニシアティブについて

（アショカ・ポーランド （ディス）アビリティ・イニシアティブ・コーディネーター
アンナ・オベム

（ディス）アビリティ・イニシアティブは、2007年に始まった。しかし、障害の分野で活躍するアショカ・フェロー同士の国際的な連携という概念には、長い歴史がある。ピョートル・パウロウスキー（ポーランド出身のアショカ・フェローであり、本書で紹介されているリーダーのひとり）とエバ・コンツァル（アショカ・ポーランド代表）が、アショカ・フェローの一団を招聘し、将来的な連携について話し合ったのは2004年のことだった。この連携が正式な形をとったのは3年後、フェローたちが集まって戦略を検討しようとしたときだった。その会議は、2008年3月にワルシャワで行われた。

当初は8人のフェローがワルシャワに集い、（ディス）アビリティをテーマに掲げた国際的な社会キャンペーンのコンセプトを考案した。このキャンペーンは3つのプロジェクトから成る。アショカ・フェローによる取り組みの成功例についての書籍、彼らの活動についての物語を共有するための双方向のウェブサイト、そしてインクルージョン週間の国際的な祝賀イベントの3つだ。このコンセプトは8人各々の考えや経験と結びつき、同時に彼らの日常生活に合わせた新しい創造的な考えを提供している。

2008年3月の会議以来、（ディス）アビリティ・イニシアティブは真に国際的な取り組みとなった。現在は、世界5大陸、18の国々から、24人のアショカ・フェローが参画している。このグループの取り組みは、フェロー同士の国際的な連携の完璧な事例として、また集団的な取り組みを通してフェローの個別インパクトが数倍に高められるプラットフォームとして、アショカ本部にも認められている。

（ディス）アビリティ・イニシアティブは、次のステージに入ろうとしている。フェローたちは、自分たちのアイデアを国際的なレベルに移し、現場の思考に変革をもたらそうと取り組み始めている。彼らはその大望を叶えるために、必要なスキルも知識も国際的な認知度もすべて兼ね備えている。

※訳注：「disability」は英語で障害を指す。「Dis（否定の意の接頭語）」と「Ability（能力）」から成る言葉で、「（ディス）アビリティ・イニシアティブ」は、「Dis」を括弧でくくることで、障害当事者の「Ability（能力）」を強調している。

ジャビッド・アビディ

全国障害者雇用促進センター（NCPEDP）／インド

1998年よりアショカ・フェロー

エンパワメントに向けた権利擁護への道
ラマ・チャリ著

「まず何よりも、我々が存在することを政府に気づかせた。そして、ただ存在するのではなく、我々も市民である事を認識させた」。ジャビッド・アビディは、インドの障害者権利運動の歩みを極めて上手く描写した。それは障害者が自らの権利を主張し、意見を述べた道程であった。これは、アビディが挫折することなく16年間貫いてきた戦略だ。

1990年代、インドの障害者は非常に厳しい状況に置かれていた。障害者人口は6千万人と推定され、人口の5～6%を占める。この巨大な障害者人口は、インドの多くの州の人口に相当するが、彼らに注視したり、耳を傾けたりすることは、ほとんどなかった。何らかの教育を受けている障害児童の割合は、2%を下回った。教育は別途、行われるようになっていた。にもかかわらず、障害児に対する特殊教育学校の数は、ほんのわずかであった。また就労にいたっては、障害者の1%以下しか仕事に就いていなかった。1959年に、インド政府により最初の障害者公共職業安定所が設立されて以来、たった10万人の障害者しか雇用されなかった。1977年ころから、政府部門や公共部門の事業には障害者雇用枠が設置されたが、低い役職しか与えられず、障害者は高い役職に就くものではないという固定観念を、政策決定者や政府関係者は明らかに持っていた。

独立して40年以上経っても、インドには障害者の権利を守る法律は制定されていなかった。道路、建物、交通機関なども、障害者にとって利用できないものばかりだった。「アクセシビリティ」という言葉すら誰も聞いたことがなかったのだから！障害分野においても、視覚障害者や聴覚障害者のための団体、脳性マヒ協会、精神薄弱児親の会など、いくつかのグループに分かれていた。彼らは、個別には素晴らしい活動をしていたが、一緒に活動することはなかった。さらに、非障害者が障害者支援を主導し、彼らの活動は主に障害児へのサービス提供に特化していた。それにも関わらず、これらのサービスは、障害者の権利に焦点をあてたり、ア



クセス可能な建物を保証したりしていなかった。さらに、これらのサービスのほとんどは都市部に集中し、地方には届いていなかった。政府の役割は、NGOに助成金を与え、障害者支援機器を提供するといった福祉施策に限定されていた。教育、就労、交通、都市開発、女性や子どもなどの開発を担う各省庁は、障害に取り組んでいなかった。障害に関する問題認識は、ほとんどなかった。このような状況で、ジャビッド・アビディは、インドにおける障害概念の変革を目的とする、広範な障害者権利運動を思い描くようになった。

アビディは、1965年6月11日に、ウッタル・プラデシュ州のアリガーで中流階級の家で生まれた。生まれたときに二分脊椎症と呼ばれる先天性の脊髄の病と診断され、15歳で車いすを使うようになる。1985年に、マス・コミュニケーションを学ぶべく奨学金を得て米国に留学した。ジャーナリストとして成功するという夢を持ってインドに4年後に帰国した。自分の経歴なら大手新聞会社のどこでも簡単に合格すると思っていた。しかし、現実はその甘くなかった。彼は6ヶ月間仕事を見つけることができなかった。アビディは、この時の経験をこう振り返る。「彼らは私の経歴をみることを拒否した。代わりに、彼らは私の車いすをじろじろ見ようとした」。でもアビディは諦めなかった。フリーのジャーナリストとして、まずは小さな地方紙から始め、徐々により有力な新聞社へと活動を広げて行った。彼は、政治家、俳優、事業家、大臣、そして首相にまでインタビューを行った。そして1991年にラジブ・ガンジー元インド首相の未亡人、ソニア・ガンジーとの予定外のインタビューの席で、新しく設立されたラジブ・ガンジー財団で障害者部門を立ち上げたくないか、と聞かれた。彼はこの要請を受入れた。それは、「自分がジャーナリズムを辞めてもこの業界には何の影響もないが、自分がソニア・ガンジーのオファーを断ったら、今まで怒りを感じていた様々なことから背を向けることになる」からだった。「それは自分が障害を抱えていることへの怒りではなく、障害者を見る社会の目に対する怒りだった」。そして1992年5月に、ラジブ・ガンジー財団に参加した。

障害者権利運動の誕生

1994年3月17日、ワシントンとニューデリーの間で衛星による会議が開かれ、アビディはインド側の代表を任された。障害を持つアメリカ人の政治的な目覚めを描いたジョセフ・P. シャピロの「哀れみはいらない」に関して議論が行われた。インド側からは、障害者セクターの幹部クラスが多く出席していた。衛星会議の後、インド側の参加者でディスカッションに熱が入り、アビディは「今、ここでインドの障害者権利運動を始めてはどうか、今が決断のときではないか」と熱を込めて提案した。幹部リーダーたちは、そのアイデアに賛同した。そしてついに1994年4月3日に、インドで最初の包括的な障害者権利擁護グループとして、「障害者権利グループ (DRG)」が誕生した。

障害法の成立、1995年

障害者権利グループが最初に取り上げた主要問題の一つは、国会での障害法の成立であった。懸命に政府に働きかけ、記者会見や会議、抗議運動や座り込み、大通りでデモなども行った。障害分野で法案成立を望まないグループからの反発さえあった。障害者権利グループの努力は報われて、1995年12月に障害者法（機会均等、権利の保護、完全参加）は国会を通過し、1996年2

月7日に成立した。インド国内で、障害者に対して統合、平等、権利が主張されたのは、これが初めてだった。



権利擁護団体・全国障害者雇用促進センター（NCPEDP）の設立

雇用の特化した団体を設立する構想は、ラジブ・ガンジー財団の会議中に形成された。アビディは、雇用こそ、法律を履行する上でもっともレバレッジが働くポイントと考えていた。また雇用問題を主張することで、障害者のイメージをチャリティーや福祉から、経済や開発そして平等な権利へと変えるであろうと考えた。そこでアビディは、全国障害者雇用促進センター（NCPEDP）を設立した。理事会に、産業、政府、NGO分野の高官を招待した。そして1997年には、センターの事務局長としてアビディが加わった。

革新的なアプローチと戦略

NCPEDPが設立されたとき、多くの人が人材派遣センターのような役割を担うようになっていた。しかしアビディは、他の障害団体の多くが既に実施していたサービスの提供は行わない、とはっきり決めていた。政策提言と権利擁護を担うことこそが、社会に最も多くのインパクトを残し、より大きな変革を生むと思っていた。

また雇用は単独で考えることができない、とも確信していた。彼が主張したように「アクセスがインドの障害者のエンパワメントのために必要な絶対的で基本的な要素である。アクセスがなければ、教育も雇用も不可能である。そしてこの3つは、適切な法律と政策がなければ不可能である。このように、4つすべてが実現されるためには、社会の認識が最も重要だ」。これが、NCPEDPが主要5分野、つまり啓発、アクセス、教育、雇用、法律、で同時に活動していた理由である

NCPEDPは、ビジョンを共有する為にネットワークを広げることを決めた。最初に、国を5地域（東西南北と東北）に分けた。それぞれにコーディネーターが任命された。そして1999年に、権利擁護推進のため、NCPEDPは連邦直轄地域を含む全州のパートナーと協力し、障害団体ネットワークを創設した。これは全国障害ネットワーク（NDN）と呼ばれた。NDNは、現在、インドの320県にまで広がっている。NCPEDPはまた、自分たちのネットワークを通して啓発を進めるだけでなく、障害を自分たちの政策や制度にくみ入れるために、特に教育、雇用、建築、情報技術、人権、そして法律の分野のトップ団体と、分野を超えてパートナーシップを

発展させた。

NCPEDPは、情報は力であると考えてきた。NDNは、主に障害者に情報を配信するために使われた。送られた情報には、政策文書、研究報告、発生している様々な開発に関する情報、定期的なキャンペーンのアップデートなどが含まれた。これによって、変革の風が吹き始めた。キャンペーンや集会の報告、訴訟の活動情報までもが国中から寄せられるようになった。インターネットがさらに一般的となった2003年には、NCPEDPは大規模な情報伝達の保証を意図したウェブサイトで、「障害ニュース&情報サービス」なるニュース・サービスを開始した。

NCPEDPは、自分たちのすべてのキャンペーンで、メディアを対等なパートナーとして扱った。障害者に影響をおよぼす問題に気づかせるために、メディアに対して常に特別な配慮を行ってきた。結果として、国中の新聞やテレビが、NCPEDPが提供する問題すべてを取り上げるようになった。これは、障害者問題を社会に浮き彫りにさせるだけでなく、政策立案者にも大きなプレッシャーを与えた。

NCPEDPが引き受けた権利擁護キャンペーンの多くは、自然に始まったものであった。それらはニュースや寄せられた苦情から発生したり、また時には、手紙や電話などから扇動されたりした。しかし、キャンペーンで採用されたアプローチは、至って計画的に行われた。まずNCPEDPのスタッフが、問題点に関連したありとあらゆる情報とデータを収集し、非常に簡潔な報告書をまとめた。焦点を絞った研究は、NCPEDPの最大の強みになった。そして、望む成果を得るためにとった戦法は、体系だった計画に従った。まず、関連機関に手紙が送付された。先方から返答がなければ、キャンペーンは第2ステージに進展した。障害者コミュニティやメディアを動員した、署名運動によるキャンペーンであった。これでも結果が出なければ、非暴力的座り込みや集会の形に強化された。最終的な戦術は、ハンガーストライキか死に至るまでの断食抗議であった。いくつかのキャンペーンで訴訟も起こした。大半の場合、NCPEDPの要求に同意する最終決定を行ったのは、担当大臣か首相によってであった。

NCPEDPの主要成果のいくつか

障害者にも教育の機会を：1998年に、NCPEDPは、インドの全大学の頂点にある大学認可委員会（University Grants Commission）に障害者の高等教育の機会提供について訴えた。結果として、二つの画期的な計画が提案された。一つは、「特殊教育の教員準備研修」であり、教員が障害学生に対応できるよう導入された。二つ目は、「特別なニーズを持つ人の高等教育」であり、大学や短大に障害ユニットを設置し、障害を持つ学生に対してアクセスや機器を提供するものだった。2004年に、NCPEDPは通常学校や大学で、障害者の教育事情を調べる全国的な調査を実施した。その結果に基づき、NCPEDPは、人間開発省の大臣に詳細な計画を提出した。その結果、2005年3月21日に、大臣は国会で、2020年までに、すべての教育機関が障害者を受け入れられるようにすることを提案した。人間開発省の政策に組み込まれたことは、障害者教育にとって非常に意義のある一歩であった。

障害者の雇用促進：NCPEDPは、障害者の雇用状況を大きく変えるために、商業組合との協力

を試みた。インド産業連合は、この呼びかけに応え、1998年に連合の社会的課題として障害を取上げた。2000年には、いくつかの著名な情報通信会社の最高経営責任者を集めた会合を開いた。その結果、この会社の多くは現在、障害者を積極的に雇用している。2004年には、障害者に対し、行政機関は不当な差別を行っているとして、キャンペーンを実施した。障害者は、求人の対象にされないか、能力と経験より低いポジションに就くように強制されていた。NCPEDPは、正義と明確な被差別の政策を要求した。結果として、認定された職種のリストが見直され、障害者に適したものとしてより多くの業務が認められた。

公共施設のバリアフリー化：1999年、NCPEDPは、建築家の教育課程に障害を含めることと建築委員会を説得した。2001年にスティーブン・ホーキング教授が来印した時、アクセシビリティに対する注目が一気に高まった。NCPEDPは、障害者のアクセス問題を大きく取上げ、結果として、ホーキング教授が訪問を希望していたすべての歴史的建造物に、スロープが早急に付けられた。その後、インドの考古学調査会は、全国の歴史的建造物を、障害者も利用可能にするための方針を打ち出した。そして2004年に、NCPEDPは、アクセシブルな投票ブースという重要な戦いで勝利した。2004年4月19日、最高裁判所は、2004年の総選挙で投票ブースにスロープの設置を命じた。2004年10月1日には、点字電子投票機も試され、採用された。

適切な法律と実施によるエンパワメント：NCPEDPが組織化した全国規模の主要キャンペーンの一つが、2001年の国勢調査に障害者に関する質問を含めるよう促したものだ。もう一つの画期的な成果は、2003?2004年の連邦政府予算に障害問題が含まれ、所得税控除額の引き上げ、障害者の支援機器や用具に対する関税の引き下げが行われた。もっと良かったことに、翌年は完全に撤廃された。NCPEDPによるその他2つの政策的イニシャティブとして、国家人権委員会の議題、ならびにインドの第10次、第11次の5カ年計画への障害に対する適切な提言案に、障害者の権利を入れるということに関わった。ごく最近では、NCPEDPの直接的な働きかけの結果として、2007年10月1日に、インドは国連障害者の権利条約(UNCRPD)を批准した。

社会の意識変革の向上：毎年12月3日は、国際障害者デー(WDD)とされているが、1997年にNCPEDPは、「自由への歩み」と題したプログラムを導入してWDDに新たな意味をもたらした。障害者が自由を手に入れるために歩んだ長い道のりを表現した象徴的なイベントであった。NCPEDPは、NGOに国中で同じ様なウォークラリーを開催するよう促した。「自由への歩み」は、毎年象徴的なイベントとなった。国際障害者デーは、障害者が祝うために集い、楽しみ、満足感を表わし、自分たちの集団の力を披露する機会とみられている。1999年に、WDDは全州および連邦直轄領が、共通のテーマとロゴを使用して記念することでさらに発展した。テーマは毎年新しくされ、NCPEDPは、ポスター、映像、テレビ・スポットを通して、そして、有名人に運動を宣伝してもらって、遠く広くテーマの狙いが行き渡るようにしている。

NCPEDPは、多くの課題に直面してきた。取り上げた問題の多くは、政府当局から強烈的な反対を受けて、聞き入れてもらうのに長期の抗議を必要とした。インド政府にとって、障害は未だ

優先事項ではなく、ほとんどの省庁で障害は議題に上げられていない。障害者をメインストリームに統合するためには、まだやるべき多くの仕事がある。アビディは、障害がさらに国の課題として格上げされるように、UNCRPDと第11次5カ年計画の実施を保障するために、全国規模の勢力を創り出そうとしている。このように、NCPEDPは無視できない勢力としてあり続けている。NCPEDPの影響を直接的、間接的に受けて、広範な障害権利運動の課題を前に進めている多くの若手リーダーがいる。



ジャビッド・アビディ 43歳 1998年からインドのアショカ・フェローであり、全国障害者雇用促進センター（NCPEDP）の名誉所長、創立理事。二分脊椎として生まれ、医療ミスで車いすユーザーとなった。それにも関わらず、インドの6,000万人以上の障害者に対する政策活動と経済的機会の提供に影響を与えた。

NCPEDP: National Centre for Promotion of Employment for Disabled People

Mail: A -77, South Extension Part II, New Delhi - 110 049, India

Phone: +91 11 26265647, +91 11 26265648

E-mail: secretariat@ncpedp.org

Web: www.ncpedp.org, www.dnis.org

オラ・アブ・アル・ガイブ

スター・オブ・ホープ協会／パレスチナ
2007年よりアショカ・フェロー

障害を持つ女性たちの希望の星 キャタム・マル
カウィ著

現代の先進国では、障害者を受入れるために、
周囲の環境を変えることによって障害問題に取り
組んできたので、障害それ自体は必ずしも問
題にならない。

しかし、障害者が地域社会で機能するレベルに
達するまで、まだやるべきことが多く残されて
いる途上国では、障害は一般的に問題と見られ
ている。

「問題」の背景には、今まで障害者の権利を認
めてこなかった古い文化や慣習、そして障害者
が直面する様々な困難に対する社会認識の希薄
さがある。

さらに障害者が女性の場合、障害を持つ女性はジェンダーと自身の障害に基づく両方の差別に
直面しているので、障害は二重に問題となる。

彼女たちが良い教育を受けることが非常に難しいことは分かっているので、障害を持つ女性の
現状は国レベルで早急に考慮しなければならない課題である。さらに、障害を持つ娘がいて
それを認めるのが恥ずかしいと感じる家族がいる。家族の恥と考え、彼女たちを隠してしまう家
族もいる。

このような状況に関わらず、差別という事実を受け入れることを拒否し、地域社会の生産的な
一員になる権利の意識と、ポジティブな変化を達成しようと戦ってきた女性たちがいる。彼女
たちの目的は、障害コミュニティで有名になることではなく、人類すべての基本的ニーズと
して、受容され、教育の基本的権利を獲得し、愛し愛される権利を持つことである。

この世界（実際には中東と障害という2つの世界）でもっとも傑出した人物は1人の女性である
。彼女は行く先々でポジティブな変化を起こしている。

彼女は、オラ・アブ・アル・ガイブ。そして彼女の名前は、パレスチナの空で星のように輝い
ている。自身の障害を弱さとしてではなく、むしろ強さの源として利用するこの身体障害の女



性は、母国で女性障害者をエンパワーさせる運動において卓越したリーダーとなった。

「障害が夢を実現するための励みになった」、オラ

オラは最近、念願だった障害を持つ女性を支援する団体「スター・オブ・ホープ（希望の星）」をパレスチナの主要都市のひとつ、ラマラに立ち上げた。

当事者として今まで豊富な経験を積んできたオラは、「辛いことも、学んだことも多かった。そしてこれからも多くのことを学ぶでしょう。私の経験は、私だけのものじゃない。助けを必要とし、自らの権利を獲得しようとする多くの女性と共有しなくては」と語る。

パレスチナの町ナブレスで生まれたオラは、わずか12歳で人生の劇的な変化に対処しなければならず、車イスを余儀なくさせる恒久的な障害を受け入れなければならなかった。当時のナブラスの学校は、障害児を受け入れる設備が整っていなかったため、車イスになって3年間ほど学校に通うことができず、自宅に居ることを余儀なくさせられた。このような状況に納得できなかったオラは、教育を受けるための代替案を模索し続けた。

彼女にとって最良の解決方法は、パレスチナの別の都市ベツレヘムに引越し、イギリス人女性宅に下宿しながら私立学校に通うことだった。それはアラブの少女として、もちろん障害者としても、非常に珍しい行動だった。

「伝統的なアラブの家庭にとって、こんなに若い娘が、生まれ故郷を離れて学校に通うことを説得することは、特に障害者の場合、決して簡単なことではありません」とオラは説明する。「それにも関わらず、教育を通して良い人生を送りたいという私の決意と願望は、家族を説き伏せるには十分なほど強かったのです」と彼女は付け足した。

ベツレヘムの私立校では、最初、彼女を聴講生として入学させた。しかし一学期が終了し、全生徒の中でトップの成績を納めると、彼女は一般学生として受け入れられた。しかし彼女の学費は家族にとって高額過ぎたので、勉強を続けたいという彼女の夢を脅かしていた。自らの権利を守るため、オラはパレスチナ社会問題省に行き、成績優秀者として政府に奨学金を要望した。また自宅から離れて暮らしていたため、オラは授業料以外の費用も必要としており、他の資金を見つけなくてはならなかった。学生時代に、障害のある学生と運動をして、彼女はドイツの障害者のための団体と知り合いになった。彼らは、彼女の知性、そしてパレスチナの障害学生コミュニティを代表した彼女の活動、特に障害者に対する学校設備のバリアフリーの戦いに感心し、彼女を全面的に支援すると言ってくれた。高校時代は、ベツレヘム大学の理学療法学科と協力して、いくつかの有名な児童書に障害を持った登場人物を含める活動にも取り組んだ。

自身の障害に対処し、また同時に自分の権利のために戦わねばならなかったため、この数年間は彼女にとって一番過酷な時期であった。けれども、彼女は多くのことを成し遂げることができた。自立心を得、新たな身体的制約に順応し、新たな症状を理解して受け入れることを学んだ。そしてこの行動は、彼女の周りにはいる親しい人々の女性障害者の能力に対するイメージを大きく変えた。

成功にむけて熱意を絶やすことなく、プロジェクト・マネジメントを修士論文として、2003年にパレスチナにあるビルゼイト大学大学院を修了した。

大学時代にオラは、再び障害者のためのアクセス欠如の問題に直面せねばならず、アクセシブルなキャンパスの権利を求めるキャンペーンを開始した。彼女が尽力した権利擁護活動により、キャンパス建設委員会の委員に起用された。大学から任命され、障害者のニーズをキャンパスに対応させるためにエンジニアと働いた。それには多くの立案や事業管理も含まれていた。



「このレベルに到達することは、私には簡単ではありませんでした。アクセシビリティにしる、コミュニティの壁にしる、多くの障壁に直面し、行く先々で闘わなくてはならなかったのです」とオラは語る。

リハビリテーションセンターで働いていた時、障害の権利擁護者として素晴らしいファンドレイジング能力を発揮し、自らの身体障害が、命ぜられた仕事をする上で決して邪魔にならないこと、熱心な職員であることを証明した。

このことについてオラは、「私は戦士として生まれました・・・。自分の権利とすべての女性障害者のための戦士として。自分をエンパワーすることから始めて、今は他の人たちをエンパワーすることに向かっています」と語っている。

「当然のことを要求することは、何も恥ずかしいことではありません。私もここにたどり着くまで、当然のことを要求するために、可能性のある門をすべて叩きつけてきました。自分の権利に関係する何かを奪われるなら、私はこれからも同じような方法を続けて行きます」とオラは言う。

課題

他のアラブ社会と同様、過去数10年間に渡り、女性の平等に向けた取り組みが行われてきたものの、パレスチナ社会では女性に対する差別はいまだに蔓延している。そして障害を持つ女性に対する差別はさらに根深い。実際に、パレスチナの女性障害者は3つの重荷を背負っている。ひとつは女性であること、ふたつ目は障害者であること、そして最後に、武力闘争下で暮らしていることである。パレスチナ全国情報センターの調査によると、障害者の総数は107,700人で、うち女性は52,200人である。この大きな数にもかかわらず、彼女たちは障害者の中でもっとも脆弱で、かつもっとも守られていない。その多くは隠され、黙らされ、彼女たちの悩みは知られず、声を聞かれることもない。

統計情報の欠如と施行されない法律

2007年のパレスチナ統計局報告書によると、国民の5.2%が障害を持っている。しかし、障害を持つ男性、特にインティファダ（訳注：イスラエルに対するパレスチナのアラブ族による反乱）中に障害を負った男性に対する態度は、あまり差別的ではない。パレスチナで障害を持つ女性は、教育への機会、就職、結婚、社会的地位など、生活のあらゆる場面で偏見や日常的差別を受けやすい。

ほとんどの人々、そしてほとんどの社会において、障害者に性別の違いはないと考える傾向がある。男性中心社会では、障害を持つ女性はより不利な立場に置かれる。女性のもっとも重要な役割が、結局のところ、出産と育児とされている地域もある。それはつまり、妻や母であるから社会的地位が築かれることを意味する。そのような地域や社会では、障害者は子どもを生み、そして育てることができないとみなされるので、ほとんど価値がないと見なされる。時には、性とは無関係と見なされることさえある。

障害者は身体的、精神的、性的なあらゆる種類のひどい虐待を経験する。統計では、障害を持つ女性の方が、障害のない女性に比べて性的暴力に遭う確率が高い。どの社会でも外見を重視しているので、女性障害者は、障害のない女性より価値が劣ると思い込まされている。この否定的自画像が、被害者となっても沈黙したり、被害者だと信じることを拒んだり、また容疑者の起訴の欠如と相まって、性的虐待の危険性を高めている。障害を持つ少女や女性に対する身体的、性的な暴力は、家族内や施設において、また社会全体で憂慮すべき割合で発生している。

さらに、障害を持つ女性の権利を考えてくれるプログラムや団体が、パレスチナにはない。いくつかは限定的な医療サービスを提供しているものの、パレスチナの一部に地域が限られており、また一定の年齢に達するとサービスが受けられなくなってしまう。

オラは、パレスチナ全土を見ても、女性障害者を中心に据えたプログラムは存在しないと断言している。「私は20年間障害とともに生きてきた。そのようなプログラムがあれば、知らないわけがありません」。

何よりもまず、パレスチナは占領下にある国である。法律は書面上存在していても、政治的、経済的、社会的ないろいろな理由から施行されていない。特別なニーズをもつ個人を対象とするパレスチナの法律は、1999年に制定されたものの、いまだに施行されていない。この状況を変えるためには、地元のすべての団体が協力して取り組む必要がある。ただ残念なことに、協力する準備ができていない団体はほとんどなく、問題が実際に存在していることを認めないことさえある。

このような課題と、障害を持つ女性に対するサービスの欠如がきっかけとなり、オラはスター・オブ・ホープ（希望の星）を設立し、障害を持つ女性への差別のない地域社会づくりのために働いている。

しかし、成果を上げるためのすべての努力にも関わらず、彼女はいまだにさらなる努力を強いられる問題に直面している。障害を持つ女性の正確な人口統計と彼女たちのニーズが主な問題で、それに加えて、女性障害者が必要とする基本的な医療とリハビリテーションを提供するための財源が確保できていないことである。

専門家としての経歴を通して築いてきた、国際的な障害者団体のネットワークを通じて資金を募っていると説明しながら、「資金源を見つけるのは至難の業です」とオラは言う。

他の問題は、障害を増大させ、機会を限定する環境的な障壁である。環境改善の欠如やアクセシブルな建物の不在は、障害を持つ女性の行動の自由を奪ってしまう。すべての障害者に対する輸送手段は、市民権の行使と社会参画における重要な鍵となっている。女性は一般的に、また女性障害者は特に、男性より移動の自由が限られている。車に乗る機会も少なく、文化的、社会的な背景により家から出られないことが多い。パレスチナの公共交通機関は、障害者のニーズを考慮していない。そして私的な交通手段があるとすれば、家族の男性陣に使われるのが普通である。

障害を持つ女性が直面する最大の課題は、女性障害者の権利に関する周囲の認識が低いこと、持続的でポジティブな変革を行う支援体制が存在しないこと、とオラは説明する。パレスチナの社会は、残念ながら、障害を持つ女性に対する態度の変革を受入れる社会的準備がいまだにできていない。そのために、彼らの多くは排斥されるか、自宅で孤立するか、施設で隔離されている。

方策

障害を持つ女性が、社会的、経済的、政治的、文化的な生活のあらゆる側面で参画できるように積極的に促し、社会に訴えかけることがオラの目的だ。彼女は自分の団体を、制度的な権利擁護活動、政策立案者へのロビー活動、そして障害を持つ女性に対するサービス、支援、情報、教育の提供を通して、パレスチナの女性障害者を全国的に代表するような団体にしたいと思っている。目的を共有する他の市民社会団体とのネットワーク化も、地域社会レベルで彼女に対する支援を確かにするための手段の一つである。

戦略

目的のために努力するにあたって、彼女は2つの戦略を掲げている。

最初の目的は、パレスチナの女性障害者への総括的な支援の提供である。2番目の目的は、全国・地域レベルで行う啓発と意識改革キャンペーンを通じた女性障害者の人権と市民権のキャンペーンである。彼女の戦略を実施し、彼女の構想を宣伝するための制度的な枠組みは、女性障害者が立ち上げ、女性障害者が主として運営している市民社会団体、スター・オブ・ホープである。これはレバント地方（訳注：地中海の東側沿岸国、キプロス、エジプト、イスラエル、レバノン、シリア、トルコを指すもの）だけではなくアラブ全域においても、最初で唯一の女性障害者が運営する女性障害者のための市民社会団体である。

オラの市民社会団体は、女性障害者自身の実体験に基づいて、非常に現実的で具体的な方法で女性障害者の苦境のために解決策を提供している。彼女たちは、オラを筆頭に女性障害者のエンパワメントのロールモデルであり、変革を可能とする生きた証である。オラは、理事たち共通の悩み、責任、経験や技能が、使命達成のために彼女を支える土台であることを確信している。

自分の団体を通して、女性障害者の人数やニーズを調査するために、オラはパレスチナで初となる資料センターを設立する予定である。これは、女性の間で障害の原因と広範囲にわたる影響の除去に立ち向かう際に土台になるだろう。

スター・オブ・ホープのサービス

スター・オブ・ホープは、オーダーメイドで個々の障害の種類、ニーズや興味に合わせた女性障害者のための包括的なサービス・パッケージを作った。サービスの内容は、心理カウンセリング、能力開発、技術向上、自己啓発トレーニングなどである。これによって、女性障害者はニーズを自ら主張することを学ぶ。スター・オブ・ホープは、障害を持つ女性や少女が一般社会で受容されることを保障するための知識、情報や技術を生み出すために、草の根レベルで働いている。それに加え、女性障害者に対する偏見が根強い地域にある社会的孤立をなくすために、包括的なアウトリーチ・プログラムも実施していく予定である。さらに、オラと彼女の団体は、男性カウンターパートや他の人と同じように、女性障害者が自らの能力を高め、市民社会で社会的責任と生産的役割を担うことができるように研修サービスを提供している。

継続的な啓発とロビー活動は、法改正を実施するために必要な圧力をかけるため、また政策立案者に障害を持つ女性の権利を認識させたり、彼女たちの社会参加を促進させたりするのに有効な手段である。そのためオラは、社会認識を高めるため、そして女性障害者に対する支配的な態度を変革するために権利擁護キャンペーンを準備した。

オラの功績

スター・オブ・ホープは、パレスチナで女性障害者の権利を向上させた初めての障害者団体である。今までに多くの女性の生活向上に成功し、そのすべての人が、この変化はリーダーであるオラ・アブ・アル・ガイブのビジョンによると考えている。

「スター・オブ・ホープで働くようになって、自分に自信が持てるようになりました」と語るのは、スター・オブ・ホープのスタッフで視覚障



害のシャタ・アブ・スロールである。「仕事に就くことで自分の可能性や能力を発揮する機会が得られました。また、他人と協力し合うことや課題に立ち向かうコツをおおいに学びました。オラは非常に柔軟で素晴らしいマネージャーであり、彼女のおかげで、職場で尊敬を集め業績もあげることができました」とアブ・スロールは結んだ。

オラは、モハマド・アブ・ガイブと結婚し、彼との間に5歳の息子がいるが、彼女は自分の人生を、女性障害者の権利が守られるまで休むことない地域社会での闘いである、と語った。

「私は明けても暮れても戦い・・・、自分の職務がまっとうされるまで戦いをやめません」とオラは宣言する。「私は、伝えるべきメッセージがある障害を持つ女性です。このメッセージは、家族、同僚、スター・オブ・ホープ、そして障害分野のすべての活動家を通して世界中に伝えられるでしょう」。

オラ・アブ・アル・ガイブ

パレスチナのナブラス生まれ。2007年よりアショカ・フェロー。パレスチナ初の女性障害者による当事者団体の創始者であり会長である。12歳の時に障害を負って以来、彼女の人生は大きく変わった。何があってもあきらめない強い意志と向上心で学位を手に入れた。障害、開発、リハビリテーション・サービスの分野で14年以上のプロジェクト運営経験がある。全国レベル、地域レベルの両方で、障害マネジメントのプログラムに幅広く参加している。

Stars of Hope Society

Mail: Palestine - Ramallah - Al-baloo, Al Mahsiri commercial building 3rd floor

Phone/Fax: + 972 2 2422345, +972 2 2420840

E-mail : info@starsofhope.org

Web: www.starsofhope.org

キャロライン・ケイシー

カンチ/アイルランド

2006年からアショカ・フェロー

部屋の中のゾウ

アンナ・ギャラガー著

アイルランドの背景

「障害とは人間社会に住む象のようなもの」と、障害と社会の関係の強化をライフワークとしているアイルランド人、キャロライン・ケイシーは言う。キャロラインは、社会起業家で「カンチ」の創業者、兼CEOだ。「カンチ」とは、彼女がインド横断の旅で乗った象の名前に由来している。

世界には障害とともに生き、働いている7億人以上の人々がいる。アイルランドでは、現在、総人口の10%強が障害を持って暮らしている。

「障害は、貧困やエイズのように治したり撲滅したりすることはできない」とキャロライン・ケイシーは説明する。「障害をなくすことが目的ではありません。目的は、障害に対する社会の認識を変えることです。社会が態度を改め、障害者を受け入れ、違いを認めるようになれば、障害を負うのは社会です」。

4人に1人のヨーロッパ人は、障害をもつ家族がいると証言している。これは障害者の85%は後天的に障害者になったという事実と相まって、社会の多くの人々に障害との重要な接点を持つことを示している。

「国連障害者の権利条約を除いて、目に見える国際的リーダーシップはありません。ボノやネルソン・マンデラのような人はいません」とケイシーは指摘する。なぜか？ 障害は、幅広く複雑な問題です。それは異なるものに対する恐れや知識の欠如、誤解によって遠ざけられている。良薬はないし、向かうべき分りやすく感銘的な目標を提示していないし、それ故、居心地の悪いトピックとなっている。

メディアの不正確な偏った障害の表現により、このような誤解は誇張され、強調されていく。障害者の正確なイメージが伝わる適切な表現がなければ、世界最大の少数派グループは、見えない存在であり続け、差別は続いていくだろう。



障害者の排除や無視は、雇用の分野でもっとも顕著である。障害者の能力は向上しているにも関わらず、雇用率は驚くほど低いままである。アイルランドの障害者の実に70%は職に就いていない。2006年のアメリカの障害者の雇用率は、労働年齢の非障害者の雇用率が77.9%に比べて、37.7%である。

影響は広範に及ぶので、これらの数字は深刻な問題だ。雇用は、単に仕事だけの問題ではない。自己の価値を高めるものである。もし障害者が無職であり続けられれば、国の支援をもっと求めるようになるだろう。これが逆に障害者の自尊心を傷つけ、社会から阻害し、障害者は能力がなく社会の負担であるという考えを強めることにつながる。

カンチのアプローチ

差違は重要で、尊重されなければならないというカンチのビジョンに基づいて、カンチは社会の障害に対する考え方を変えることによって、社会の態度を変えることを目指している。そこには、ポジティブで問題解決型の思考が含まれる。カンチは、障害を国際的にも課題とし、慈善から適切な機会が与えられれば障害者が貢献できることに焦点を移すために、企業やメディアと働いている。事業は2つあり、ひとつはビジネス界で障害者の認識を変える「アビリティ・ビジネス」。もうひとつはメディアと広報、ビジュアルアートを通して変革を推進する「ビザビリティ（可視化）」である。

新しい考え

2004年にカンチは障害者の雇用環境を変えるため、ビジネスリーダーを巻き込んだ「アビリティ・アワード」という革新的な方法を発案した。この賞は、どこでも通用する優良事例、真似できるロールモデル、模範となるリーダーシップの確立を目指す集中的情報キャンペーンとユニークな審査手法を提供している。カンチは、障害者に企業が門戸を開く主たる利点は、市場へのアクセス、才能へのアクセス、スタッフの維持、企業イメージなどであると解釈している。それが障害ビジネスモデルだ。

国際的なビジネス環境が、障害者に関し変化の事例を提供していることは否定できない。技術移転率の減少、継続的な労働力の高齢化、消費者需要の増加、そして市場をめぐる競争の激化等の要素が、障害者を雇用し、才能と可能性を開発し維持する世界的ビジネスの事例を支えている。

アビリティ・アワードは、障害者の雇用とインクルージョンのベスト・プラクティスに対する最初のアイルランド企業賞である。障害者支援の賞ではない。障害者のために社会変革を起こす可能性を示した非常に成功している企業賞制度である。

この賞はアイルランドのみでなく、海外も含め小規模、非営利、法人、社会起業などあらゆるビジネスが対象となる。それぞれがポジティブな変革に影響を与える役割を持っている。

O2アビリティ・アワードは、集中的な7段階の学習プロセスを通して企業をリードしていった

。

1. 興味がある団体による記入済みのオンライン応募用紙の提出
2. 初期審査：もっとも評価が高い75団体の選出。選ばれた団体に結果を通知
3. 75団体の1日間のネット上審査。その結果をもとに、審査員による評価レポートの作成
4. 予備審査委員会が優良事例50団体を選考
5. 最終審査委員会が、民間企業、公的機関、小規模企業の3部門で勝者を決定
6. テレビ中継された受賞式で勝者の発表とその後の祝賀会
7. 改善点に関する団体へのフィードバック



ベスト・プラクティスは6つの分野で審査される。

リーダーシップ

環境面のアクセシビリティ
顧客サービス
採用活動と選考
学習、開発と革新性
持続性と健全性

アビリティ・アワードは集中的情報キャンペーンを採用している。

アイルランドの日刊紙アイリッシュ・タイムズでの特集記事
アイルランドの主要テレビ局RTEによるゴールデン・アワーの表彰式のテレビ生中継
広範なラジオ放送

アビリティ・アワードは、企業に変革の方法を提供することを模索してきたが、彼らはより大きなものも目指している。それは、ビジネスを通して、障害者のために社会自体を変えること。もし障害者が、消費者として、顧客として、従業員として捉えられるようになれば、障害者を排除する意識は組織から消えて行くだろう。企業が障害によってもたらされるメリットに気づけば、必然的に社会全体の意識も変わっていくのだ。

進捗と成果

アビリティ・アワードを通して、カンチはこれまでにない方法でビジネス・リーダーシップに関わっている。アビリティ・アワードは、ビジネス用語を用いて、障害者をビジネスに巻き込む事例を作って、彼らを施しや寄付に依存させない、機会を提供するビジネスを扇動している。アビリティ・アワードは、ビジネスリーダーの行動に影響を与えたので、今度は彼らが真の変革に影響を与えるであろう。

現在アイルランドには、100以上の「アビリティ企業」、つまり100以上の変革の勇者がいる。これによって、立派な慈善事業としてではなく、堅実なビジネス・ベンチャーとして、ビジネス界で障害を際立たせている。この変革は、単に企業の社会的責任（CSR）、または人材育成、多様なイニシアティブに関するものだけでなく、戦略的構造改革に関するものであり、障害をビジネスのあらゆる場面に浸透させる方法を、リーダーたちに理解させることでもあった。

以下に注目すれば、賞の成功の全体像が分かる

事業開始後3年間で、労働人口の15%が賞の影響を受けた。

賞に関わった団体の65%で、障害者雇用に対する活動、方針、採用プロセスが変わったという証拠がある。

アビリティ・アワードのテレビ放映の視聴率は27%で、巨大な啓発媒体となって、社会情勢を変えるのに貢献した。表彰式はアイルランド大統領、首相、主要なメディア出演者がホストとなり、ポップバンド、ザ・コアーズのアンドレア・コアーやサッカー選手のロイ・キーンなどの有名人が参加した。

アビリティ・アワードの受賞企業は、他のアイルランドの障害支援活動に自主的に参画している。

2008年に「アビリティのビジネス（The Business of Ability）」と題した本を製作し国内・海外向けに配布した。（ビジネスの成功例と事例研究をまとめた指南書である）

カンチのビジネス手法としての成功は、アビリティ・アワードが海外にも進出していることで

も証明されている。O2の親会社であるテレフォニカを通して、カンチはこの賞をスペインでも展開する予定である。テレフォニカは通信・情報・娯楽ソリューションを提供する電話通信分野の世界有数の通信統合管理会社である。2億4,500万人以上の顧客を持ち、世界37カ国で展開している。

キャロライン・ケイシーが2006年の世界経済フォーラムで「ヤング・グローバル・リーダー」に選ばれた時、カンチの夢は膨らんだ。それ以来、彼女は毎年ダボス会議に招かれ、障害にまつわる様々な問題について発言してきた。この国際的経験は、キャロラインが2006年にアイルランド人として初めてアショカ・フェローに選ばれ、2007年にはアイゼンハワー・フェローにも選ばれたことと相まって、彼女にアイルランドを出て、海外で障害者がどう扱われているかを見る機会を提供した。この経験は、彼女にカンチのアプローチがいかにユニークかも教えてくれた。また、キャロラインは障害が国際的なアジェンダから漏れていることを痛感し、カンチのやり方と理想をもってこれを変えるために努力することを決意した。テレフォニカとともに、スペインがO2アビリティ・アワードを認可したことは、この夢の達成の第一歩である。

得た教訓

社会起業家になるには、ありとあらゆる課題に対処できなければ、とキャロラインは信じている。失敗を恐れてはいけない—それは過程の一段階にすぎない。「失敗にどう対処するかが問題なのよ」と彼女は言う。

他の人権問題と同じように、障害の世界を変えようとする、その世界独特の複雑に絡み合った問題と直面する。「企業や財団に『我々は障害者支援はやりません』と簡単に言われるとすぐ落ち込みます」と彼女は認める。十分な時間、資源、資金源を見つけることは常に戦いである。自分の団体を持続的に発展させ拡大していくこともまた難しい。

アイデアを国内のプラットフォームからグローバルに展開できたことは、カンチのこれまでの最大の成功であると同時に最大のチャレンジでもあると、キャロラインは認めている。

企業との連携は社会変革をもたらすのにとっても重要である。「社会起業家として私個人にとってもっとも大切なことは、人々の信頼を得ることです」とキャロラインは説明する。

ドリーン・マクネルニー氏、コミュニコープ・グループの創始者であるデニス・オブライアン氏、テレフォニカO2アイルランドの総責任者であるダヌタ・グレー氏、ロンドン市空港とバルバドス・サンディー・レーン・ホテルの出資者であるデルモット・デスモンド氏は、カンチの活動に強い影響を与えてきた。

カンチは参与や顧問委員会を設けることで弱点を補っている。「成長に従って、私たちが持っていないスキルや影響力を持った人たちに近づき、ともに働く必要がある」

障害を持っているか、もしくは障害に密接に関わる人たちによって構成されたご意見番が、カンチの活動や計画についての助言を行う。

障害分野は、非常に政治的であり、まとめることが難しい。より大きな効果を生み出せるよう、カンチはパートナーシップの創出を通して、障害分野でまとめ役となるよう努めている。

カンチのスタッフは、成功になくてもならないチームだ。

キャロラインの物語

キャロラインの社会起業家としての成功は、「カンチ」という名のゾウに乗ってインド国内をトレッキングしたことに始まるが、彼女の団体の哲学や文化は、彼女のユニークな生い立ちに由来する。子どもの頃、彼女は自分のことをちょっと鈍いだけで学校に通う他の子たちと同じように普通だと思っていた。17歳の誕生日に、自分の目が法律上、障害者と認定されるまで視力が落ちている治らない病気であることを知った。

普通の幼少時代を過ごして欲しいと願って、両親は視力のことを彼女には告げないことを選んでいて、車のレーサーになることが夢だった彼女にとって、眼科医が「それは不可能だ」と宣告したときの衝撃がとても大きかったことは想像できるだろう。彼女の辞書には「不可能」という文字はなかった。「いつでも方法はある」と彼女は説明する。

キャロラインは自分の視覚障害をできるだけ無視することを選んで、ユニバーシティ・カレッジ・ダブリンで考古学の学位を取った。続いて、マイケル・スモールフィット経営大学院で経営学の学位と、組織的ヒューマン・パフォーマンス・デザインの修士号を取得した。そしてアクセンチュアで経営コンサルタントとしてキャリアをスタートさせた。しかし、自分の視覚障害を会社にきちんと伝えることはなかった。

仕事を始めて2年後、28歳の時、彼女は壁に直面した。過重な仕事により、彼女の視力は一時的に酷く悪化した。だから、彼女は遂に自分の目は良くないという事実を受入れざるを得なかった。何か人生で他のことをやらねばならなかった。

マーク・シャナンドの『象に乗って旅をする』に影響されて、キャロラインは子どもの頃の夢を思い出し、本物の象使いになりたくて、象に乗ってインドを横断する旅を計画した。これは西欧の女性がこれまでやったことのない特別なことだった。

この冒険がファンドレイジングの可能性を秘めていることに気づき、彼女が障害者支援団体のために募った25万アイルランドポンド（訳注：約3,650万円）を活用する機関として、アイスリング財団（カンチの前身となる財団）を2000年に設立した。



キャロラインは、自身の職場での経験によって、障害や障害の捉え方に対するユニークな視点を得た。障害は全く誤解されている。目に見えにくいもので、人々を不安にさせ、同情を誘う。これこそキャロラインが変えたいと願ったものであり、これこそ今日カンチが行っていることである。

「時々思うの。もしもっと早くから自分の障害が素晴らしい財産だと気付いてさえいれば、どんなに多くのものを得ることができたか」と、彼女は言う。「私は、世界中の誰でも何処にいる人でも、障害があるからといって、また異なるからといって、見向きもされず、阻害され、取り残されて欲しくない。私は、だれもが同じチャンスと機会をもって欲しい。そうなるように、我々は、障害者は人間であるとまず理解しなければならない」。

「カンチの成功は、重要なリーダーシップを得るため、障害を異なる視点で見るため、彼らのユニークな能力によって達成された。必要とされる抜本的な改革をもたらすには、このような複雑な問題に創造的な起業家精神を持ち込めるカンチのような独創的な団体が必要なのです。

O2アビリティ・アワードの実施を通し、ビジネスと障害の連携を進める最初で唯一の指標をつくったカンチのおかげで、アイルランドは世界の注目を集めるようになりました。

境界を広げ、社会的通念に疑問を呈し、志を追い続けるカンチに私は幸運を祈っています。我々は皆、考え方を変わる時に来ているのです」。

ブライアン・コーワン（アイルランド首相）

キャロライン・ケイシーは、2007年にアイルランドで初めてのアショカ・フェロー、ならびにアイゼンハウワー・フェローとなった。社会起業家であり冒険家でもある彼女は、カンチの創設者兼CEOとして、障害に対する社会の考え方を変えることを訴えている。アビリティ・アワードの創始者であるキャロラインは視覚障害を持つ37歳。さらに、世界経済フォーラムのヤング・グローバル・リーダーも務めている。

Kanchi

Mail: Number One, 29/30 Lad Lane, Dublin 2, Ireland

Phone: +353 (0) 1 6340018

Fax: +353 (0) 1 634 0019

E-mail: Info@kanchi.org

Web: www.kanchi.org, www.theabilityawards.com

ンディエ・ダグ・グウェ・ディエ

セネガル運動機能障害者協会女性部／セネガル
2002年よりアショカ・フェロー

女性障害者のリプロダクティブヘルス 生きるためのロジック

グエデル・ンボッジ著 バレリエ・ウィルソン英訳

セネガルの背景

セネガルの憲法は、すべての市民に平等な権利を認めている。しかし現実には多くの経済的、物理的、そして心理的な壁が障害者の社会統合を妨げている。

家族省は、障害当事者団体やその他すべての障害分野で働く関係者と協働で、障害者のすべての問題に配慮した重要な法案を起草した。この法案はすでに承認され、私たちはそれが国会で可決されることを期待している。

WHO（世界保健機関）によると、障害者はセネガル人口約1,100万人の10%を占め、そのうち49%が女性である。障害者の80%は地方で暮らしており、70%以上が基本的な社会サービスにアクセスできていない。障害者の16%が視覚障害者、4分の1が運動機能障害を持ち、51%が聴覚障害やアルビノ（白色症）など他の障害を抱えている。

一般的にセネガルの女性の状況は、多くの敵対的・差別的要素に特徴づけられている。残念なことに、女性障害者の方がより当てはまる。これらの要素とは、

社会的、文化的な基準

女性にとってはさらに劇的な社会的結果をともなう、貧困の女性化

時折の差別と、教育、基本的な社会サービス、仕事へのアクセスからの除外

意思決定分野での限られた出席と女性障害者の限られた参加

このように、女性障害者は人生の各段階で二重の意味で弱い存在となっている。障害のせいで、彼女たちは自分たちの生理学的状況や不安定な経済的状況に関して常に困難な状況に直面している。

教育と訓練



教育の分野を見ても、現在機能している学校や大学の制度は女性障害者に公平ではない。構造も構造基盤も不十分で、多くの場合、障害者は利用することさえできない。学生たちは、障害学生を受け入れ、助ける必要性にいつも気づいているわけではない。

これらの要素すべてが、女性障害者の非識字率が高い（50%）原因となっている。

職業

女性障害者の中で、有給の仕事に就ける人は非常に限られている。拒否される確率は驚くほど高い。民間企業は、障害者の生産性への偏見が強いので、障害者を雇用することは極めてまれだ。それは民間だけでなく、セネガルの行政機関も同様のロジックに従っている。

女性の障害者は、旅行業、ホテル業や法律関係の仕事など、多くの業種から排除されている。働く機会を与えられた人は、職場内で差別にしばしば苦しんでいる。彼女らが重要な責任を負う仕事に昇進することはほとんどない。

セネガルは雇用に関するILO（国際労働機関）159号条約をまだ批准していない。

それにもかかわらず、この領域では進展が認められる。一つの画期的な取り組みとして、セネガル政府は公的な仕事の15%を障害者のために確保することを表明した。女性障害者は、ますます重要な責任ある仕事に就いている。現在、「女性の全国委員会」のゴールは、的確な技能レベルを持つ女性障害者が、自分たちの尊厳を保ちながら、自分たちに値する仕事に就くことだ。

我々の取り組みの成功の鍵は、研修に掛かっている。私たちは障害者を対象に、（IT企業のような）新興産業での認定された研修を会員に行っている。教育水準の低い人々に対しては、イタリア・インターナショナル・コーポレーションや他のNGOと連携して、将来性のある革新的業種での就職を目指し、機能的識字訓練を導入した。このような研修モジュールは、国中の女性障害者リーダーの出現に貢献している。

ンディエ・ダグ・グウェ・ディエ

ンディエ・ダグ・グウェ・ディエ

社会革新：運動機能障害を持った女性のリプロダクティブヘルス

障害を持つ人たち、特に女性の効果的な社会経済的統合は、大きな偉業である。そのためには、社会のあらゆるレベルで行動や意識を変える必要がある。もうひとつの大きな挑戦が、運動機能に障害を持つ女性のリプロダクティブヘルスについてである。彼女たちの健康管理、特にリプロダクティブヘルス・ケアを目的にした具体的なプログラムは、ほとんど見つけることができない。

セネガルで行われた調査によると、障害者の78%が完全な貧困状態で暮らしており、基本的な健康管理や衣服、教育を家族に頼っている。具体的には、運動機能障害を持つ女性の大部分は、ポリオが原因である。この病気は、骨盤の中樞神経系の灰白質まで攻撃し、それはもちろん、出産の過程でとても重要である。この分野における女性障害者や親の情報不足が、彼女らにとって深刻な事態を招き、時には死に至るリスクをもたらす。女性障害者は、骨盤が非対称なせいで帝王切開で子供を産むことが多い。もっとも基本的な予防措置もなされない時がある。この種の手術は非常に費用が高く、僻地では現実的でない。また女性は、手術をするために社会活動局長から保証書をもらう必要がある。私たちは、妊娠した女性障害者が大きな病院でケアを受けられるように、彼らに問題意識を持ってもらうことに努めている。

「セネガル女性の全国委員会」は、運動機能障害を持つ女性が無料で基本的なケアを受けられるよう、国や協力機関にロビー活動を展開している。これは世界的な闘いであるといえる。なぜならこの問題は、特に途上国におけるすべての運動機能障害を持つ女性に関わっているからである。

米国国際開発庁は、女性障害者のためのプログラムを実施している。

出産は障害を持つ女性にとって根源的な問題である。他の女性と同じように、彼女たちは家庭を持つ必要があり、そして子どもが彼女たちの人生において大きな役割を持つからである。母親にとって赤ん坊は、後に友人となり、そして相談相手となる。その子たちは母親の問題を他の誰よりも理解するだろう。

「ポリオを経験した私は、二人の子どもを帝王切開で産みました。高学歴と公務員という肩書から、出産時に質の良い医療ケアを受けることができました。でも運動機能障害を持つ女性の大半は、そのような医療を受けられないのです」

事例の紹介

「最初の例を挙げると、ある女性障害者は普通に出産できると信じ、特別な準備を何もせずに出産に臨みました。しかし彼女には帝王切開が必要だったのです。

彼女をル・ダンテ病院に入院させる保証書に記入するだけでも、私は多くの問題に直面しました。出産は危険を伴うものでしたが、結果的に赤ちゃんは無事生まれました。

私は他のケースで妊婦や赤ちゃんが命を落とした例を知っています。出産を乗り越えて生き残った女性たちが、私をこの闘いに駆り立てたのです」。

成果

「セネガル女性の国家委員会」は多くのパートナーの協力もあり、いくつかの重要な社会的・経済的なプログラムで大きな成功を収めている。この委員会の女性障害者は、会員に資金提供するために、いくつかの融資を利用している。プロジェクトの裨益者は、責任を担い始め、普通の人生を再発見している。今や多くの女性障害者が、料理やIT、ファッションなど様々な業界で活躍している。

もう一つの壁は、障害に対する社会の認識だ。社会の認識不足から、運動機能に障害を持つ女性たちは、多くの惨めな、つまり這わねばならないという経験をしてきたからである。委員会は彼女たちに車椅子や義足を供給してきた。女性は綺麗で美しくそして自分自身の女性らしさや尊厳を保つことが必要である。尊厳を得るための闘いは、同時に当事者に刻み込まれた根深い劣等感との闘いでもある。だが今は、少なくとも彼女たちには目指せるロールモデルがいる。

障害を持つ女性の帝王切開については、政府が対応してくれるようになった。現在、彼女たちの生活水準は大きく改善された。障害を持つ女性が重要な責任ある仕事に昇進する機会も増えてきている。「その証拠として、内閣は私に技術顧問の地位を2度もオファーしました。私たちは既に約600人も障害を持つ女性に機会を与えています。彼女たちはもうデモ行進でただ道端に座っているのではなく、自分たちの運動を守ることによってリーダーになれることを証明したのです」。

経験から学んだこと

我々のようなアフリカの国々で、自分たちの社会参画を実現するには多くの障壁がある。それ

には、物理的、社会的、構造的、心理的、そして偏見上の障壁が含まれる。

さらに、障害を持つ女性が夫を見つけることは非常に難しく、未婚率は非常に高い。この一般的状況は社会・文化的な制限や偏見から生まれている。多くの場合、両親は息子が障害を持つ女性と結婚することを認めない。彼らは障害を持つ女性は洗濯や料理といった家事ができないし、さらに悪いことに、身体的状態ゆえに、その女性が家に悪運をもたらすと考えている。

これらの事柄すべてが、不当な扱いや不平等と闘う私たちの決意を強める。私たちにはともに戦う仲間がいる。それでも、すべきことはまだ山のようにある。

失敗

障害のある女性の社会経済活動への参画を助ける社会法は、まだ十分に適用されていない。たとえば、適切な条約は使われていない。他の問題として、屈辱を根絶しようとする私たちの努力にもかかわらず、女性障害者は物乞いを強要させられる根深い問題がある。物乞いをするにより、彼女たちはあらゆる虐待や仕打ちを受ける危険にさらされるからである。

協力者

セネガルの市民社会で著名な人物が、私たちの社会正義を求める闘いに加わってくれた。ジャーナリストのアネット・ムバエ・デルネヴィユは、障害を持つ女性の再適応と認知にずっと貢献している。彼女は我々のロビー活動や啓発活動にすべて出席している。さらに、彼女は障害を持つ女性を雇って働いている。

提言

障害の問題には包括的なアプローチが必要なので、私たちの熱意や行動だけでは充分ではない。これはすべての人々に関わる問題である。

それゆえ、私たちはこの分野での調査や研究を奨励している。コミュニケーションと情報共有の方針は、障害者の生活で繰り返される無知や偏見を取り除く。また、相互支援や団結の価値と多様性について幼い頃から教育することは、必ず社会意識の芽生えに役立つだろう。

ンディエ・ディエの物語

現在40代となったンディエは、障害者として多くの偏見を経験してきた。「私は一歳のときにポリオに罹り、それ以来ずっと松葉杖や装具を必要とする人生を歩んできました」と彼女は言う。しかし彼女は、母親の愛と、父親の成功への大きな貢献のおかげで、幸せな子ども時代を過ごすことができた。父親は、障害者、特に女性障害者の地位向上を阻む社会的、文化的な制限と闘うことを決してあきらめなかった。「学生時代に私はたくさんの闘いを耐え抜いて、必ず成功するのだという意志を強く持ちました。父は『誰かが障害をばかにしたときには、君は自分の価値を相手に証明しなくてはならないのだよ』といつも言い聞かせてくれました」。

ンディエは20年以上にわたって教師をしており、また意欲的で利他的な母親でもある。彼女は考える以上に、行動することの大切さを訴えている。

彼女にとってもっともショックだったのは、「障害ゆえに彼女は仕事に適していない」との理由で、女子高等学校の教職をたった数カ月で解雇されたことだった。この不当な決定には何の法的根拠もなかった。彼女は当時を思い出して「最悪の気分だった。まるで自分を根底から否定されたようだった」と語る。しかし、ンディエは幸運だった。父親はすでに亡くなっていたが、彼女の養父となったマックスター・サーの尽力で、彼女は前職の女子高等学校で仕事を取り戻すことができた。養父は、彼女の人生に関わるようになって以来、すべての闘いを通じて彼女の味方だった。

この辛い事件は、彼女を、障害を持つ女性のための闘いにますます駆り立てた。

そして彼女は障害者の団体のひとつ、セネガル運動機能障害者協会に参加した。彼女はすぐに昇進し、セネガル障害者協会連盟の女性代表になった。この組織は全国に約20もの支部を持つ、女性のための連盟である。

ンディエは、障害の分野で働く人たちにも影響を与えた。障害を持つ女性の社会参画を求めるロビー活動や権利擁護活動によって、彼女はメディアにも頻繁に登場した。

ンディエは、多くの国際会議にも出席し、女性障害者のために尽力した。監督官庁、そこは彼女に専門家として二度就任を要請し、彼女は結局受諾するのだが、彼女の経験と専門性を認めている。

ンディエのもっとも称賛されるべき点は、逆境にも屈せず、障害者の中で女性リーダーの出現のために闘い続ける強さである。

彼女の活動は、プロとしてのキャリアと家庭生活の両方を奪うこととなった。しかし彼女は、共に戦ってくれた理解ある夫、ディエネに助けられた。

ンディエ・ダグ・グウェ・ディエ



「ンディエは女性、特に障害を持つ女性の権利向上を訴える精力的な活動家です。彼女はいつも責任と勇気を持って世の中に訴えかけてきました。彼女の最大の魅力は、チームワークを尊重することです。それは彼女が『女性のアドバイザリー委員会』で行ったスピーチにもっともよく表れています。それは、障害者の社会的、経済的な融合政策を提案した家族省を称賛する

内容でした」。

彼女は障害者問題に取り組む上で、ジェンダーや医療、教育の権利促進を基本方針としている。その戦略が、彼女を同世代におけるもっともカリスマ性のある女性リーダーの一人にしたのだ、と私は考えている。

ンディエは正に、自分の仲間のために尽くすことを選んだ人道主義者が、コミュニティに代わって理想を追い求めて自分を見失っているような時代とともにいる。

彼女は障害を持って生活する人たちの闘いにおいて、象徴的な人物になっている。家族問題省が彼女の豊富な経験と専門性を信頼し、役人に加えたことは単なる偶然ではない。「すべての人に平等な機会を」。それが、彼女の未来に向けた信念である。

ママドゥ・ンドイエ 社会学者、家族問題省局長

ンディエ・ダグ・グウェ・ディエ

47歳、既婚、二人の子供を持つ。2002年からアショカ・フェロー（セネガル）。人生を通して、装具と二本の松葉杖と共に闘ってきた。彼女はセネガルで最初の女性の全国障害者協会を創設した。彼女はセネガルの運動機能障害を持つ少女や女性の社会的、経済的な地位の向上に尽力している。研修によって教師となった彼女はセネガルでいくつかの名誉を得た。セネガル女性・子供・家族省による女性障害者の権利向上の闘いにおけるパイオニアとして、アフリカ女性教育者フォーラム（FAWE）による女子の教育向上における女性のロールモデルとして、などその他多数である。

Section féminine de l'Association Nationale des Handicapés

Moteurs du Sénégal

Mail: bp 17 381 Dakar Liberté, Senegal

Phone: +221 77 646 92 41

E-mail: dague1962@yahoo.fr

Web: www.anhms.net

アル・エトマンスキー

プラン (PLAN) /カナダ 2002年よりアショカ・フェロー

将来への希望 アル・エトマンスキー著

私がジョージに初めて会った時、彼は私に「死ぬのが怖い」と話してくれた。彼は妻を亡くしたばかりだった。彼の息子のリックはまだ幼く、友だちがいなかった。グレーター・バンクーバーには親戚すらもいなかった。彼は絶望していた。

私が息子のリックと初めて会った時、彼は私と話そうとしなかったし、目をあわせることもなかった。実際、彼は部屋から出て行ってしまった。

リックのことを知るにつれて、その理由が分かった。障害者支援制度の裨益者としての経歴において、彼は「非協力的、怠け者、コミュニケーション不能、攻撃的、知恵遅れ、信頼できない、働けない」というレッテルを貼られていた。彼が如何に問題児か、なぜ信用されないのか、などを記した6インチもの分厚い職業訓練ファイルを私は一度見たことがある。このようなファイルは、どんな人の自尊心でも傷つけてしまうだろう。彼は様々なプログラムを一通り経験してきた。そして沢山のサービスを受けたり受けなかったり、（彼は言わなかったが）僕のような相当数のソーシャルワーカーとも出会ってきた。守れない約束をする人々と。

ジョージと彼のような沢山の親は、プラン・ライフタイム・啓発ネットワーク (Planned Lifetime Advocacy Network : 以下、プラン) — 「自分が死んだら、障害を持つ子どもはどうなってしまうのだろうか？」という疑問をずっと抱える家族のリソース—設立の刺激となった。

我々は直ぐに、自分たちがグローバルな現象の最先端にいることに気がついた。障害者の世代が、両親よりも長生きするのは歴史上初めてのことだ。20年後、我々は世界中で40以上の家族主導の団体を支援している—すべてプランのアプローチに基づいたものだ。

ジョージやリックは、私たちの障害に対する考え方を変えるインスピレーションになった。

リックの気力が無くなっていたのは明らかだった。彼は、人々のレッテルやあざけり、誤診、哀れみ、偏見や誤解などが入った重く目に見えないバックパックを持ち歩いていた。

リックは、自分には価値がないと信じていた。彼は心の底から孤独だった。あまりに孤独すぎてほとんど喋ることもできず、そして喋るときは小声だった。

彼の言葉は枯渇していた。そして彼の夢も同じだった。

誰かのイマジネーションを呼び覚ますこと、彼らの夢を燃え上がらせることは容易ではない。特別な人が必要だ—障害を見るのではなく、彼らの才能を見るような人が。よく話を聞き、沢山のリソースを持っていて、人と十分に繋がっていて、豊かな心で満たされている人。

我々は彼女を見つけた一才能もった若い女性、名前はアンナ。プランは、リックと友人の輪を築くために彼女を雇い入れた。

彼女は静かに何時間も座ってリックの歌を聴くのを待っていた。彼女は提案したり、答えを与えたりしなかった。ただ彼を信じていた。

ある日、彼女は有頂天になって事務所にやってきた。そして言った「やった、やったわよ。馬だったのよ！」リックは馬に関するあらゆることが好きだったと分かった。彼は馬に乗りたかったし、世話をしたかったし、自分の馬を持ちたいとさえ思っていた。そしてなによりも、牛の群れを率いるカウボーイになりたいと思っていた。

プランがジョージの遺言や遺産計画を助ける一方でそれはプランが家族に提供しているサービスだがアンナは息子のリックのために地域とつながりを築くことを始めた。まず、バンクーバーのフレイザー川のそばにある厩舎、サウスランドに馬を所有する彼女の友人にリックを紹介した。リックは、彼女の馬「ビッグ・ボブ」に会うために厩舎に招待された。リックは、ビッグ・ボブと一緒に歩き、少し乗馬さえおこなった。リックが馬と特別な繋がりを持っているのは明らかだった。

都会で馬を持つと、2つの事が必ず起こる。ひとつは、馬は沢山の牧草を食べる。もうひとつは、思ったより頻繁に訪問しない。だから誰かにお金を払って馬に乗ったり、運動をさせたり、厩舎を掃除したり、その他諸々をしてもらう。いずれにせよ、それにはとてもお金がかかる。

ビッグ・ボブといるとリックが明らかに安心するのを見て、ビッグ・ボブのオーナーは、自分が居ても居なくても、いつでも厩舎を訪問するよう彼に言った。時間がたっぷりあるリックはその提案を受け入れた。実際に、彼は毎日厩舎を訪れるようになった。

そして直ぐに、厩舎のオーナーは、リックの馬に対する扱いに気がついた。彼がこれまで見た誰よりも、リックは厩舎掃除を楽しみ、馬を撫でている事に気がついた。賢明なビジネスマンとして、彼はリックに仕事を提供した。

リックはその厩舎でまだ働いている、12年経った今も。実際、獣医が来るときも、彼女はリックに同席するよう求めている。彼女は、リックの穏やかで静かな存在によって馬がいつも落ち着くことを知っている。

他の人たちもリックの才能に気づいている。数年前の夏、リックの友人たちが地元の公園で彼の誕生日パーティーを企画した。そのパーティーで、厩舎の人たちが馬をパレードさせてリックを驚かせた。馬と騎手が公園の周りを闊歩する光景は、リックがどれだけ周囲から愛され、大切に思われているかを表す美しい情景であった。彼の友人の輪はプランの中でもっとも大きいものの一つだ。20人以上は間違いなく、その内の8人とは親密で親友になっている。

それがどれだけ父親の心に平穏をもたらしたか、簡単に想像できる。

ゆっくりと時間をかけて、リックは馬の世界にたくさんの友達を作った。そのうちの1人は、ブリティッシュ・コロンビア州南東のエリアで250マイルにも及ぶ牛追いの事をリックに話し、

彼に同行するように頼んだ。リックは同行し、それから毎年夏に行くようになった。彼の夢が叶ったのだ。彼は6年間に渡り、ブリティッシュ・コロンビアの山脈を駆け抜ける本物のカウボーイになることができた。



リック、我々のホースウィスパラーは、変わった。友情を育む力が、彼に生きる力をもたらした。相互の信頼と価値ある存在として扱われることが、彼の重いバックパックというラベルを消し去っていった。

リックを始め、社会とつながりを持った何千人もの障害者から我々が学んだ事は、以下のことだ。

- ニーズと欠点だけに極端に注目すると、孤立や孤独に陥りやすい。
- 才能や貢献に着目すれば、インクルージョンや受容にたどり着ける。
- 孤立や孤独は障害者が直面する最大の障壁のひとつである。
- 障害者も他の人と同じように社会に貢献したいと思っている。
- 関係を築くことが、発見し、感謝し、人々に貢献してもらうのにもっとも有効な方法である。
- 障害者が責任を持つ一人の市民として社会に受け入れられるのは、その貢献を通してである。

我々はあらゆるタイプの障害や状態に置かれている人々に、友人の輪を作ることをしてきた。我々は確信を持って、人との繋がりを不可能にする障害などない、と断言する事ができる。

リックが求めていることは、厩舎で働くこと、職場に近いバス路線沿いに住むこと、自分の情熱を追い求められ、仕事を十分にこなし、必要とされることによって満足感を得ること、だけである。言い換えれば、リックは私たちと同じことを求めている。人生に意味を見出すこと。

彼の父親であるジョージが切に求めていることは、社会が彼と同じものを見ること、息子の障害だけでなく、彼が持つ才能や能力、貢献などを。彼は、息子の名前の横に「助けが必要です」という注釈をつけなくてもよい国と文化を求めている。

それはジョージだけではない、ということをお我々は学んだ。世界中に何十万人もいる親たちは、自分の息子や娘に価値があり、良い人生を送れるという確信が欲しいのだ。

もうひとつ私たちが学んだことは、プランでの我々の仕事は、リックの良い人生を創る事ではないということ?自分たちでできるなんて、なんて馬鹿な事を考えたのだろう。何しろ私たちは、馬について何ひとつ知らないのに。

それよりもむしろ、我々の仕事は自分たちの息子と娘が良い人生を送れることを確信できるように、ジョージや他の親たちを支援する方法を見つけ出す事だ。我々の仕事は、障害を持つ肉親がいる家族の大きな結束、創造性、献身性、そして資源を活用する事だ。また我々の仕事は、すべての市民が持つ自然なホスピタリティを引き出すことでもある。

アモリー・ロビンスは、著書『自然資本主義』(www.rmi.org)の中で、我々は価値があるものを信頼すると主張している。他の言葉で言い替えれば、もし信頼をしなかったら、我々はそれを知ることもないし、価値があるとも思わないということだ。

このロビンスの分析を障害の分野（本人とその家族両方）に応用すると、制度が頼るたった一つの事はニーズ、個人と家族のニーズ、という事が直ぐに分かる。政府によって分配されている財政的な資金もニーズに基づいている、という事も直ぐに分かる。それらは、あなたが支援を必要としていて、今後も必要で居続ければお金を得る事ができる。我々はこれを、人々を支援が必要なままにしておく「発見と破壊」作戦と考えている。そうすることによって、政府はリックやジョージの世界にある多大な資産を無視してしまう。彼らの立ち直る力を育てる代わりに、この方法は依存心を生んでしまう。何よりも、友情関係は、才能や情熱の周りから生まれるもので、ニーズからではない。

最近、一人の母親が僕に話してくれた、「娘に財政的支援を得るために、私は娘をもっとも酷い言葉で説明しなければならない。でもそれは私が見ている、私が知っている、そして私が望んでいる彼女の姿とは正反対のものなの」。

多かれ少なかれ、カナダの障害者支援制度は、リックとジョージについて間違った事を考慮している。私たちがプランの活動で学んだこと、どうやって障害者とその家族の適応力、立ち直る力を活用するか、を行政も学ぶべきだ。半分しかではなく、半分も水がグラスに入っていると見ることを。

障害者個人とその家族や友人は、3つの大きな壁に直面している。

1. 新たな優生学思想の出現：社会の障害者に対する支援がどれだけ脆くなってしまおうのか、私たちは常に再認識させられる。安楽死や死ぬ権利の立法化、テクノロジーや遺伝子工学に対する崇敬は、完璧さの追求や、ある命は生きる価値がない、もしくは価値があると見なされないと信じている事を映し出している。新たな悲劇、もしくは科学の飛躍的進歩があるたびに、再び現れてきた優性学運動の中で「生活の質」という曖昧な言葉が使われる恐怖が浮き上がってくる。経済不況が、価値がないとみなされた人々への支援削減を引き起こすことは、歴史が示

している。なぜなら彼らは貢献者もしくは生産者として価値が無いとされ、彼らは限られた社会資源を享受する値打ちがないと見られている。

2. 我々は孤立や孤独の蔓延を見ている：障害者が直面するもっとも大きなハンディキャップは、彼らの孤立や孤独である。マザー・テレサは「孤独はもっともひどい貧困である」と言っている。居場所があって、人生は意味を持つ。友情が才能を引き出し、人生に意味を与えてくれる。

人間関係や友情の大切さに幅広い合意がありながら、この問題に対する協力した取り組みは行われていない。無意識のうちに脆弱な人たちをさらに孤立させてしまうようなプログラムやサービスだけに、政府の予算は集中している。

3. 我々は、社会支援の財源に対する金融危機と人口構造の変化の影響について懸念している。今後15年間、高齢化は国家経済が直面する主要な問題になるであろう。ここにいくつかカナダの統計がある。2005年には、100人の労働人口に対して44人の子どもと高齢者がいた。2030年までには、61人の子どもと高齢者がいることになる。影響はふたつある。ひとつは、医療費の増加が見込まれる（ある情報によれば、もし現在の傾向が続けば、私の地元であるブリティッシュ・コロンビア州の医療費は、2017年までに州予算の70%以上を占めるようになる）。ふたつ目は、税金を払う人が減るので、政府の予算が縮小する。

未来の政府がこのような人口構造の変化にどんな対策をとっても、すべての予測が、少なくなる資源に対するプレッシャーの増加、社会的支出に対する金銭的なパイの一切れが非常に小さくなることを示唆している。

この世界でジョージやリックから20年かけて学んだあとで、我々は、まだ使い方が分からず未開発な資源の宝箱に座っている事に感謝するようになった。我々が気づいていないことは沢山ある。

たとえば、障害者をコミュニティ・ライフに迎え入れることは、すべての人にとって相互信頼の触媒となることを我々は学んだ。リックのネットワークのメンバーは、リックが彼らの人生に意味を与えてくれたと断言している。

ある日、他の事にも気づき始めた。振り返ってみれば当たり前の事で、認めるのがとても恥ずかしいが。私たちは家族が作った遺言、家族が息子や娘のために積み立てた信託金とその積算額、家族の生命保険の総資産価値など、実際に金融機関に管理されている障害者やその家族が持つすべての信託、預金、投資、貸付金の額を調べ始めた。

我々は、障害者市場の潜在的な力に気づき始めた。その総額は驚くほどである。

我々は、カナダ人の家庭は、金持ちと貧乏も合わせ、障害を持つ肉親のために特別支援信託基金に800億ドルの蓄えがあることを学んだ。

だから我々は、家族が家族の一員のために準備している他の基金についても調べた。控えめに

見積もっても、その推定額は年間2億5000万ドルだった。この調査結果を使って、私たちは登録制障害積立基金（Registered Disability Savings Plan：RDSP、以下、障害積立基金）の設立を提案した。8年間の努力の末に、我々は成功した。

2008年12月1日、カナダの金融機関は障害者のために世界で最初の障害者向け貯蓄プランを提供する予定だ。障害積立基金はまた、年間1000ドル相当の国債と障害預金債の惜しみないマッチング助成を提供する。カナダにおける障害積立基金マーケットの推計額は800億ドル！これは80万人の障害者とその家族に大きな影響をもたらすだろう。

障害積立基金の設立が、大きなものを考える触発となった。我々は、障害者とその家族の共同経済力を活用したいと思っている。障害積立基金の800億ドルと特別信託の800億ドルを合わせれば、利用できる手つかずの経済的資金として1600億ドルを手にする事ができる。



この資金をレバレッジとして、居住、雇用、補助器具、移動機器、そして孤立と孤独など、障害者とその家族に関係する重要な問題に政府が取り組むようにしたい。

我々は、カナダの全家庭に情報を届けようと、金融機関や州政府と連携している。カナダはとても広いので、自分達だけで行うのは困難だ。

我々は、この国にある孤立と孤独の問題に機能的かつ戦略的に取り組むために、「一人ぼっちではない基金（No One Alone Fund）」の設立を望んでいる。

我々は、社会的起業に投資するための貯蓄障害投資基金を設立するための戦略を開発している。

我々は、もはや自分達をチャリティーや政府の配給品に依存する被害者だとは思わない。リックやジョージの世界と同じように、我々は、自分たちの財産、道徳、社会、そして経済を頼りにしている。哀れみは十分ではない。哀れみは決して十分にならない。我々は、未来は自らの経済力を要求することで成立すると確信している。

アル・エトマンスキー、2002年からアショカ・フェロー、プラン（Planned Lifetime Advocacy Network）の会長であり創設者の一人である。『グット・ライフー障害を持つ家族とあなたのた

めに (A Good Life-For you and your Relative with a Disability) 』 『安全と安心 (Safe and Secure) 』 の2冊のベストセラーの著者でもある。また、社会イノベーションや社会的起業にインパクトと持続性を持たせることを目的としたソーシャル・イノベーション・ジェネレーション(SIG)の創設メンバーである。

PLAN: Planned Lifetime Advocacy Network

Mail: Suite 260 - 3665 Kingsway

Vancouver, BC V5R 5W2, Canada

Phone: +1 604 439 9566

Fax: +1 604 439 7001

Email: inquiries@plan.ca

Web: www.plan.ca

Other websites: www.plan.ca connections to PLAN's services and resources

www.planinstitute.ca PLAN's companion Institute for Caring Citizenship providing resources to families including on-line courses, books DVD's and training in Circles of Friends

www.philia.ca devoted to a new theory of disability based on contributing citizenship

www.tiesthatbind.ca companion website to an inspirational film based on PLAN's work

www.socialaudit.ca what families think - independent audit of PLAN's services

www.tyze.com web-based platform offering personal networks for people with disabilities based on PLAN's approach

www.rdsp.com up-to-date information on the world's first Registered Disability Savings Plan (RDSP)

www.sigeneration.ca devoted to values, practices, and methodologies which accelerate the impact of social innovations and social enterprises.

イザベル・グイラオ

ア・トッダ・ヴェラ／スペイン
2006年よりアショカ・フェロー

旅の物語

エレナ・セヴィラーノ著
ピーター・ダウディー英訳

11歳の時、プリに友達はいなかった。24歳のいま、彼女には友達がいる。この変化を可能にしたのは、ア・トッダ・ヴェラ（帆を揚げて）という団体である。この団体は、スペインで知的障害を持つ子どもと若者のために、インクルーシブな自由時間とレクリエーションの選択肢を増やすことに取り組んでいる。プリはひとりぼっちではなくなり、いまでは誰もが望むような



時間を過ごして楽しんでいる。彼女は、何がしくて、どこへ、どうやって、いつ、誰と、を自分で決めている。彼女について話すなら、車椅子のヴァネッサについても話そう。または彼女を助けるサイモンも。または父親の葬儀でなくさめる人々に囲まれて泣いていたソニアも。彼らはみんな、ア・トッダ・ヴェラの実務レベルのディレクターであり育ての親であるイザベル・グイラオの友達だ。

心理学者で学校のカウンセラーだったイザベルは、教育センターが障害者に提供しているサービスは週末や長期休暇の際には閉鎖していることに気づいた。「あなたはいなくなるけど、我々はここにいるのよ」と多くの家族が専門家に訴えていた。イザベルの障害がない2人の子どもたちは、外で遊び回ったり友達の家泊まったりしていた。「私が世話をしていた子どもたちは遊んでいなかった」とイザベルは言う。1996年の夏、彼女はカンボジアを訪問し、兄弟のホセ・ルイズが運営するNGO「ラ・カサ・デル・アグア・デ・ココ」のプロジェクトを視察した。彼女は、障害分野で自分ができることはまだまだたくさんある、と考えながら帰国した。

「何か探している時は、常に細心の注意を払って、チャンスが飛んで来たらつかまえないきゃ」とイザベルは指摘する。彼女の場合、勤務する学校の生徒の母親の一人、マリア・ビクトリアが持ってきた一枚の新聞の切り抜きという形でチャンスが訪れた。マドリードの団体が、知的障害者にレクリエーションのプログラムを提供していた。「これだ！レクリエーションをインテグレーション（統合）のツールとして使うこと！アルメリアの知的障害者の生活の穴を、友人や計画で埋めるような団体を立ち上げよう」。このアイデアは、1997年1月に、イザベル、マリア・ビクトリア、イナ、カティ、アントニータの5人の女性を創設者として、ア・トッダ

・ヴェラ（帆を揚げて）という名前で実行に移した。ビルバオにあるデュエスト大学の障害とレクリエーション学部長およびサラマンカ大学障害心理学部長が、事業に対する理論的な支援を提供した。この分野ではやるべきことが沢山あった。スペイン人口の9%、もしくは約350万人（そのうちだいたい5人に1人が知的障害者）の人たちに対する余暇のための法律、行政の支援、もしくは補助金などは何も利用できなかった。

自分にとって最も大切なことを3つ若者に聞いてみるといい。家族や仕事とともに遊びが上がる。ア・トッダ・ヴェラは200人の障害児を対象に調査を行い、その結果、92%の障害児に友達がないことが判明した。ほとんどの子どもは、家族以外の人と誕生日を祝った経験がなかった。98%は家やケアセンターの外で自由に行動することが許されていなかった。61.3%は地域のクラブやサークルなどに所属していなかった。85%は自分の家以外に宿泊した経験がなかった。40%は映画館に行ったことがなかった。20%は電話を使っていなかった。毎年6ヶ月は素晴らしい天候の沿岸部の街でも、77%は泳ぎ方を知らなかった！25%が孤独感、うつ、社会不安障害などに苦しんでいた。

「障害者と働く団体は、このグループの人たちにとっての余暇活動を革新的なサービスと考えていない。したがってこれらの団体は、個人と社会の発展に最も大切である余暇活動のプログラムを望んだり、要求したり、もしくは企画したりしない。障害者は見えないグループで、存在していない人たちだ」とイザベルは2007年の報告書で書いている。そして彼らが存在しないとき、コミュニティは「インクルーシブなスポーツや文化行事などの提供をしない。提供したとしても、障害者の本当のニーズを十分に理解できていないために、提供される活動はこれらの人々に尊厳を持って対応するのに必要なすべての支援を含んでいない。我々の福祉社会は分かっていない。不完全である・・・」。

ア・トッダ・ヴェラは、「福祉」という言葉を避け、オフィスの四方の壁の中に留まることを拒否した統合的な余暇プロジェクトを企画し、そして完成させた。開始当初から一貫して、街に活動を広げ、関心を高め、コミュニティを巻き込む努力をした。男の子も女の子も、プールやスポーツセンター、公園など公共の施設やサービスを利用し始め、さらに遊歩道に頻繁に通うようになり、そこではアーチェリーの練習をし、エル・ザッピロのビーチに行き、そこではビーチの人に入り交じって話しかけたりした。インクルージョンと平等は、可視化と意識化を通して達成された。プリと知り合うことは、例えば、彼女が11歳になるまで不可能だった。それは単純に、彼女は自分の家の敷居を一步もまたぐことがなかったからだ。「学校は地獄のような場所だった。家の方が落ち着くから、と親には話したけどあれは嘘なの。本当は単に外に出ることが恐ろしかったの」と、プリは振りかえる。彼女はその時、ア・トッダ・ヴェラのボランティアだった姉に半ば強制的に連れ出された。口コミのおかげで、いまでは多くの障害児たちが他の子どもと同様に自由時間を愉しんでいる。「知ってる？ 私たちの子どもでも、平等にスポーツやキャンプをして遊ばせてくれる団体があるのよ」。

障害者と健常者をあわせ、これまで10歳から30歳の約1000人の若者がア・トッダ・ヴェラの活動に参加している。このグループは、振付師で舞台監督のダニー・パヌロの映像が入っ

たCD「ハート・アズ・フラッグ（心に旗を）」を制作したり、スペイン国営ラジオ局の月刊番組を提供したりしている。彼らは、カーニバルからキャロリングまで、この地域で開催されるどんなイベントにも申し込んでいる。ア・トッダ・ヴェラは、デイトム・ケアセンターと若者がたむろするクラブの世話をするリクリエーション・サービスも提供している。また障害者の家族が息抜きできるよう、ベビーシッターを派遣する家族支援サービスも行っている。さらに、自立した個人のグループ、つまりグループのために働きアイデアを提供する障害者とともに行う障害支援サービスもある。2008年現在、345人の協力者、175人の若者、144世帯、そしてユース・シェルターを運営する5つの団体がある。また、自分たちにできる支援や研修を提供している60名の専門家と、団体の基盤的支柱である115名のボランティアもいる。



ペペは、先天性中枢性肺胞低換気症候群であり、話したり、噛んだり、食べたりすることはおろか呼吸することもできず、人工呼吸を必要としている。彼をがんじがらめにして慢性的な病気の長いリストを見ると、何をしても意味がないと諦めてしまうことは簡単だろう。しかしア・トッダ・ヴェラでは、彼の長所だけに着目する。ペペにもできることは何か？ 水泳、彼は水泳が好きだった。たとえ浮き輪が3つ、2つは20歳になる彼の体を支えるため、そしてもう1つは酸素ボンベ用に必要だとしても。スペイン南部、マラガ州モリナのマラガ欧州・中南米青少年総合センターのプールは、介助を必要とする子どもたちが夏の午後に旅行を計画する場所だ。

公共施設を利用する最大のメリットは、いつも面白い人々との出会いがあることだ。例えば、メリラ青年協議会のメンバーは、笑いのセラピーやサルサ、仮面舞踏会などのワークショップに子どもたちを招待してくれるようになった。グアディックスの障害者団体は、一緒に旅行や食堂、トイレに行ったりしてきた。街を歩き回るのが好きな人も、センターで過ごすのが好きな人も、余暇の過ごし方をすべて自らの意志で決めることができる。これこそ親が最も重要視する点、つまり自分の子どもの意見が重視され、他の人のように扱われる点である。これは、尊厳や尊敬、そして彼らの障害ではなく能力を強調することである。

「息子には友だちがいる、誕生日パーティーにも出かける・・・、それは私たちにとって大きな変化でした」と、アントニアの母ローラは話す。ペペの両親、マルティリオとリカルドは「息子の生活の質が向上したことで、彼を取り巻く環境すべてが改善された」と言う。「友人たちは彼にキスして、抱きしめて、彼のことを大事に思っている」とマルティリオは付け加えた

。個々のストーリーは、達成された変化を表す何よりの証拠だ。ヴァネッサのイスタンブール旅行、ソニアのテネリフェでラクダに乗ったこと、問題児として離されていたイザベルのグループによる家族との生活に戻ったこと……。マルティリオとリカルドは、最初、見ず知らずの他人がペペの面倒をみることができると不安だったと告白している。「いまは、ア・トッダ・ヴェラを信頼している。ここには素晴らしいボランティアがいる」。

「ボランティアがいなければ、ア・トッダ・ヴェラは存在すらしていない」と、6?7人のボランティアグループの長としてモリナに来たイザベルは主張する。その中には、彼女の息子のナッチョや、今回初めて挑戦する友人の娘テレサもいる。テレサは単にとても感動し、最近母親と電話で話しながら泣いてしまった。「ア・トッダ・ヴェラで覚えている最初のことは、カヌーでの急流下りでした。私はものすごく遅かったの。そして気づいたの、ここで障害を持っているのは誰だろうって」ともう一人のボランティアであるマリア・アンジェレスは言う。このグループは、そこで働いている人々の人生も変えていることが明らかになった。

「何故なのか上手く説明できないが、例えば、明日火星に行ったとしても、同じように障害を持った火星を見つけて、頭の先のアンテナをつかんで、光の方に引っ張っていくと思うとイザベルは言う。さすがに火星までは行かないが、2006年にアショカの社会起業家となったことで、彼女はア・トッダ・ヴェラをモデルとした団体をマダガスカルにも設立した。そして2007年5月に、再度、兄のホセ・ルイズと彼のNGOベル・アベニールと一緒に、彼らは障害者を見つけるために島の南半分を探索し、視覚に問題がある30人の少年少女を集めた小さなセンターを設立した。彼らは障害を持たない若者と統合キャンプに参加し、音楽やゲームを通じて両者の間の壁を打ち壊した。「変化は直ぐに起こりました。24時間以内に、ほとんどすべての人が自分たちは愚かだと笑いました。私たちは、抱きしめ合い、分かち合ったのです」。

視覚障害児たちは、天使のような歌声を持っていた。そして1年後、ア・トッダ・ヴェラは、彼らをマラガシー・ゴスペルという名の合唱団、「インクルージョンの重要性と、人間の能力に注目すれば、他のいかなる状況も乗り越える、人々の能力に対する洞察力の持つ力を伝えるインクルーシブな文化的イベント」としてスペインで披露した。グイラオは、アショカの巨大な可能性を、インクルーシブなレクリエーションのプランを発信することができる拡声器として考えている。アショカとともに、このサービス・モデルとインクルーシブなレクリエーションをスペイン全土に広げるために、彼女はスペイン精神障害者連盟（FEAPS）と連携している。

「12年前、私は大きな一歩を踏み出しました」。それは学校カウンセラーとしての仕事を辞めることとなり、ア・トッダ・ヴェラの土台となった。「同僚から『イザベル、そんな生活を続けていたら体がもたないわよ。教育委員に辞職を頼んだら』と言われるまで、最初の数年間は仕事と活動を両立させようと時間を調整していたわ。そして私は『やるしかない。活動にすべてを賭けよう』と思ったの」。そしてその賭けは成功した。いまでは彼女は、団体の実務レベルのディレクターと、国内外での事業展開の責任者の2つに時間を割いている。ア・トッダ・ヴェラの理事会で、親を代表しているリカルドは、このプロジェクトはモデル事業を拡大し、より多くの人に知らせるために必要な基盤をしっかりと固めた、と考えている。「私はいつも、

まだサービスが届いていない家族に『あなたの近くにア・トッダ・ヴェラがあれば』と言っている」。

それと同時に、団体も変化の時期を迎えている。1年前、ア・トッダ・ヴェラは障害者の人権は尊重されるべきだと訴えるキャンペーンを開始した。キャンペーンは、レクリエーションサービスはインクルーシブにすべきだ、ということに特に力を入れている。そしてそうならない時は、公式に抗議を申し出た。「我々には権利がある。でもいままでそれを要求してこなかった。その状況を変えなくては」。団体は、創設目的には考慮されていない、自立に対する動きを再開する予定である。しかしながら、ア・トッダ・ヴェラは積極的な参加を基本にしている。そして障害を持つ子どもたちは、理事会にいる2名の代表を通して、家庭や仕事を再度要求している。「我々の理念が変わったということだろうか？ そうではない。それは単に、私たちの望みと夢を叶えるためのプロセスを意味している。障害を持つ子どもたちと個人的関係が築けたからこそ、ここまで進んで来られたのです」。彼らは、ヴァネッサは仕事がしたい、プリは自立してボーイフレンドのサルバと暮らしたい、と望んでいることを見てきた。これらは彼らの挑戦である。「私たちは先に進まなければ」。

イザベル・グラリオとは何者か？

グラナタ大学で心理学の学生だった時、イザベル・グラリオが授業に出席することはまれだった。彼女の大学時代の思い出といえば、障害研究のリサーチ・チームに参加していた社交的な家庭出身の若い女性の思い出である。彼女は最初、知的障害を持つ女兒の学校でインターンだった。卒業後は、グアディクスにある他の学校で働いた。「私は仕事に夢中になって、そこで個々人と絆を築き、この人たちのために生涯働こうと決意したの」。その後、すべてがスムーズになった。「あなたは、自分は障害者が好きだと気づき、彼らの生活の質を高める為に何かしたくなり、彼らの母親とも親しくなります。あなたは彼らを見守るのです。それが観察できる」。

この人たちによって、常に私は自分の能力を疑っていたとイザベルは認め、「そして私は、それが好きなの」。<文頭に来ています>彼らは、彼女を恐怖と立ち向かわせ、責任の重圧からくるパニックも感じ、精神的に成長させた。「私はとても素直に笑うし、泣きます。抱きしめて、キスして、怒鳴り、毎日が感動の連続なの」。彼女の人生の選択は大きな褒賞をもたらしたのか、と尋ねる人に彼女は答えている。「個人的に忙しくなったせいで、ある程度人間関係が道端に置き去りにされても、これは私がしたかったことで、実現したことです。しかし私は負けませんでした。逆に、勝ちました」。若者との交流が、彼女にやる気と活力を与えている。「私は自分の子どもたちや彼らの友人と特別な関係を築いています」。彼らはア・トッダ・ヴェラに参加し、イザベルは彼らと家族が関与するプロジェクト以外のプロジェクトと一緒にやっている。「これらは特別な方法で、彼らと私を結びつける体験です」。

彼女のアドバイス

1) 障害ではなく人を見ること。一人ひとりの能力と可能性をもとに、成長し発達する支援を彼/彼女に与えること。

2) 彼らを地域に参加させること。そうすれば地域も参加する。お互いの世界を近づけること。そうすれば、単に身体的な観点から見るのではなく、心が感じられる活動を通して見るようになる。

3) 心が感じられる言語を使うこと。知的障害者は、感情、思い、衝動、目線、笑顔を通してコミュニケーションをする。専門的な理論は抜きにして、彼らの目線に立って物事を見つめ、彼らの言葉を使うこと。彼らに近づいて、選択や機会そして彼らの権利順守のために彼らの扉を開くこと。

感情による変化

ア・トッダ・ヴェラと生活をともにすると、障害者と自分自身の両方に関する価値観や認識、考え方が変わる、とアルメリア大学のアベル・ラ・カル教授は信じている。「あなたを魅了して、なんらかの方法であなたを変えるような純粋な感情の空間を彼らは創りだしています」。彼は、障害のある若者とない若者を対象としたワークキャンプで、このことに気がついた。「公式には、私は人権に関する講義をするために行きましたが、キャンプに着いた瞬間から帰る時まで、つまり2、3日彼らと一緒に生活して、相互に学び合いました」。この経験は、彼にある挑戦を突きつけました。「<文末に来ています>彼らは、人権を作り上げている価値観を共有するにはどうしたらいいのか、と私に尋ねたのです。私は写真を使ってやることにして、そして普通は隠されている現実を示す写真を選びました。写真をプロジェクターで映し、その写真を見て湧きあがる感情について参加者と話し合い、そしてみんなが世界を変えたいと思いました。我々なら、その夢を実現できるかもしれないとさえ思えました」。2つ目の挑戦は、「障害者との結びつきを学ぶことでした。イザベル、ハヴィエール、イオ、シルビア、そして他のボランティアを観察し、結果的に障害を持つ人たちと関わられるようになりたいと心から思うようになりました。そして、その方法を学べた気がします」。



イザベル・グイラオ

彼の意見では、ア・トッダ・ヴェラは、「たった一つ肝心のルールがある。共感、相手を感じていることを感じる、つまり思いやりの場所です。成功するとは限らないとしても、理解しようと努力する姿勢は伝わっています。これは、障害者にさらなる自主性を与えるが、しかしそれ以上に、障害者に対する認識を変え、彼らを可視化させた社会的に広がりやすい考え方

のようなものです。あなたが彼らの一人に会うと、あなたを認め、丁寧に名前を呼んで挨拶をしてくれ、あなたも彼らを認めて、彼らの笑顔に応えることを期待している誰かと一緒にいることに気づきます」。彼は、団体がどのように設立されたか覚えている。「余暇の分野に焦点をあて、やらなければいけない唯一のことは楽しむことでした。私は、あれは素晴らしい直感もしくは勘だと信じていますが、分かりません。大切なことは、いまア・トッダ・ヴェラが障害者の生活のあらゆる側面に、この解決方法を持ち込んだことです。障害者のために、すべての人と同じように尊厳、愛、自立・・・を求めています」。

イザベル・グイラオ・ピネイロ

50歳、2児の母。心理学者、団体発展プロセスの諮問・マネジメント修士号。スペイン知的障害者のための組織連盟（Confederación Española de Organizaciones en favor de las Personas con Discapacidad Intelectual : FEAPS）2006年からアドバイザー・ネットワークとアショカ・フェロー。20年間学校のカウンセラーを務めた後、1997年にア・トッダ・ヴェラを設立。

A Toda Vela

Mail: Avda de la Estación, 8 (Edf. Dorado), 1o-3, 04004 Almería, Spain

Phone/Fax: +33 950 23 90 90

Mobile: +33 607 40 83 85

E-mail: sede@atodavela.org

Web: www.atodavela.org

アンドレアス・ハイネッケ

ダイアログ・イン・ザ・ダーク／ドイツ 2005
年よりアショカ・フェロー

ダイアログ・イン・ザ・ダーク アンドレアス・
ハイネッケ著

ドイツの背景

健常者と障害者の交流は、固定概念や恐れ、拒絶、偏見などによって頻繁に阻害されている。統計によると、世界の6億1千万人の障害者のうち4億人は途上国に住んでおり、3,800万人がヨーロッパに住んでいる。しかし、「障害者」と分類されている人の中で、自分を障害者と見なしている人はたった5%に過ぎない、という調査報告もある。ドイツでは約800万人が障害者として登録されている。うち100万人が視覚障害者で、その中の約10万人が法律上全盲とされている。



それぞれの国で、理解のレベル、支援のレベル、障害者との交流のレベルは一樣ではない。ドイツでは、障害者の物理的なニーズは概ね政府の福祉プログラムによって満たされている。障害者に障害のない者と同等の権利と責任を保障している差別禁止法も制定されている。しかし、現実はそのよう上手くいかない。障害者で仕事を持っている人はたった15%で、大多数の障害者が教育や公共交通機関、アクセシビリティの面で同等の権利を与えられていない。

障害者の状況

多くの人々が盲人や障害者との交流に不安を感じ、できるだけ接触しないようにしている。それが結果として、障害者の更なる疎外化と差別に繋がっていく。

全盲体験やシミュレーションは、すでにドイツや他の国でも行われているが、たいてい盲人との接し方や助け方といった講義が実施されている。ある程度、このような体験は障害者の生活がいかに大変かを示すことができる。それは障害者に対する理解よりも、同情を惹くことが多い。また参加する人もごく少数で、多くは福祉分野の教育プログラムとして実施されている。

新しいアイデア

コンセプトはいたってシンプルだ。特別に造られた真っ暗な空間を、参加者はグループ単位で

盲人のガイドに誘導されながら進んでいく。そこでは、匂い、音、風、温度や質感が、たとえば公園や街並、酒場など、日常的な環境の特徴を伝えてくれる。すると、日頃の何気ない動作が新しい経験になる。そして役割の逆転が生じる。見える人は、慣れ親しんだ環境から放り出される。そして見えない人が彼らの安全を確保し、何も見えない世界の過ごし方を教えてくれるのだ。

このコンセプトは効果的だった。ここ数年で「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」はヨーロッパ、アジア、アメリカなど28カ国で実施されている。6,000人の盲人スタッフによって、600万人以上がダイアログ・イン・ザ・ダークを体験した。すでに20年以上続いているが、需要はまだ増加している。2006年だけで10カ国で17のイベントが開催され、380人の盲人が雇用され、48万人もの訪問者に盲人として過ごすことが新たな興味深い形の感覚であり、生活方法であることを伝えた。

目的

ダイアログ・イン・ザ・ダークは、盲人を疑似体験させるものではない。「盲目とは暗闇である」といってしまうのは、あまりに単純化していて、彼らの実生活とは全くかけ離れている。実際、本当に暗闇しか見えない人は、盲人の中でもたったの5%。多くの人は、それぞれ異なる視覚障害を持っている。盲人にとっての暗闇とはむしろ、21世紀になっても差別や社会的排除、偏見などに晒され、社会、教育、労働市場において平等な機会を与えられない現状に対する比喩として理解されるべきである。彼らは、様々な理由で社会の「暗闇に立たされている」人たちや、「不幸な境遇」によって繋がっている人たちを代表している。しかし、暗闇は理想的なコミュニケーション空間ともなりえる。そこでは、外見や地位は意味をなさず、偏見のない出会いを提供することができる。ダイアログ・イン・ザ・ダークの訪問者は、相互に助け合ったり、情報を共有したりするきっかけとなる経験からくる強い感情を通して結び付けられる。対話することがもっとも重要なこととなり、話をしないことは存在しないことを意味する。社会的な関係は消え、結束が生まれる。人に簡単に評価されたりレッテルを貼られたりすることもなく、自分自身の価値観や存在意義を対話によって表現するチャンスが与えられる。このような環境で、あなたがもっとも話す相手は盲人なので、対話は何よりもまず盲人と自然に行われる。そして障害者に対する共感や理解が進み、人間の多様性に対する認識が広がるのである。

社会的対話とはまた別に、ダイアログ・イン・ザ・ダークでは、自分のアイデンティティーや知覚について考えられるよう工夫がされている。完全な暗闇に入り、自分の限界を感じ、住み慣れた世界から引き離されると同時に、自分との対話が始まる。突然フラストレーションが堪り、激しい感情の動きを経験するのか、自分自身の限界を感じるのか、または新しい感覚を発見するのか、新しいアセスメントの場となる。そして自分の視力に対して謙虚に感謝するのである。たった一時間の経験だが、自分の中にいくつかの予期しなかった発見が生まれるのである。



効果

何冊ものゲストブックが、ダイアログ・イン・ザ・ダークに訪問後、自分の感想や感情を表現したい衝動にかられたことを証明している。コメントの98%がポジティブなことは、注目に値するだろう。

コメントは大きく3つに分類される。

32%がこの経験に感謝を示している

37%がこの経験に満足している

31%が自分の経験を振り返ったり、分析したりする時間を作っている

ダイアログ・イン・ザ・ダークによって得られた重要な効果の一つがある。それは盲人ガイドに対する感謝の気持ちである。暗闇を体験する旅で、盲人は不安や危険を排除し助けてくれる人として認識される。彼らに対する感謝と賞賛の気持ちが生まれるのである。そして社会的距離感が関心に、哀れみが敬意へと変わる。

このように、ダイアログ・イン・ザ・ダークが、新鮮な刺激を与え、思考のパターンを変え、固定概念を消し去り、ユニークな盲人の世界に接触できる新しい扉を作ってくれたことは明白である。自分自身の価値観や考え方を再考し、自分の限界を経験し、また別の文化や人生を持つ人との出会いを通して、ダイアログ・イン・ザ・ダークは単なるイベントを遥かに超えている。

二つめの印象的な効果は、この新たな気づきがなかなか消えないことである。

ダイアログ・イン・ザ・ダークを5年前に訪れた人達に電話でコンタクトを取った。彼らはランダムに選ばれ、自由回答によるアンケートを依頼された。結果は以下の通りである。

100%の人がダイアログ・イン・ザ・ダークの名前を記憶していた。

100%の人がダイアログ・イン・ザ・ダークと一緒にいった人を覚えていた。

90%の人がダイアログ・イン・ザ・ダークは盲人の世界を感じさせるものであったと答えた。

100%の人がダイアログ・イン・ザ・ダークはその目的を達成していたと思った。

98%の人がダイアログ・イン・ザ・ダークでの体験を友人や同僚、家族に話した。

80%の人が自分は「見えないこと」について新たな知識を得たと答えた。

52%の人が他の人にダイアログ・イン・ザ・ダークを勧めた。

34%の人が再訪した。

ダイアログ・イン・ザ・ダークは、社会的、感情的な学びの場を構築することに成功した。他人の価値観について関心を持ち、人間とは何か、という問いかけや思考が始まり、共感を抱くようになるのである。あらゆる年齢、性別、教育レベルや文化、社会的なバックグラウンドに関係なく、この現象は起こった。

さらに、ダイアログ・イン・ザ・ダークは、盲人スタッフの人格やアイデンティティの成長にも大きな影響を与えた。ガイドをすることで、自己認識や晴眼者との関係性が変わり、自尊心が増したのである。盲人は自分の行動やコミュニケーション能力に強みを発揮し、責任を持ち、チームとしてともに働き、自分たちの利益を守ることを学んだ。自分で稼いだ収入は自立に繋がり、家族や友人から敬意を持って迎えらる。多くの盲人にとって、ダイアログ・イン・ザ・ダークが初めてお金をもらえる仕事なのである。彼らの多くは、ダイアログ・イン・ザ・ダークを離れても、他の仕事に応用できる経験や能力を身につけることができる。盲人は福祉の受動的な受け手から、活動的な社会への貢献者と変わり、自分で決めた生活ができるようになる。

戦略

ダイアログ・イン・ザ・ダークのコンセプトは、効率的に盲人の雇用を創出したり、社会やメディアの盲人に対する認識を変えたりするのに有効な手段だと、最初から疑っていなかった。しかし、資金やネットワークがほとんどなかったため、このメッセージを伝える方法が問題であった。1988年、ダイアログ・イン・ザ・ダークが公開された年、フランチャイズ制度はまだ広く普及するビジネスモデルにはなっておらず、商標とノウハウを使った事業展開のアイデアは、知見や戦略的観点からではなく、むしろ必要性から生まれたものであった。

今から考えれば、ダイアログ・イン・ザ・ダークを世界中に広めるもっと良い方法があったかも知れない。私たちは地元の建物、ネットワーク、資源を駆使し、またダイアログ・イン・ザ・ダークが行われる会場の近くに住む盲人だけを雇った。そのおかげで予算を減らし、収入を生み出し、購買力を高めることができた。その上、長期的なアイデアを確立することさえできた。フランチャイズのメンバーは国際的なネットワークでつながり、互いの経験を共有し、相乗効果を生むために毎年一度会合で顔を合わせた。私たちは知識の交換を行い、ダイアログ・イン・ザ・ダークを成功させるために必要なノウハウはどんな小さなことでも提供した。信頼と尊敬に基づいた長期的な国際協力関係をつくるために、お客さんをパートナーに、パートナーには友人になってもらえるように努力した。

教訓

私はこのダイアログを20年近く続けている。そこで学んだ大切なことは、

- 1) 決してあきらめないこと

- 2) 論理的なものに頼らないこと
- 3) 人生は変わることを
- 4) 才能の欠如は継続により補われること
- 5) 信頼されるべき存在でいること
- 6) 人を信じることを
- 7) 常にポジティブでいることを
- 8) お金を決してあてにしないことを
- 9) 人生にルールはないことを
- 10) 成功はもっとも危険な状況であること
- 11) 自身を過大評価しないことを
- 12) 常に謙虚でいることを
- 13) 物事はとてもシンプルになることを

ここ数年で学んだもっとも重要なことは、「すべてをコントロールすることはできない」ということである。不可知なことや予測不能な状況にあっても、自分自身を見失わないことが大切である。

起源

ダイアログ・イン・ザ・ダークのコンセプトは、世界的に受け入れられ拡大していった。人は、社会的ミッションを達成しながら長期的な収入を得られるビジネスモデルを作ることがどれだけ大変か、すぐに忘れがちである。でも私は今、それで生計を立てるのは可能だと知っている。自分自身をプロジェクトに捧げるのだ。それが愚直さであれ、宣教師的な熱意、社会に対するロマン主義、反抗心、不正に対する敏感さ、理解の欠如、闘争心など、どんな理由であれ、道を切り拓いていくこと。その道の終わりに待っているのが、早期退職や、テラスのある家やクラブハウスでの引退生活ではないことは確かだ。もちろん、何があなたを駆り立てるのか、という疑問は常についてくる。

その答えは明白で短い。それが自分にとって唯一の道だということである。ダイアログ・イン・ザ・ダークは、私自身と深くつながっており、自分の歴史の一部として切り離せないものである。そのルーツは、私の家族の歴史とも深く繋がっている。私の母には、ナチス時代に迫害され殺されたユダヤ人の親戚がいた。対照的に、私の父親は国家社会主義的な教育を受け、影の支援者と犯罪者の両方に囲まれて育った。戦後、両親は出会って家族を持った。13歳のときから私はこの家族性を自覚しており、何が人を大量殺人犯にさせ、何が人に人間性やモラル、自尊心を捨てさせるのか何度も何度も考えていた。13歳の頃から、私は知性だけでは理解できない何かを知ろうと試みた。学生時代に歴史や文学、哲学を学んでも、どうして暴力や他人に対する軽蔑、殺人が起きるのか分からなかった。

卒業後、私は放送局に勤務し、情報管理者や記者として働いた。ある日、私の上司から自動車事故で全盲になったジャーナリストを教育してみないかと尋ねられた。私は、基本的に障害者との関わりを避けていたし、全盲という状態に恐怖を抱いてもいた。しかし私はその若い男性

と出会い、彼の前向きな性格、可能性、人生に対する前向きな態度、ユーモア、知識に深く感動させられた。そして障害者に対する哀れみや同情、心配や不安などが混ざり合った自分の態度を恥ずかしく思った。これまで私は、互いの違いに対する理解や受容について追い求めてきたにもかかわらず、人の人生を「価値がある」とか「価値がない」とかで判断してしまっていた。私は放送局で彼を指導して、一生の学びを得ることができた。大げさに聞こえるかもしれないが、盲人との出会いによって、私は人生に目覚めたのである。

研究を通じて、私はナチスが障害者を「役立たず」と見なしていたことを知った。今日、障害者はいまだに社会的に排除され、自己実現がかなわず、社会の端に追いやられている。個人的に盲人と出会えたことは、私の人生にとってとても重要なことであり、私は盲人と晴眼者が一緒に集える場所を創りたいと思った。全く新しい形で、盲人の潜在能力を十分に発揮できる場所を創る必要があることは明らかだった。マーティン・ブーバーの「学ぶための唯一の方法は遭遇することである」という格言は、ダイアログ・イン・ザ・ダークの哲学的なベースになっている - 多くの人が近い将来ダイアログ・イン・ザ・ダークに遭遇することができるだろう。



アンドレアス・ハイネッケは西ヨーロッパで初めてのアショカ・フェローである。彼は障害者の雇用促進や社会認識を変える国際的なソーシャル・フランチャイズ・カンパニー、ダイアログ・ソーシャル・エンタープライズの創始者であり、CEOである。アンドレアスはシュワブ財団のフェローであり、世界経済フォーラムの社会起業家グローバルアジェンダ委員会のメンバーとしてノミネートされている他、様々な賞を受賞している。

Dialogue in the Dark Mail: Alter Wandrahm 4, D-20457 Hamburg, Germany Phone: +49 40 309 634 71 Fax: +49 40 309 634 64 E-mail: info@dialogue-in-the-dark.com Web: www.dialogue-im-dunkeln.de, www.dialogue-in-the-dark.com

マハ・ヘラリ

アドバンス／エジプト 2007年よりアショカ
・フェロー

エジプトで自閉症と向き合う マハ・ヘラリ著

私の自閉症との出会いは1993年、息子が28ヶ月で退行型自閉症と診断された時であった。この聞きなれない病名を知った日を境に、私たち家族は、普通の家族とは異なる生活を歩んできた。

モスタファは、1991年1月の予定日に健康な赤ちゃんとしてこの世に生を受けた。乳幼児のころは睡眠時間が短く、母乳以外の食べ物はほとんど拒んだため子育てには苦勞した。それにも係わらず、20ヶ月目までは問題なく成長しているかのように見えた、彼がそれまで身に付けていた能力を少しずつ失い始めるまでは。



自閉症の症状はじわじわ出てくる。最初の12ヶ月は誰もモスタファの異変に気づかなかった。幼いモスタファは順調に成長していた。外の世界と積極的にかかわり、言葉も着々と習得し、短い文章まで話せるまでになっていた。歌ったり、童謡を復唱したり、塔とドームの上に月の付いたイスラム教のモスクなど、細部まで表現する絵も描くことができた。その頃の私たちは彼の成長ぶりに驚き、「神童かもしれない」と思うほどだった。それがある日突然、原因不明の神経性の異常が次々にモスタファを襲い、それまで身につけていた能力がみるみる失われていった。

20ヶ月目になると、モスタファの異変はもはや無視できないものとなった。口数がどんどん少なくなり、周りに関心を示さなくなった。そして24ヶ月目には完全に内に引き込もってしまい、ほぼ喋ることができなくなってしまった。言語療法も試みたが、治療中以外の効果はなかった。私たち家族はみな心を痛め、途方に暮れた。ちょうど同じ頃、私の一番の支えだった愛する母親が他界し、家族は失意の底へと落ちていった。

28ヶ月目になると、モスタファの多動性と反復行動が目立ってきた。同じ絵を何度も描いたり、部屋の同じ場所を何度も歩き回ったり。多くの親がそうであるように、私も状況を受け入れることができず、保育所を転々とするようになった。小児科医でもあり、理解ある経営者がいる保育所では、注意欠陥多動性障害（ADHD）ではないかと言われ、私は精神科医だった友人

に助けを求めた。彼が我が家を訪れてモスタファを観察した後、反復への執着や音に対する異常な感受性、手順を必要とすることなど、いくつか典型的な自閉症の症状がある、と告げた。その診断も私たちは受け入れることができず、自閉症の子どもを持つということがどういうことなのか想像すらできなかった。そして、他の答えを言ってくれる人を探し続けた。

私の前夫であるモスタファの父ニアールは、エジプトとイギリスの二重国籍を持っていた。1995年2月、イギリス側の親戚が、イギリス自閉症協会の診断拠点であるコミュニケーション・社会性障害センターに、モスタファを連れて行くよう手配してくれた。当時4歳のモスタファに下された診断は、「非定型自閉症」。その時もらったアドバイスは、自閉症児専門の学校に入れるように、というだけだった。私たちが住むエジプトのカイロにそのような学校はないと言うと、ではせめて言語療法と作業療法を続けるようにと言われて、その場を後にした。

帰国後は、インターネットで自閉症の情報を探し始めた。ニアールと私は息子の病状が明らかになったときから、知人の誰にでも息子の状態についてできるだけオープンでいることで合意した。私たちは、決して家の中に隠しておくことはしないと決めた。これが功を奏し、周囲の協力のおかげでモスタファに良い療法士が見つかり、同じく自閉症の息子を持つカイロ在住のアメリカ人女性2名とサポートグループを立ち上げた。

調べるうちに、自閉症はまだ謎の多い発達障害の一種で、周りから心を閉ざし外の世界に無関心になっていくことが分かった。見た目には他の人と変わりはないが、多くの場合、言語と社会性に欠けていて、異常なほど落ち着きがない。彼らは一定の行為を繰り返す反復行動を好む。研究によると、自閉症の人は普通の人とは感覚の働きが異なり、その結果、異なる反応や行動に至ると考えられている。モスタファの場合、異常なほど音に敏感でこれで寝付きが悪い原因が分かった。聴覚が異常なまでに過敏な彼には、壁を隔てた音や、自分の体内の音までも聞こえていたのだ。

1996年に聴覚統合治療を受けるため、ベルギーを訪れた。聴覚統合治療とは、音楽を使って、音に過敏な反応を示さずもっと上手にそれを処理する療法である。治療により、モスタファは3年ぶりに初めて6時間以上継続した睡眠が取れるようになった。おかげで、私たち家族もぐっすり眠れるようになった。

しかし、カイロに帰ると生活は大変だった。転職や引っ越しなどの理由でモスタファの担当療法士は頻繁に変わり、私も色々な治療を受けにモスタファを連れて出かけることに疲れ始めていた。辛い時はサポートグループの一人、ロイス・ハンティングトンがいつも私を励ましてくれた。彼女は、アメリカで障害児のための支援センターの立ち上げに携わったことがあり、同じセンターをカイロでも開けないかと、私は考えるようになった。彼女は自閉症の息子が十分なサービスが受けられるようにと人生を捧げてきた素晴らしい母親で、私の良き友人であり、メンターでもある。



この混乱の中、同じ1996年に父が白血病になり、モスタファの世話にだけ集中できなくなった。私は父が安らかな最期を迎えられるように看病と介護をしなければならなかった。そして1996年4月に、父が他界した。3ヶ月と決めた喪が明けた後、私はそれまで勤めていたユネスコ・カイロ事務所の事務局長を辞め、教育心理学者のベス・ノヴジャム氏と、最初にモスタファの病状を診断した友人でもある心理学コンサルタントのナサー・ローザ氏とともに、教育リソース・センター（the Learning Resource Center）を立ち上げた。きっかけは息子の療法士を確保するためだったが、その頃になるとそれだけではなく、同じ境遇にある親たちの力にならなければならないと思うようになった。それ以来12年間で、教育リソース・センターは、発達障害、学習障害、行動障害の子どもたちを持つ3000以上の家族を支えてきた。

教育リソース・センターのような施設を設立したことがエジプトにはなかったので、許可を得ることが問題だと発見したことは、私の最初の驚きだった。学校ではないので、教育省に申請することはできなかった。営利目的ではないものの、慈善事業でもないもので、社会省に申請することもできなかった。最終的には、発達障害を持つ子どもに医療と各種療法を提供することを条件に、保健省から設立許可が下りた。だから各部門のトップは医学的な専門家ではならなかった。言語聴覚療法はエジプトではまだ専門が確立されていなかったため、言語聴覚療法部門のトップには音声治療学の博士号を持つ医者が就いた。感覚運動部門のトップには、物理療法学を専門とし、理学療法と作業療法の二つの分野を指導できる医者が必要だった。作業療法士もまたエジプトには存在せず、私は2000年から作業療法士育成委員会の活発なメンバーとなり、国際作業療法士連盟も支援している。私たちの目的は、医療専門職としてエジプトに作業療法士を確立することである。

このようにして、教育リソース・センターは、1996年9月によりやく各種訓練を提供する民間クリニックとして活動を開始した。1997年には施設内に2～6歳児を対象に診断も行う育児所、アドバンス部門を開設した。子どもを4～6週間の期間で預かり、専門家による診断を行った上で個別療法プランを提案し、その後、一般の保育園や幼稚園に入園できるよう支援する、というのが当初の思惑だった。必要な療法は提供しても、あくまでも一般の保育所や幼稚園に通い

、社会の主流から外れないようにと考えていた。しかし、より重い症状を持つ子たちにはそれが難しく、結局、保育所や幼稚園から入園を断られてしまった。モスタファもその一人だった。彼らには、適切な療法を組み込んだ一日のプログラムが必要だと気づいた。

そして他の親たちとともに、「アドバンス?エジプトの特別なケアを必要とする子どもたちの技能開発協会」という非営利組織を社会問題省の認可を得て立ち上げた。設立から現在に至るまで、私は会長と事務局長を務めている。アドバンスは、教育リソース・センターに習い、多様な療法を組み入れている。子どもたちはまず、言語聴覚療法、作業療法、特別支援教育と心理学など、多分野に渡る専門家のチームから診断を受ける。そして診断結果に基づき、個々のニーズに合わせ、また能力を伸ばすための個別学習計画（IEP）を立てる。クラスの子どもそれぞれはグループで勉強し、またIEPに応じて個人の療法セッションも受ける。アドバンスの創設者7人のうち、5人が自閉症の子を持つ母親だったこともあり、主に自閉症と関連の障害を持つ子どもたちを対象としている。

3つめの問題は、自閉症とその関連の障害を持つ子どものための治療介入に関するアラビア語の最新資料を探すことだった。しかし探しても見つからなかったので、1999年に欧米の最新プログラムの使用を決め、アラビア語に訳し、内容を地域に合わせ改良することに決めた。そしてサンフランシスコにある有名な団体「ビヘーヴィアー・アナリスト（行動分析）社」に連絡を取り、スタッフ4人をスターズ（STARS）というプログラムの夏季研修に参加させて欲しいと依頼した。そのプログラムは「言語学習アセスメント（アピリスABLLS : Assessment for Basic Language and Learning Skills）」をベースにしていた。ABLLSはもともと3～8歳児向けだったため、私たちは自分たちのニーズに合わせた新たな要素を付け加えなければならなかった。また、運動感覚、就労前研修と職業訓練、美術と工作、社会適応スキル、精神運動訓練などのセクションをプログラムに加えた。その上で、アラビア語の構造や性質に合うよう、言語や文法、学術的な部分も含めて全てを書き直さなければならなかった。苦労の末に、アドバンスのプログラムはようやく完成した。それはABLLSだけでなく、「ポレッジ」や「カロリーナ・カリキュラム」、「自立に向けたステップ」など、他のプログラムの要素も取り入れている。

自閉症患者の7割は知能指数（IQ）に影響を受ける。モスタファもその一人だった。彼はほとんど言葉を発しない。水泳、乗馬、スポーツジムでのジョギングは大好きだ。彼は若く、毎日の生活を楽しんでいて、この先もずっとそうあって欲しいというのが私の願いだ。彼が自分自身の能力に応じて、充実した人生を歩んでいって欲しい。そしてそれが一般の人とは違う人生になるということを、私は受け入れている。モスタファは1月で18歳になった。自立心と生活能力をさらに伸ばすため、アドバンスの成人期移行プログラムに入る。彼の能力に合わせて、より効果的なコミュニケーションの取り方、身だしなみや衛生面など日常生活の技術と、スケジュールに沿っての行動や料理、ガーデニングなどの実務的なものなど仕事関連の技術を学ぶ。アドバンスの利用者が成人になるにつれ、思春期および成人期のプログラム作りは、私にとって新たな挑戦である。

特別な支援を必要とする人々のため、そして彼らが社会に受け入れられるようにするための主張は、非常に重要なことだ。特別な支援を必要とする人々は、どの社会にも約10%はいるといわれている。いかなるコミュニティにおいても、それは無視できない人数だ。そして彼らに対処する唯一の方法は、彼らの能力を向上させるしかない。そのためのサービスを提供する義務が私たちにはある。私の口癖は、「誰でも一瞬にして障害者になることがある」である。ある日突然、車にはねられるかもしれない。その時、周りからどのような扱いを受けたいか、どのように見られたいか？ 社会において優先されるのか、それとも重荷になるのか？ 特別なニーズを持つ子どもと暮らす家族に掛かるストレスは大きく、地域からの理解とサポートなくしては生きられない。

エジプト国家公衆動員・統計局の調査によると、障害者は人口全体の3~4%を占める。しかし、国際機関の統計によると、障害者は中東人口の10~12%と発表されている。この差異は、障害の分類の違いによって生じていると思われる。公表すれば家の名が傷つくという恐れから、家族に障害者がいることを隠す家庭もある。しかしエジプトには推定で750万人の特別な支援を必要とする人々が暮らしており、そのほとんどは今も、法律面でも社会面でも隅に追いやられている。

1996年に制定され、現在、改正が進められている児童法と、1989~99年、2000~2010年に実施された「第一次と第二次エジプト児童保護の10年」などは、インクルージョンの権利を認めていない。エジプトはいまだに障害を医療モデルで捉えているため、IQを基準に子どもを診断し、就学に反映させている。障害を持つ子どもは、IQ50~70の軽度な知的障害を持つ子どものための学校、視覚障害児のための学校、聴覚障害児のための学校のいずれかに通うことが決められている。これら省庁の管轄にある学校は、IQ50以下の子どもの入学を受け入れていない。視覚・聴覚障害児のための学校では、視覚障害児には点字、聴覚障害児には手話と視覚教材を用いて、一般学校と同じカリキュラムを教えているのに比べて、IQ50以上の知的障害児のための学校では、内容を易しくしたカリキュラムを教えている。要するに、省庁は4%未満の障害者しかケアしておらず、そのせいでエジプトの子どもたちは苦しんでいる。言い換えれば、納得できる理由もなく、学習障害、言語障害、難読症、自閉症、社会的・精神的問題、肢体障害、重複障害、事故による脳機能障害は、正式に取り扱われていない。

カイロとアレクサンドリアの18~24ヶ月の幼児を対象に行った自閉症に関する調査では、自閉症が876人に1人の割合で存在していることが分かった（保健省特別ニーズ局、イブラハム・エル・ネケリー、2004）。しかしWHOの統計では、世界的に自閉症は新生児500人に1人とされている。だから私は、エジプトでは500人中1人より多いのではないかと考えている。でも実際は、自閉症を診断するためのアラビア語のツールがまだ標準化されていないため、正確な数値を把握するのは難しい。ただ現在、サウジアラビアとカタールとエジプトで、自閉症診断のためのADI-R（Autism Diagnostic Interview Revised: 自閉症診断面接改訂版）およびADOS（Autism diagnostic observation schedule : 自閉症診断観察法）といったツールをアラブ圏で利用可能にするための協同研究が行われている。もう1つの問題は自閉症に対する社会的

偏見だ。そのために親は障害を持つ子どもを自宅に隠す傾向がある。エジプトでは自閉症の認知度は低い。したがって、子どもの機能が低い場合は知的障害、機能が高い場合は言語の遅れなどと、医師から間違った診断を受ける恐れがある。

自閉症は神経科医や耳鼻科医、また時には子どもを対象とする言語セラピストによって診断できる。ただ、診断される時期は5歳以上と遅く、診断されたからといって受けられるサービスは変わらない。サービスは限られており、必然的に診断後の子どもたちの療育や成長の可能性も狭めてしまう。適切かつ経済的に手が届くサービスを探すのは至難の業だ。エジプトで最も一般的な自閉症の対症療法は、言語療法に認識能力の向上と行動改善のためのトレーニングを加えたものだ。しかし、後者のサービスはカイロやアレクサンドリアなどの大都市でしか受けられない。



アドバンス協会は、自閉症の認知度を上げ、私たちが持つ専門知識とノウハウをエジプト中に広めるため、「4月は自閉症の月」という全国キャンペーンを2005年に開始した。アートの展覧会、スポーツの祭典、親を対象としたセミナー、子どものコンサートや公開カンファレンスなどを毎年違う行政地域で開催している。昨年は、エジプト全20県から自閉症の子どもと大人を対象に積極的に活動している35団体にキャンペーンに参加してもらった。自閉症の認知度を高め、より良い療法に結び付けるための早期診断の重要性を訴え、社会に積極的に参加する子どもたちが持つ可能性を見せる、地域社会のキャンペーンを目的としている。

マハ・ヘラリ

1982年にカイロ大学の経済・政治学部を卒業。現在、ロンドン大学の教育学部にて「インクルージョンと障害学」をテーマに修士課程を修得中。マハ氏は1996年にユネスコを退職し、教育リソース・センターをカイロに設立。1997年にアドバンス（ADVANCE : Egyptian Society for Developing Skills of Children with Special Needs）が発足され、マハ氏は理事長に選任された。2004年12月には、ユネスコの「万人のための教育」の一環で行われたアラブ地域の特別教育に係わるNGOを含めた顧問委員会のコーディネーターを務めた。2006年には、彼女の障害者の啓発活動への取り組みがカイロのアメリカ大学から高い評価を受けた。エジプトにおける

障害者の社会参画の活動を支援するため、2007年にアショカよりアショカ・フェローに選ばれた。

The Egyptian Society for Developing Skills of Children with Special Needs

Mail: 34 Al-Nadi- Al Gadeed St., New Maadi, Cairo 11434, Egypt

Phone: +202-5193721 Fax: +202-5203110

E-mail: advance_society@gmail.com

web:www.advance-society.org

コスマス・オコリ

マーデック/ナイジェリア 1991年よりアショカ
・フェロー

リーチアウト：障害者に力を与える新しい視点
オケチャク・オゾワル著

ナイジェリアの状況

2006年に行われた人口調査によると、ナイジェリアの人口は1億4,100万人を超える。WHO（世界保健機構）はこのうち1,900万人以上が何らかの障害を持っていると推定している。障害を持つ人は、数えきれない程の問題に悩まされている。

■障害者のリハビリテーションはほとんど実現できておらず、自立して家の外に出るために必要な最低限の基本的な移動用福祉機器は不足している。適切な器具を購入するお金がなく、四つん這いになって歩く障害者を見かける事は今でもよくあることである。彼らは社会の最貧層である。

■既存のリハビリテーション施設は財政が苦しく、慈善団体や個人による現金または現物寄付に依存し過ぎている。

■使い込んだ移動機器や装具をメンテナンスする設備が不足している。

■大多数の障害者は読み書きができず、スキルもなく仕事もない。

■障害者は社会から白い眼で見られ、固定観念に基づいたイメージで捉えられており、社会ののけ者にされ差別されている。間違った社会通念によって「欠陥商品」とみなされ、お金をつぎ込む価値はないと考えられている。

■物理的障壁や人々の態度の障壁が、障害者の社会参画を阻んでいる。社会は障害者の存在を否定し、公共のインフラへのアクセスを阻んでいる。

■障害者の苦しみを和らげ、権利を守るための適切な福祉政策や法律がない。職場でもあからさまな差別を受けている。

■障害者が娯楽やプロとしてスポーツに参加するための設備は全く用意されていない。



■障害者は自尊心が低く、尊敬できるロールモデルとなる人もいない。そして周囲からの様々でネガティブな固定観念から、残酷な運命に身を任せ敗者であることに慣れてしまう。

■団結力のあるしっかりとした障害当事者団体がなく、状況改善を政府に訴えることができない。

問題解決のための社会革新：リーチアウト・プログラム

マーデック（MAARDEC：Mobility Aid Appliances Research and Development）は1991年に創立され、障害者のためのさまざまな福祉機器を製造することによってこれらの問題に取り組んでいる。マーデックは1994年に運営をスムーズにするためにリーチアウト・プログラムを考え出した。どれだけ障害者用の製品に補助金をつけても、その多くが障害者に手が届かないということに気づき、この状況を打開するため、リーチアウト・プログラムは誕生した。これはナイジェリア国内の肢体、視覚、聴覚障害者のためのプログラムである。

マーデックと企業・慈善家・自治体の連携のもとで実施されるリーチアウトでは、車イスや長下肢装具、三輪車、松葉杖、歩行器、杖、点字機器、点字時計、装具、補聴器などを、ナイジェリアで必要とする障害者ならびに高齢者に無料で提供している。このプログラムはこれら組織に対し、企業の社会的責任を果たすために信頼できるプラットフォームを提供している。マーデックは年間収入の10%をこのプログラムに提供している

リーチアウト・プログラムは1994年に一ヶ所で始まり、2007年までにナイジェリア全域の6ヶ所に広がった。このプログラムは、自立して動くために最適な移動機器を提供することが、障害を持つ誰にとってもリハビリテーションの第一歩である、という私たちの信念に基づいている。

マーデックは移動機器や補装具の製造において、障害者を雇用し研修している（スタッフの50%が障害者）。しかし、障害者全員に研修を受講させ、全員を雇用することは不可能だ。そこでマーデックはリーチアウト・プログラムで「モチベーションと方法論のエンパワメント・サミット」を導入し、障害者の生活改善のためのカウンセリングを行った。

障害を持つナイジェリア人の多くは、障害について専門的なアドバイスを受けたことがない。その結果、自分にどのような移動機器が必要なのか知らない。多くの人たちはリーチアウト・プログラムで初めて、専門家チームによる支援を受けることができる。

ロータリー・クラブやインナー・ウィール（訳注：ロータリー・クラブ会員の妻が中心となり発足した、地域奉仕を目的とした女性によるクラブ）、ライオンズ・クラブ、ライオネス・クラブといった組織が無料で移動機器を配布することもあるが、その際に専門的・技術的なサポートは提供されない。しかしマーデックのリーチアウト・プログラムでは、専門的・技術的なサポートを定期的に受けることができる。リーチアウト・プログラムは、ただ一方的に移動補助具を配布するわけではない。私たちは受益者と長期にわたる関係を持っており、そのことは特にリサーチの面において、私たちの大きな強みとなっている。

リーチアウト・プログラムは、柔軟かつ順応性があり、障害者を支援したいという個人や大企業、中小企業などスポンサーの予算枠に応じて実施することができる。配布される機器には、たいてい資金提供者の名前や色がついている。

このプログラムはまた、障害を持つナイジェリア人にとって、社会と交流し、繋がりを持つためのきっかけとなっている。

そして障害者の中で数は多くないがロールモデルをつくり、社会的に成功した障害者が若い障害者を指導する場ともなっている。彼らは「モチベーションと方法論のエンパワメント・サミット」の講演や知識提供を通じて、他の多くの人たちに希望を与えている。



リーチアウト・プログラムによって生まれた変化

■プログラムがメディアから注目されたことで、マーデックは障害者エンパワメント団体として全国に知れ渡った。多くの参加希望者がマーデックのオフィスを訪れ、無料の移動機器を欲しがった。新聞記事やインタビュー、テレビのドキュメンタリー、ラジオなどでマーデックの活動を知った利用者は多い。

■リーチアウト・プログラムを通じて、ナイジェリアの障害者に関する広範で貴重な情報データベースが構築された。

■マーデックが設立したASCENDと呼ばれる障害者団体のための理想的な人材発掘の場となっている。

■マーデックの運営基盤が強化された。その基盤のおかげで、アメリカの補聴器メーカーなどと新たな連携が生まれている。

目覚ましい功績

■我々の活動によって、リハビリテーションに対する社会の態度が変わってきた。結果的に障害者の依存性を高めてしまう短期的な施しを行うよりも、長期的視点に立って彼らの自立を積極的に促すというマーデックの哲学が、政府や企業、一般の人々にも広まってきた。

■他の組織がマーデックのアプローチを取り入れ始めた。オンド州の障害者教育財団とアブジャ地方のブワリ・リハビリテーションセンターの2団体がマーデックのモデルを採用している。

■リーチアウト・プログラムによって、社会と触れ合った障害者の態度にも変化が起きた。彼らに自尊心や自己認識が芽生え始めた。

■マスコミの障害者に対する認識が深まり、直接障害者のニーズを知り、インタビューをし、より良い障害者のイメージが映し出されるようになった。

■地元や国際的な組織の関心を集め、ナイジェリアの障害者に対する寄付や移動機器提供のための新たな連携が生まれた。現金や製品の寄付、サービスの提供など多くの支援が寄せられるようになった。

■ボランティアの考えが広まった。500人ものボランティアが自分たちの時間や、時にはお金を提供してくれた。マーデックのスタッフは1994年以来、プログラムに一人当たり2,000時間以上を費やした。

■14年間で、リーチアウト・プログラムに集まった資金は85,265,000ナイラ（約710,000米ドル）。この資金で、ナイジェリア国内の56,000人の障害者に無料の移動機器を配布することができた。「モチベーションと方法論のエンパワメント・サミット」によって、156万人ものナイジェリアの障害者の生活に影響をもたらすことができた。

■リーチアウトの機器の寄贈やローンを活用して、203人の障害者が起業したり既存のビジネスに参画したりすることができた。こうした活動やエンパワメント・サミットがきっかけとなり、物乞いをやめて働きたいという障害当事者の意識変革につながっている。

■ASCENDという素晴らしい障害者団体がリーチアウト・プログラムから生まれた。この団体は障害者の権利を守る法律の制定に向け、ナイジェリアの議員に対するロビー活動を行い、成功を収めた。

もっとも大きな成功

■障害者のリハビリテーションや地位向上に対するナイジェリア社会の認識に変化を生じさせた。「魚を与えるのではなく、魚の取り方を教えよ」という格言のとおりである。

■ASCENDを通して、リーチアウト・プログラムは障害者を大いに啓発し、自らの権利を訴えられるようになった。こうした当事者の声が、リハビリテーションへのアプローチや社会の障害者に対する認識を変えていった。

■1994年以来、リーチアウト・プログラムはナイジェリアのメディアや世間の注目を集めてきた。そして多くの慈善活動を行う個人やCSR活動を実施する企業にとって、信頼できるパートナーとなっている。ナイジェリア・ファースト銀行は、3年間に渡って60台の三輪車やその他の移動機器を寄贈した。また、国営テレビ局でリーチアウト・プログラムを取り上げた30分間のドキュメンタリー番組の制作、放送のスポンサーにもなった。

■自分に合った移動機器を無償で手にしたナイジェリアの障害者は、自分の力で動き、外に出ることができ、尊厳を持てるようになった。人々と交流したり、学校に戻ったり、仕事を探したり、生産的な社会の一員として職業訓練を受けたり技術を習得することが可能になった。障害を乗り越え、苦しめられてきた差別を減らすことができた。

■マーデックは言葉や写真でリーチアウト・プログラムを紹介するニュースレターを、四半期に一度発行している。ニュースレターにはサービスを受けた障害者のインタビューや記事、一般の人、顧客、利用者からのフィードバックなどが載っている。ニュースレターは様々なイベントを通して、無料で一般の人々やスポンサー、寄付者などに配布されている。

課題

■財源

■不十分な人的資源

■信頼できるデータや統計情報の欠如

これらの課題達成に成功するための提案

情熱：「障害を持つ人間の一人として、私はナイジェリアの現状に怒りを覚える。政府は障害者のエンパワメントに向けた努力をまったく行っていない」。

強い衝動とコミットメント：「障害を持つ人々の現状を変えるという私の思いは、障害を持つ人間の一人としての個人的な経験によって駆り立てられている。もしこの試みが失敗すれば、人としても落第であると確信する」。

創造性：変化をもたらすためには、独創的で新しい方法を考案しなければならない。リーチアウトは、そのような独創的な例のひとつである。

忍耐：社会的な変化を起こすためには、人は抵抗にも打ち勝たなければならない。したがって、忍耐強く目的に集中し続けなくてはならない。

信頼：社会の変革者は、威厳を持ち、変化を起こすために必要な信頼を勝ち得なければならない。「私は公人として働いてきて、18年間メディアにも積極的に出てきた。結果として多くの信頼を得ることができた」。

「私はマーデックや創設者のコスマス・オコリ氏とは10年以上の付き合いがある。弁護士として、また軍事政権時代には人権活動家として、ワークショップやセミナーでナイジェリアの障害者の代表として説得力のあるスピーチをする彼と何度か接点があった。

民主制が導入されたにもかかわらず、ナイジェリア政府の障害者問題に対する無関心は変わらなかった。マーデックはオコリ氏のリーダーシップのもと、障害者が正当な権利を持てるような社会を目指して活動を続けた。マーデックは安価な移動機器の導入、障害者の雇用、再教育、障害者スポーツの促進、一般社会に向けた啓発や権利擁護活動など目覚ましい成果を上げた

。

マーデックの多面的なアプローチが一層強力なものになっているのは、その活動が、現状を変えたいという熱意を持った当事者、つまりナイジェリアの障害者達自身が始めたものだからなのだ」

クレメント・ヌワンコ、アブジャ国民民主協会副代表、ナイジェリア

コスマスの物語

イケチュク・コスマス・ブライセ・オコリは、4歳の誕生日を迎えてすぐポリオに感染し両足が麻痺してしまった。しかし彼は早い段階でその障害にめげることなく、遅く生きることを決意した。学校では適切な移動機器がなかったため、這いつくばって移動していた。問題解決の才能があった彼は、足の添え木を改良し、手だけで車を運転できる器具を考え出した。

スポーツが好きだったコスマスは、他の障害者たちと障害者スポーツをするようになり、障害者スポーツの組織化と普及に努めた。彼は車イス卓球のナイジェリア代表にも選ばれた。1995年から2001年までの間、ナイジェリア・スペシャル・スポーツ連盟の会長も務めた。1996年のアトランタ、2000年のシドニー・パラリンピックでは代表団の団長であった。



医学生理学を学び、管理者研修や国際会議などに出席したこともある。また多数の授賞歴を持ち、そのうちの一つの賞で国家公務員の職を与えられた。

しかしナイジェリアにおける障害者の地位向上への熱い思いから、彼は仕事を辞めてマーデックを創設した。コスマスはシュワブ財団の社会起業家でもある。またナイジェリア政府から国家勲章を受けている。既婚で4人の子どもがいる。

「私の生活はマーデックの仕事を中心に回っています。普通の社会的な暮らしや趣味を楽しむ代わりに、仕事に全力を注いでいます。私が挑戦すればするほど、自分の努力が大海の一滴に過ぎないことに気づかされて、ナイジェリアにいる障害者の権利向上のために、もっとがんばろうと決意を新たにしています」。

コスマス・オコリは46歳。マーデックとASCENDの創立者であり、会長である。障害者の総合的な権利向上を訴えている。1991年からアショカ・フェローであり、シュワブ財団の社会起業家でもある。既婚で4人の子どもがいる。

MAARDEC: Mobility Aids and Appliances

Research and Development Centre

Mail: 7 Ikorodu Road, Maryland, Lagos P.O. Box 14986, Ikeja, Lagos, Nigeria

Phone/ Fax: +234 1 4931972

Mobile: +234 803 673 3140

E-mail: info@maardec.net, maardec@yahoo.com

Web: www.maardec.net, www.maardec.org

ピョートル・パウウォフスキー

インテグラツィア協会友の会／ポーランド
1996年よりアショカ・フェロー

障害者のためにポーランドをどう変えるか？
ピョートル・スタニスロフスキー著
フィリップ・アール・スティール英訳

ポーランドの統計データ

人口3800万人を超えるポーランドはヨーロッパの中心部に位置し、旧共産圏の国々で20年来起きている社会的、経済的な変革においてリーダー的な存在といえる。ポーランドは2004年からEUのメンバー国である。2004年の公式な統計（中央統計局2004年）によると、人口の16%（620万人）が障害の影響を受けている。すなわち、ほぼ7人に1人のポーランド人が大なり小なり障害で苦労している。



ポーランドの障害者

ポーランドの障害分野に対する大きな変化は、第二次世界大戦後、ソビエト圏で初の民主的な政府が樹立された1989年の共産主義の崩壊とともに始まった。新政府は障害者を行動的にするよう企画した改革、特に「1997年8月27日、障害者のための職業、社会的リハビリテーションおよび雇用に関する法」を導入した。またたとえば1994年8月7日の建築法など、障害者のニーズに応える新たな法律や条例が生まれたので、何千もの障害者団体や協会が国中で設立された。

ポーランド人の経済活動に関する統計によると、障害を持つポーランド人の教育レベルは依然としてもっとも低くなっている（出典：BAEL）。多くの障害者（約68%）の最終学歴は、小学校か中学校、もしくは職業訓練校に留まっている。かろうじて25%以上の人が高校までの教育を終了した。高等教育に進んだポーランドの障害者は約6%である。

労働市場をみても、状況はそう変わらない。（EUのプログラムのおかげで）障害者の雇用は最近少し増えてはいるものの、他のヨーロッパ諸国と比較すると半分ほどの割合にすぎない。統計によると、18-64歳の障害者のうち、仕事に就いているのは20.5%で、そのほとんどが比較的軽度な障害である（出典：BAEL2009年上四半期のデータ）。

しかし障害者の状況やニーズに関する認識は、徐々に高まってきている。多くの都市が低床路

面電車やバスを採用し始めている。つい数年前まで、ポーランドの大都市における公共交通機関のバリアフリー化率はたった10%であった。それが今や、都市部の半数以上の車両がバリアフリー対応となっており、中には80%以上の割合を占める都市もある。低床バスや路面電車しか採用しない都市も増えてきている。建築物がバリアフリー化された環境を作ろうとする変革も進んでいる。労働市場でも、障害者に門戸を開く事業主が増えてきた。特別なニーズが必要な生徒を受け入れる学校が増え、そのいくつかには統合学級がある。未解決の問題も多くあるが、建築法と選挙法が改正され、国会で採択されれば、現状の変革はさらに進むだろう。

ピョートルのプロフィール

ピョートル・パウウォフスキーは、16歳で自分の人生が劇的に変わるとは想像もしていなかった。夏休みのある日、彼はワルシャワ近くの川に頭から飛び込み背骨を折ってしまった。そしてほぼ全身麻痺の状態になった。それ以来、車いすでしか行動することができない。彼は統合中等教育では個人授業を受けた。卒業後、ワルシャワにあるカトリック神学アカデミー（現在のステファン・ヴィシンスキ大学）において教育学を学んだ。その後、ワルシャワ大学で倫理学と哲学の修士課程を終えた。さらにポーランド科学アカデミー哲学・社会研究所の博士課程に進んだ。彼の他の探求の一つは、日本語を勉強することだった。実際、彼は将来翻訳家になろうと考えていた。しかし、彼自身を含む多くの障害者が自立生活を営むことを妨げる障壁と何年間も闘ううちに、結局、彼はポーランドの障害者の完全な社会参画を実現するために人生を捧げることを決意した。

障害を持つ人が社会で普通に生きていけるようにすることが、彼の情熱であり、使命となった。1994年、彼はポーランドの障害者が直面する問題や困難に光を当てるために「インテグラツィア（社会統合）」という雑誌を創刊した。1年後には、「インテグラツィア協会の友人」を立ち上げた。それ以来、障害者の完全な社会参画の達成を支援する新たなパートナーや友人の輪が広がっていった。彼の組織は100名以上の従業員を抱えるほどに成長し、今やポーランドでもっとも有名な障害者団体のひとつとなった。

ピョートル・パウウォフスキーは、団体を通じて多くの全国的な啓発キャンペーンを仕掛けていった。これらのキャンペーンは、障害者をはじめ、他の人々が直面する重要で具体的な問題に懸命に取り組むため、メディアを利用した。実質的には、そのすべてがステレオタイプの障害者に対する誤ったイメージを覆し、障害者と接する新たなスタンダードを提示した。中でも印象に残るキャンペーンを挙げると、以下のものがある。「PlytkaWyobraznia-to kalectwo（浅はかな考えがあなたを障害者にする）」、若者に状況を理解せず水に飛び込む危険性を訴えたもの。「Czynaprawdechcialbysbycnanaszymmiejscu?(それでも私の場所が欲しいですか?)」、障害者専用の駐車スペースの問題を取り上げたもの。「Ploskabezbarier（バリアフリー・ポーランド）」、ポーランドの都市におけるアクセシビリティを推進するもの。

「Sprawni w Pracy（働ける）」、障害者に働く意欲と、事業主に障害者雇用を呼びかけるもの。



彼のもっとも輝かしい功績の一部は、

- 1) 障害者コミュニティにとって重要な問題を取り上げる、ポーランドで最大の雑誌の創刊（発行部数40,000部）
- 2)国内最大の障害者問題に関するポータルサイトの立ち上げ（閲覧数月20万）
- 3)ポーランドの主要都市におけるインテグラツィア情報・相談センターの設置
- 4)ポーランド公共放送で週1回の障害者に関する番組の放映のロビー活動の成功
- 5)障害者が直面する課題に対するポーランド最大のメディア・キャンペーンの開始と実施

ピョートルの活動の核をなすもの

社会的にも、個人的にも障害者の生活を変え、また彼らが普通の生活を送れるよう手助けをすることが、ピョートル・パウウォフスキーの事業の目的だ。

この取り組みは2つの重要項目がある。ひとつは、障害者を直接対象にしたもの。障害者が積極的に仕事を探し、職業訓練に参加し、教育を受けること。そして、他者に依存することなく自立し、障害者が幸せになることを目的とした活動やイニシアチブ、そしてキャンペーンである。この一連の目的達成に使われたのが、雑誌「インテグラツィア」や関連書籍の出版、ポータルサイト、ポーランドのいくつかの都市にある5か所のインテグラツィア・センターである。各センターでは研修や情報提供を行い、法的・心理的なカウンセリングサービスを実施している。また、ポーランド公共テレビで毎週放送される番組は、重要な位置を占めており、現在様々なメディア・キャンペーンと一緒にインテグラツィアはドキュメンタリーを準備している。

ピョートルの仕事でふたつ目に重要なことは、障害者の近くに暮らす幅広い人々、すなわち、家族、雇用主、教員、施設職員や一般市民などを対象にした一連のプロジェクトを巻き込むこと。ピョートル・パウウォフスキーが率いる団体は、労働社会政策はもちろん、教育・文化・スポーツの分野において、政策決定者に対するロビー活動も行っている。また、インテグ

ラツィア協会支援者会は、障害者の機会均等を保障する法案の起草に取り組んでいる。

ピョートルのプロジェクトがもたらした変化

ピョートルの団体が実施してきたプロジェクトは、なんといってもポーランドで社会的認識を高めることに貢献した。プロジェクトは、障害者やその家族がもっと自分たちの権利や、生き生きと生きる可能性について学ぶための道を開いた。また建築家や公務員、公的施設の職員やビルのオーナー、公共交通機関の運営者などに、モデル事例や解決案も示した。障害者にやさしい公共スペースや公共交通機関の改革によって、ポーランドに住む多くの障害者は、家を出てあらゆる活動に参加できるようになった。インテグラツィア協会友の会が手がけた地域的、全国的なキャンペーンは、障害者の低い雇用率を含め、障害者が直面する問題に社会の目を向けさせた。2、3年前には、事業主は障害者を雇うことを恐れて、彼らに仕事を創出することはなかった。それが今では、障害者雇用は多くの業界で常識になりつつある。インテグラツィアは、ワルシャワ、グディニャ、カトウィツェ、クラクワ、ジェロナグーラの5都市に5つのインテグラツィア・センターを開設し、就職の直接支援も行っている。各センターは障害者が仕事に就く準備の場である。スタッフは適職を見つけるための情報、トレーニング、必要なサポートの提供を行っている。2008年だけで1,000人が職を見つけ、2,500人が専門家研修を受講し、14,000人が個々の問題についてアドバイスを受けた。

インテグラツィアの全国的なメディア・キャンペーンによって、初めて社会（と地方行政機関）は障害者が直面する基本的な問題に目を向けるようになった。この障壁を打ち破るピョートルの著名な戦いは、現状を改革したので、現在では多くの投資家が、彼に建物を障害者仕様にするための相談を寄せるようになった。歴史的建築物も含むポーランドの国会議事堂もその一例だ。ポーランドの国会議事堂は、車いすを使う議員も不自由なく演壇が使えるよう大改造し、ようやくその扉を障害者に開いた。

インテグラツィア協会友の会の業績は、法律改正においても顕著である。法律改正の提案者、また推進者として（そして彼の団体は法律改定案を作る政府のコンサルタントになっている）、ピョートル・パウウォフスキーは、建築法や交通法を改善する役割を担っていた。交通分野では、インテグラツィアと内務省、行政の協力のもと、障害者の駐車スペースに違法駐車した非障害者ドライバーに対する罰金を改正前の僅かな金額から500ズロティー（約14,600円）まで引き上げた。またピョートルの理想とねばり強い熱意が生んだもうひとつの重要な出来事は、ポーランド初の障害者の機会均等に関する法律の提言である。準備に2年を費やしたこの提言は「全ポーランド障害者連盟」の代表者によって、2008年12月に総理大臣に提出された。障害分野のNGOによって構成されるこの連盟自体もピョートルの呼びかけにより立ち上がったもので、現在では政府の対等なパートナーとなっている。

彼の業績として、統合という考えのもと、多くの組織や企業そして個人を一体化したことが上げられる。彼らインテグラツィア後援者は、ピョートルが目指すことの価値とそれが社会全体にもたらす利益に共感し、彼の活動を支援している。

アショカは彼に何を与えたか

ピョートルにとって、アショカが自分を信頼してくれたこと、そして1994年から続けてきた活動のアプローチが正しかったと評価してくれたことは大きな喜びだった。

社会事業のリーダーと彼らの貴重な問題解決策を支援するこのアメリカの団体が彼を受け入れた時、インテグラツィア協会友の会はまだ発足したばかりだった。アショカの一員になることで、彼は世界で活躍する社会事業のリーダーたちの活動について学び、ポーランドのアショカ・フェローと結びつくことができた。それによって大部分が善意のボランティアで成り立っていた小さな組織は、専門家による障害者のための幅広いプロジェクトを実現できる100人規模のチームに成長を遂げることができた。

今日、インテグラツィアは大きな組織であり、ポーランドに重要な変革をもたらしてきた組織である。ピョートルは生まれたばかりのインテグラツィアに手を差し伸べてくれたアショカに感謝している。

インテグラツィアは他の国でも成功するか？

ピョートルが行ってきた活動は、ポーランドの障害者のニーズを満たすために始まった。彼の手法は普遍的なもので、どの国でも転用できると言ってもいいだろう。特に文化・歴史的に似た背景を持ち、障害者が抱える問題にも共通項の多い中央・東ヨーロッパでもっともスムーズに適用できるといえる。たとえば、障害者、健常者、雇用主や公務員を対象に、いかに効果的なキャンペーンを行うか、障害者のための法改正をいかに促すか、などは有効だろう。

また障害者に対する包括的なサービスや支援を提供するインテグラツィア・センターの設置も、ぜひとも他の地域で採用してもらいたい手法だ（ピョートルはポーランドの全16県に1つずつセンターを創設することを予定している）。

ピョートルについて

「ピョートル・パウウォフスキーはポーランドの障害者の社会参画活動において、誰もが認めるリーダーだ。障害者が能力開発や教育を受け、文化的な生活を送れるような社会政策を実現するために、彼はあらゆるキャンペーンを提唱し、引っ張ってきた。ただ政策や施設、世論に影響を与えただけではない。その過程で障害当事者の能力を向上させ、情報へのアクセスを保障し、また組織化することによって、彼らに力を与えた。雑誌『インテグラツィア』やポータルサイト、メディア・キャンペーンは、そのために大きな役割を果たした。

ピョートルは、たとえ身体的にもっとも重い障害を持っていたとしても、体内に不屈の精神さえあれば障害を乗り越えられるということを、その生き方で示している。私は長年ピョートルの活動を追ってきたが、彼のカリスマ性、ビジョン、エネルギー、そして意味のある変化をもたらそうとする揺るぎない決意を深く尊敬している」。

アントニーナ・オストロウスカ

ポーランド科学アカデミー社会学研究所、ワルシャワ、ポーランド



ピョートル・パウウォフスキー

1966年生まれ、在ワルシャワ。既婚。1982年に浅い水に飛び込み全身麻痺になって以来、移動するには車いすを使わなければならない。

ワルシャワにあるカトリック神学アカデミー（現在のステファン・ヴィシンスキ大学）教育学部卒。家族学研究院、ワルシャワ大学で倫理学と哲学の博士後期課程を修了した。

ピョートルは2つの組織の創始者であり、運営者である。インテグラツィア協会友の会とインテグラツィア財団である。その目的や使命は、ピョートルが発する社会的なキャンペーンや教育的プログラムと同様に、雑誌「インテグラツィア」やラジオ、テレビ番組で発信される。政府国家協議会障害者全権大使、市民権擁護委員会障害者部代表、障害者連盟副会長などの役職を持つ。TOTUS賞（人道・慈善・教育分野における貢献に贈られる）、アンドレ・バチコフスキー賞など数々の賞を受賞している。また、ポーランド復興勲章（訳注：軍人以外の市民に授与される、ポーランドで高位の勲章のひとつ。教育、科学、スポーツ、文化、芸術、経済、国家防衛、社会活動、公職活動、外国との関係強化の優れた功績に対して授けられる）、国家教育省より国家教育委員会勲章も受章した。

The Friends of Integration Association

Mail: ul. Dzielna 1, 00-162 Warszawa, Poland

Phone: + 48 22 536 01 11, Fax: + 48 22 635 11 82

web: www.niepelnosprawni.pl,

www.integracja.org

ベアトリス ペリザーリ

ラ・ウシナ、アルゼンチン 1999年からアシ
ョカ・フェロー

アルゼンチンで障害に対する態度を変える キャ
ロライン・ハイデンハイン著 ピーター・ダグラ
ス英訳

2002年、アショカ・フェローであるベア・ペ
リザーリは、コミュニティで差異の価値を認
めない社会的な偏見を変えようと考えている、
障害がある・そしてない、双方の市民グルー
プを一堂に集めた。その時の議論は、「ラ・ウシ
ナ（La Usina）」と呼ばれる非営利の市民団体
をアルゼンチンに創設することについてであ
った。団体の使命は、障害に対するコミュ
ニティーの態度に変化を促すこと。またそのよ
うな変化を発展させるためにコミュニティの
活動を活性化させることであった。



ラ・ウシナは、ベア・ペリザーリが彼女のスタッフと一緒に動かす「エネルギーの発電機」で
あり、「変化の動力装置」である。彼女たちの努力は、コミュニティで相互に活動するこ
とや、民主的な社会が市民に提供すべきすべての機会を楽しむことから障害者を遠ざける文化
的なバリアーを壊すことに特化している。だから、ラ・ウシナの使命は、障害者がコミュ
ニティーで活動的で認められた存在感のあるメンバーとなることを支援することである。

アルゼンチンの障害者の状況

アルゼンチンで障害者の現状を表すいくつかの重要な統計は、以下の通りである。

■2003年に行われた最新の公式調査によると、220万人の障害者がアルゼンチンに暮らして
いる。障害者と一緒に暮らす家族を含めると、これは少なくとも670万人に影響を与えている。

■アルゼンチンの障害者の40%は雇用されていない。労働の国際機関の調査によると、障害者
の失業率は3倍も高くなることを私たちは忘れてはならない。

毎日、障害者は地域社会における社会的、経済的、そして政治的な活動から彼らを排除する障
害物と直面しなければならない。家から出る、コミュニケーションをとる、教育や地域生活へ
アクセスするなどの能力なしに、障害者は地域で目に見えない存在となり二流市民と見られて

しまう。社会全体で長らく続いている障害者に対する多くのステレオタイプや歪曲された見方は、この隔離状態から派生している。しかし、障害者を代表して活動する団体を支援することが期待されている政府は、社会的なプログラムに対する予算を減らし続けている。この事実がそのような団体の存在を益々難しくして、障害者が本当に必要としている支援や救済などなしに、障害者を放置している。結果として、しばしば「静的な」団体、つまりやりたいサービスの提供を実施できない団体となる。したがって、これらの団体は自分たちの殻に閉じこもる傾向があり、それが障害者の周縁化や社会で見えない存在になることを助長させている。

ラ・ウシナの障害に対するアプローチ

社会セクターにおける革新的なアイデアを頼りにして、ラ・ウシナは、社会の中で異なる視点が相互に交わる状態を創り出そうと挑戦している。コミュニティの認識を高めたり、社会組織を強化したり、彼らの目標や目的をはっきりと伝えることを支援したりして、障害者に対する世論を変えようとしている。このような活動により、それら社会組織が、アルゼンチンのコミュニティで孤立している現状から解放されると信じているからである。

ラ・ウシナは、既にある社会機構の仕事を補強し、はっきりと伝達する能力があり、常に根本的な構造変革を進めるという究極の目標をもつ、アルゼンチンにある数少ない団体の代表的な存在である。それは既存のNGOと他のローカルな活動家の結びつきを促進することや、社会を変えるために相互努力の連鎖を活性化させること、問題の明確な可視化を達成すること、そして究極的に障害者に対する世論を変えること、などによって「社会の細胞組織」を治療できるのか、という問いかけである。

このような使命に導かれ、ラ・ウシナは、三つの具体的な運営戦略を活用し、全国レベルで目標を実施している。

1) 障害者のそして障害者のための組織を持続させるプログラム

ネットワークと多分野にまたがる仕事を通し、より良い事例を促進し障害者コミュニティにおいてより目立つものを創出することにより、将来性のある障害者団体を通じて、障害をしながら生活する人の活動を支援すること。

2) 市民の義務に対するプログラム

問題が普通なら無視されてしまうような環境において、市民の障害に対する認識を高めることや、障害者が普通なら排除されてしまうような分野で、障害者に機会を提供することで社会的な課題に影響を与えること。「市民の義務に対するプログラム」を通じて、いろいろな活動の中でも、ラ・ウシナは以下のイニシアティブを達成しようとしている。

a) 毎年の啓発キャンペーン

ラ・ウシナは、障害に関する様々な側面に関しコミュニティを教育するために、毎年、啓発キャンペーン（全国の大学の学生コミュニケーションを通し全国コンテストによって毎年選ばれる）をアルゼンチンで始めた唯一の団体である。毎年の新しいキャンペーンは、メッセー

ジを強化し、コミュニティにいる障害者に関する情報を広めることを意図している。すべてのキャンペーンは街頭広告、賞として与えられたテレビCM、ラジオ、インターネット、フライヤー、カード、新聞やブログなどでメッセージを拡散している。

b)市民キャンペーン「実施しなさい！あなたは変化を起こせる！」

2007～2008年にかけて、ラ・ウシナは「実施しなさい！あなたは変化を起こせる！」という市民キャンペーンをフィンランドのアピリス財団の援助で実施した。このキャンペーンを通じて、ラ・ウシナはアルゼンチンに既にある障害者法を執行するために、市民から10万人以上の署名を集めた。このキャンペーンは、障害者の問題に社会の関心を集めるため、そして障害のある人もない人も、積極的に参加できるように始められた。障害者が毎日の生活で直面するもっとも深刻な障壁、無関心という障壁に対してである。障害者も障害を持たない人も、活動の中心となって働いたこのような性質の取り組みは、アルゼンチンではこれまで一度も組織されたことはなかった。このキャンペーンは34の民間企業、異なる地方の9つの行政機関、5つの大学、37のNGO（その中の多くは、今まであまり障害者問題を取り上げていなかった）の取り組みを一つにし、明瞭に伝えた。





3) レッドアクティボス・プログラム

レッドアクティボスは、倫理綱領に基づいた、障害者によって開発された製品やサービスの商業化や流通のためのネットワークである。このプロジェクトは、障害者による生産的な試みを支援し、維持するための基金を作り出すことになっている。さらに、このプロジェクトによって生み出された利益で、ラ・ウシナは障害を持って生きている人の状況を改善するために、新しいイニシアティブに投資する予定である。

レッドアクティボス・プログラムは、アルゼンチンに約220あり、およそ8,000人の知的障害者が商品を作っている「保護された生産ワークショップ」の中で機能している。現在行われている生産の第1段階では、レッドアクティボスは、（約140人の障害者が働いている）10の保護されたワークショップを代表し、そこでは障害者が貧困や排除を克服する手助けをしている。レッドアクティボスは、これら保護されたワークショップを、赤字状態から自立へと転換させるために設計された3つの方針に沿って実施されている。3つの方針とは、

■保護されたワークショップの作業工程の向上：

ワークショップの生産性の向上及び完成品の品質向上のために、研修や技術支援が提供されている。それと同時に、ワークショップにプロフェッショナルな環境を用意して高い水準の生産を成し遂げようとしている。

■市場における商業運営：

レッドアクティボスは、売り上げの安定性を確保するために、社会的な責任を負う顧客とだけ仕事をする。それが各ワークショップの持続性と障害者の労働機会を確保するからである。

■商品のまとめ買い：

レッドアクティボスは、商品の質を保ちながらリーズナブルな価格を保持するために、必要な量だけ材料を供給できる信用ある納入業者とのみ仕事をする。

主な課題とそれを克服する戦略

ラ・ウシナは、創設メンバーから寄付された、たった100ドルから始まった。だから運営するた

めの財源も物品もなく活動を始めたことが、ベア・ペリザーリが、団体を創設したときに直面した主要な問題だった。燃えるようなモチベーション、資金不足による危機的外観、そして（彼女のプロとしてのキャリア形成で培われた）社会的関係のネットワークが、組織構造が継続して発展していく上で決定的な要因となった。

現在でも、主な課題は組織のプロジェクトに出資することや、確固とした経済的な自立を保つためにラ・ウシナの運営費を確保すること。そして知識を使ったり、ラ・ウシナのチームを研修したりすることで目標に向かう資源を生み出して行くことである。そして注意すべきは、ラ・ウシナが直面する主な困難のひとつは（逆説的に、その創造的な性質と関係するが）、彼らのプロジェクトは、通常、公的融資の範囲では考えられないことである。その使命の性質上、ラ・ウシナは国家に対してサービスを提供しないため、国の資金を受けとることができない。過去の稀なケースを除いて、これがラ・ウシナが国と長期間効果的に仕事ができない原因である。

ラ・ウシナのメディアの認知度が高いせいで、この問題はより深刻化しており、資金や資源を獲得しようとしている団体の努力がたびたび妨害されている。ラ・ウシナのメディアの露出、つまりアルゼンチンでは非常に著名になってしまったことで、この組織はお金を必要としないという誤解が引き起こされている。しかしこのメディアの露出は、「現物支給による寄付」（つまり無料放送枠や様々なメディアによる寄付広告）を発展させ運営するために、ラ・ウシナのプロフェッショナル・チームが懸命に努力して成し遂げたものであった。とは言っても、彼らの高いパフォーマンスとラ・ウシナの運営維持のために必要な技術管理能力に対し、このチームは感謝されるにふさわしい存在である。

社会的な組織に資金を供給しようとするときに直面する困難から生じる様々な制約が、ベア・ペリザーリを、資源の多様化と経済的自立を成功させるためのファンドレイジングへと導いた。この試みは、3つの具体的な側面を重視している。

- 1) 「変化のための投資者」という個人寄付者
- 2) 国際協力（実践の交換と資金協力）
- 3) 団体の使命に対する自己投資の資源

後者2つの投資資源は、2つのプロジェクトに関与している。

■アクティブ・ダイバーシティは、ワークショップや啓発プログラムなどを含む独自に作られた様々なモジュールを通して、障害者問題に取り組もうとする会社を支援している。それらは、障害者の雇用促進や障害を持つ顧客に対するサービスの向上を目的としている。

■レッドアクティボス・プログラムは、この資源開発戦略の一端を担っており、保護されたワークショップと障害を持つ従業員の為に収入を生み出すことに加えて、得られた余剰収益は、財政の脆弱性を最小限にするためにラ・ウシナにすべて投資され、使命から外れないようにしている。

この二つの運営方法は、アルゼンチンにおいて非常に斬新的なものである。それにも関わらず、自立と経済的資源のマネジメントという懸念事項には、多くの時間が必要とされる。そして、多くの場面において、特別会員やスタッフを実際のプログラムの具体的な実施から遠ざけてしまう。またさらに、特別会員の知識と経験を彼らの専門分野からも度々遠ざけてしまう。ということは、レッドアクティボスとアクティブ・ダイバーシティのように、ラ・ウシナの使命を達成し、資源と資金を生み出す両方を組み合わせた計画案は、合理的な選択肢を与えるように見えるし、将来の持続性に貢献するであろう。

教訓：社会変化へのアプローチの方法

1. 現物寄付の開発に努力する

ラ・ウシナの主たる強みのひとつは、「最悪のステップは、ステップを踏み出さないことである」というモットーのもとに、物的な資源を開発していることである。自らの製品やサービス、才能などを提供したり、また自分たちの仕事のために、団体の使命に共感して社会に価値を提供したりすることに興味がある多様なプレーヤーとの関係を確立することで、「誰が私たちに必要なものを持っているのか？」（多くの場合、それはお金だけを指しているわけではない）という前提から抜け出すものである。現物寄付を得るためのマネジメント・プロセスには、任務を実行するために、積極的な関与と忍耐強いチームが必要であるが、その成果は多くの場合金銭的な寄付という形よりもっと直接的である。たとえば、毎年恒例の啓発キャンペーンは、多くの異なる専門家や会社の幅広いサポートのおかげで可能となっており、彼らはTVやラジオ、またリースペースのコマーシャル製作や他のメディア形態を使った広告特集などを寄付している。

2. 社会活動家と参加者の間にある協調の重要性を理解する

ラ・ウシナの使命と発展したプロジェクト、そしてもちろん寄付は、ベア・ペリザーリとそのチームが絶え間なく生み出し深めるために働いてきた関係性なしに不可能であろう。このような関係性のネットワークは、何よりも人によって形成されていることを忘れてはならない。彼らは、会社、メディア、他の団体の代表かもしれないが、何よりもまず関心、価値そして恐れを持った市民なのである。課題は、連携を創り出すために共通の関心事を見つけることである。その中では、まるですべての関係者がパートナーから価値を受け取っていると感じられ、また自分にとっても、仕事を通して価値と改善をコミュニティに与えていると感じられる事である。このような協調性を通して、すべての参加者と障害者問題に取り組み、障害者に対する社会の態度を変えるというラ・ウシナの使命を実現しているのである。

3. 社会的な団体を社会起業家として解釈する

ラ・ウシナは、経済的持続性や資金調達に関する困難と心配に直面している。その原因の一つは、アルゼンチンが政治的にも経済的にも多様な混乱状態にあり、国の助成金は、ほとんど伝統的なコンセプトを持った慈善事業に向けられているためである。したがって、資金の調達源を徐々に多様な資源、特に組織の使命に対して継続して貢献する事ができ、且つしっかりと

した独立性を保持した資源調達が可能となる社会起業家の創出などに向けてることが賢明である。こうすることによって、国や私企業の寄付に頼る組織の依存性を軽減することができる。



ベア・ペリザーリ

47歳、1999年からアショカ・フェロー、障害分野における業績によって選ばれた。彼女は社会心理学者であり、「障害を持つ従業員のリハビリテーション」に対するスペイン・マパフレ医療財団（MAPAFRE Medical Foundation）の過去の奨学金受給者である。大きな自動車事故にあって生還して以来、彼女はアルゼンチンで障害者問題に特化して取り組んでいる。2002年、彼女はラ・ウシナ（障害での変革）を創設した。国全体で障害者に対し、戦略的に文化と社会変化をもたらそうとする市民社会組織である。ウルグアイに生まれ、1983年から夫と娘とアルゼンチンのブエノスアイレスで暮らしている。

La Usina

Mail: Viamonte 1690, PB "A" (C1055ABF), Ciudad de

Buenos Aires, Argentina
Phone: +54 11 4372 1266
E-mail: info@lausina.org
Web: www.lausina.org

ヴィクトリア・ショクロン

ディスカー（DISCAR）／アルゼンチン 1994年
よりアショカ・フェロー

社会で活躍するための知的障害者の支援 社会参
画の方法としてのアート レオナルド・ショクロ
ン著

アルゼンチンにおいて、知的障害者の数は他の
障害と比べるとそれほど多くはない。しかし、
彼らの社会参画を実現するためには、幅広く、
想像力に富んだアプローチが求められる。

なぜ知的障害者に特別なアプローチが必要なの
のか？ 大抵の場合、彼らは社会の隅においや
られてしまっているからだ。かなりの社会的
差別、雇用や教育の差別、家庭内での差別さえ
受けている。実際、差別のレベルを測ることは
難しい。恥と捉える親族から隠され、隔絶という古い文化的様式を押し付けられる。

アルゼンチンの人口の7%以上が何らかの障害を持っている。これは人口3600万人の約220万人
を意味する。そのうち、精神障害者の数は障害者全体の約15%にあたる33万人程度である。「
精神障害」が何を指すかということ、詳細の定義はされていない。知恵遅れ（63%）と、その
他（37%）の2種に区分されており、小児精神病から自閉症までその他の分類は及んでいる。

精神障害者の約40%は健康保険に加入しておらず、国の保健政策は障害者に対する方針を一切
示していない。したがって、各事例は保健の問題として始まり、家族の仕事が増えたり家計へ
の圧迫が生じたりして、普通、家族に大きな影響を及ぼすので社会問題となる。現在、アルゼ
ンチン家庭の3%に少なくとも一人の精神障害者がいる。彼らのうち何人が職に就けるかは、
誰にもわからない。

憲法第75条は、すべての人に平等な機会と待遇を保障するよう国会に義務付けている。健康保
険や幅広い保障システム、家族に対する特例制度に始まり、公的サービスを行う企業と政府
に4%以上の障害者雇用を義務付けるなどの制度が設けられている。民間企業においては、障
害者の雇用に応じて経済的な優遇措置が適用され、障害者を対象とした物づくりのワークショ
ップも行われている。しかしこれらの政策は、伝統的に知的障害者を守ることに終始して
いた。知的障害者に一般市民として主権を与えたり、彼らが他の人と同じように社会の一員
になったり、ということの人々に印象づけるような効果はなかった。



そのような状況の中で、障害にそれほど重点を置くのではなく、コミュニケーションに重点を置くことで社会に大きな変革をもたらそうとしたのがディスカー（DISCAR）である。

コミュニケーション

コミュニケーションは社会参画をよりよく進めることができるので、ディスカーは、知的障害者にアートを通じた様々なコミュニケーション手段を提供することを目的に、17年前に設立された。ディスカーは、この目的のもと初めて設立されたアートセンターで、そのワークショップは知的障害者の能力開発の手段として注目を集めた。

「あとになって、彼らが置かれている状況を知らなければならなかったとき」とディスカー代表のビクトリア・シヨクロンは説明する。「なぜなら初め、私たちは何も知らなかったので、就職面の問題など、まだまだ着手されていない部分が多くあることがわかってきたのです。そこから活動の幅が広がってきました」と彼女は白状する。

1993年、知的障害者の就職促進を目的に、雇用支援プログラムが生まれた。障害者のために仕事をつくるのではなく、仕事に障害者が適応できるようにする。それは真の社会参画を意味する。

パラダイム

ディスカーは、絵画、舞台芸術、音楽、読書、執筆（および生徒の作品の出版）、調理（現在はアルゼンチン料理学研究所で行われている）、大人への移行、パソコン、雇用など、多岐に渡るワークショップを提供している。これらのワークショップはすべて、障害者に対して提供されているワークショップとはまったく異なっている。これまでの方法論では、障害者を治療、特別教育、リハビリテーションによって支援することに目的が置かれていた。しかし、ディスカーのスタッフの言葉を借りれば、「リハビリテーションとは、機能させられるのではなく、何かを機能させる」という意味である。

ディスカーの革新性をどう説明すれば良いのか？ もしディスカーが慣習的な手法を踏襲していたら、メンバーのほとんどは演劇ワークショップに参加できていなかっただろう。なぜなら、彼らには言葉を話すことができなかったからだ。「適切な時機をみて、もし可能なら、参加者に話すという機能を練習させてみよう」と、普通の人なら考えるだろう。

それはディスカーの考えではなかった。参加者を、ありのまま受け入れたのだ。参加者は話すことができなくても、他の参加者とともに演じ、言葉以外のジェスチャーで彼ら自身を表現することができる。ディスカーの手法を一言でいうと、「あるものを活かす。あるものを活かして、音楽や演劇、あらゆるアートを創り出す」。この手法で、ディスカーは「コミュニケーション」の壁を打ち砕くことができた。その成果はめざましかった。発足後たった2年のうちにアートセンターが立ち上がり、多くの俳優が活動に加わり、障害を超えて個々が持つ可能性を活かすという考え方は、みんなに受け入れられるようになった。

ディスカーは、障害者を研究や治療、教育の対象として見ていない。互いに影響し合い、遊び

や音楽、時には楽器さえも創り出す人間となっている。活動を通じて、周囲の障害者に対する見方だけでなく、当事者自身の認識さえも変えていく。人間は進歩し、ディスカーの目的は治療ではなくインクルージョンにあるので、メンバーがある障害を克服しても、それは副次的な成果に過ぎない。何よりも参加することである。



ゴールは何か？

「障害のある人たちが他の市民と同じように生活を楽しみ、サービスを利用し、社会の一員として参画できるようにしたい」とヴィクトリアは話す。「私たちが提供する活動は、彼らの生活のいくつかの面でポジティブなものであるので、家族や医者に言われて義務としてワークショップに来るのではありません」。

走りながらプロフェッショナルになる

ディスカーの活動は、研究された理論から生まれたものではない。ヴィクトリアは、仕事での

インクルージョンの考えで事業を始めた経緯を振り返る。参加者の何人かが、女優として何度か雑誌に出ていた彼女のことを知っていることに、彼女は気づいた。参加者は芸術のワークショップに来る以外に、まるで自分自身の生活がなく、他人の生活をただ観察しているかのように、テレビを見たり娯楽雑誌を読んだりして過ごすしかない、という結論に彼女は直ぐに達した。彼らはなにもやっていなかった。働いた経験もなかった。彼女は、彼らが仕事に就けるようにしようと決意した。雇用支援プログラム（ECA）は、単にほとんど前提なく生まれたキャンペーンのための専門的支援制度である。今日ECAは、雇用形態のアセスメント、企業へのトレーニング、家族への働きかけ、専門家のトレーニング、体系化されたフォローアップ、会議でのプレゼンテーション、ウェブでの質問対応を通して仕事に就くために必要となる事柄を準備している。

仕事に行くということは、ある程度独立して、ひとつの場所からもうひとつの場所へと移動することも含まれる。だが、ワークショップ参加者の多くは、どうやって移動するのか知らなかった。その他のニーズが明らかになった。それは、成人としての生活への移行を目的としたワークショップである。その一部は、社会的、そして文化的イベントや博物館見学を中心に企画されていた。しかし実際の利点は、絵画や彫刻ではなく、何人かの学生がなにか新しい発見をするのにワクワクしている時に見えてきた。彼らは生まれて初めて、自分でバスの切符を買ったのだ！その何気ない行動によって、初めて自分の障害を乗り越え、彼らは社会参画への一歩を踏み出した。

自分たちのキャンペーンに対し専門的なアドバイスと協力を得ることによって、やがて自分たちのアプローチを改善していく必要があると、ヴィクトリアや彼女の同僚たちは気がついた。このことは前に向かって走りながら、さらに活動の幅を広げていくという彼らの決意を物語っている。

今日、ディスカーは企業に対し、企業が足を踏み込みにくい世界へ扉を開く手伝いをしている。少ない資源と多くの想像力によって、大きな成果が得られることを企業経営者は知った。ディスカーの活動に参加する企業の職員は、どんどん増えている。若者向けトレーニングを手伝う人もいれば、ディスカーの経験を広く伝えるために国際会議の参加に尽力する人もいる。過去12年間で、参加者のうち実に80%以上が今も雇用を継続している。彼らの人生に、大きな、そして長期的な変革を起こしたといえるだろう。

プログラムの対象は、複数の都市で15以上の機関に及んでいる。ディスカーの専門家は、人々へのトレーニングのため、そして国内外でその経験を共有するために、積極的に外に出向いている。

すばらしい成果

現在では、ディスカーの知的障害者を職場に参画させたいと申し出てくる企業がある。かつては辛抱強く説得を続け、どんなに丁寧に説明しても分かってもらえないこともしばしばあった。企業の雇用方針において、障害者が他の職員と同等の責任をもって生産することが理解され

なかったからだ。今では、アルゼンチンの会社はそうできることが分かっている。

変化

発足当初、ディスカーはブエノス・アイレス市の資金補助を受けて活動する小さなプロジェクトだった。その補助が打ち切られた時、その時点で活動が終了しても不思議ではなかった。しかし困難に直面した際に、新しいアイデアが閃めいた。ヴィクトリアは、関心がある俳優たちから支援を募り、3年連続で「スターとのサッカー」を彼らとともに企画した。この企画には、ディエゴ・マラドーナを含む有名なサッカー選手やアルゼンチン大統領のカルロス・メネムまでもが加わった。このようにして次の5年間の活動を維持し、かつ本部の事務所を購入するための財源を確保することができた。その後、社会的な活動をビジネスにつなげるアショカの奨学金とE2Eプログラム（訳注：Entrepreneur to Entrepreneur Program：ビジネスリーダーとアショカ・フェローをつなぐプログラム）を手にしたので、もっと多くの学生がワークショップに出席するだろう。

間違いを正す

初めは「非営利」と「慈善事業・無報酬」とを混同していたので、当初、ワークショップは無料で提供していたとヴィクトリアは認めた。このままでは継続できないと気づいて授業料を導入し、同時にディスカーのスタッフは、必要な人に奨学金を出してくれるドナー探しを始めた。今では、ディスカーにその時々ニーズに柔軟に対応させ、インクルージョンの活動を強化させる年間事業計画と評価システムがある。ディスカーはまた、ワークショップの記録者として各新聞社の実習生を招聘し、書くことでクラスを強化している。でも核となる目的は変わらない。もっとも優先されるのは、ワークショップを通じて生徒やその家族、同僚、ひいては職場や社会全般に対するよい影響を与える仕事でのインクルージョンである。その効果は多数の施設にも認められ、メディアの力で活動はアルゼンチン全国に知れ渡るようになった。

それでもなお重要な課題は残されている、とヴィクトリアは感じている。いかにより多くの人を持続的に社会参画させられるか。それを叶えるためには、より多くのマンパワーと広い事務所、フルタイムで動ける職員の力が必要になる。継続的な団体運営には、安定的な財源が不可欠だ。それは決して容易なことではない。

社会変革で成功するためには

結果を求めるには、まず人のニーズに基づいていると確信し、自分が創造もしくは変革したいことに自信をもち、それが人の役に立つ革新的なアイデアだと感じなければならない、とヴィクトリアは主張する。しかしそれは十分ではない。「そんなやり方は通用しない」と否定的な考えが変革を阻もうとする時に、前進し続ける強さを持たなければならない。ノーという人たちがあらゆる転換期に現れても勇気を失ってはいけない。そしてたった一人で社会変革ができると信じてはいけない。「私はそれを決して信じない」とヴィクトリアは言う。「彼らがやりたいことを理解し、ともに実現したいと思ってくれる仲間を自分の周りに集めること。彼らにアイデアを伝えて、それを実現してくれる人たちを信頼したいと思っています。私はいつも言

うの、活動を始めたとき、私はクレイジーだった。でも今はみんながクレイジーよって」。それはまるで、それが社会を変えようとする人たちを呼ぶ方法のように語った。彼女の同僚たちはこれを「ディスカー魂」と呼ぶ。しかしそれは、成功に導くための普遍的な方針以外のなものでもない。ヴィクトリアが17年前に活動を始めた時にもそうであったように。

予期しない始まり

もともと、ヴィクトリアは障害の分野に関心があったわけではなく、自分がなにかを立ち上げるとは思ってもみなかった。きっかけは、ビーチ・バケーションの時に、他の子と話すことができず、ぽつんと佇んでいる一人の子どもに気がついたことだった。何かが起こった、言葉の代わりにある音楽、つまりリズムを聴いた時、その子が反応を示した。「3歳になる息子とバケツで音をたてて遊び始めた時、その子が寄って来てリズムを真似したの。この子は遊びたくなかったわけじゃないんだ、たださっきは、我々は互いを理解していなかったんだと気がついた。でもそれから、通じ合えるようになった」。男の子には知的障害があり、それで友だちができなかった。音楽のリズムはとっさに彼を引き込んだ。その時、さらになにかやりたいという思いが生まれた。しばらくは舞台や映画、テレビの仕事が忙しく、新しいことを始める時間がつくれなかった。そして突然活動が一段落し、仕事の予定がなくなった。それで彼女は新しい事業に挑戦することを決意し、その活動は今も続いている。



活動の協力者

人生で他の事を辞める以上に、ヴィクトリアは自分の時間から大きな利益を得たように見える。実際、一瞬一瞬を仕事に専念することを心から楽しんでいる。

仕事を持つようにとか、収入を得るようにとか、そんなことを家族は彼女に頼まなかったのだから、彼女は、一番の協力者は家族だと感じている。そのため無償で働き、ディスカーの活動に100%集中できている。「何かうまくいかないことがあって、家に帰って泣いても、家族はそこにいてくれる」。

ディスクァーで頼りにしているのは、ディレクターのマルタ・メンディアとワークショップ・クラスのコーディネーター、ジョージ・ピロルド、そして最大限の貢献をしてくれる専門家スタッフである。

「ヴィクトリアは15年前、まだ私たちの事業が地域に根付いていない頃に、私を訪ねてきました。そしてエネルギーでリーダーシップのある彼女は、私たちに大きな機会を与えてくれました。多くの方は、これら子どもたちの支援を私に感謝してくれますが、実際は、彼らが私たちを助けているのです。私が彼女をアショカに推薦した理由は、ヴィクトリアのねばり強さと熱意によって、このプロジェクトを持続的なものにしたからです」。

マクドナルド南米地域代表ウッド・スタトン氏

ヴィクトリア・ショクロン

51歳、既婚者、息子が1人。

女優、ダンサー、歌手であり、社会起業家でもある。

映画、テレビ、演劇界で11年活躍した後、1991年にディスクァーを設立。

1994年よりアショカ・フェロー。

ディスクァーの活動により、国連最優秀事例[United Nations for Best Practice]、芸能・ジャーナリスト協会、ブエノス・アイレス市、スペシャル・アート等より、数々の受賞、栄誉とノミネートを受ける。ビジョナリーの決勝出場者、マクドナルドの国際女性デーでも功績が認められた

。

Fundacion DISCAR

Mail: Santiago del Estero 866 (1075), Buenos Aires, Argentina

Phone/ Fax: +54 4305 9191

E-mail: fundaciondiscar@fibertel.com.ar

Web: www.fundaciondiscar.org.ar

シュダーソン・スベディ

ネパール障害者人権センター（DHRC）／ネパール

2005年よりアショカ・フェロー

ネパール障害者運動 不撓不屈のリーダー
プラナブ・マン・シン著

2003年、シュダーソン・スベディは、ネパール政府が法律上保障している障害者の無償教育政策を実施するよう、ネパールで最も権威の高い裁判所、最高裁に訴えを起こした。この訴訟はシュダーソンが自分の団体、ネパール障害者人権センター（DHRC-Nepal；以下、DHRC）を通して起こした。そしてネパールの障害者権利闘争において歴史的な第一歩となった。それまで、ほとんどの障害者は自分たちの権利について知らなかった。政府職員も障害者に与えられた条項を知らないか、それらを実施することに興味を持たなかった。何よりも重要なことは、ネパールの障害者が一致団結し、平等な市民として権利のために闘った最初の出来事になったことだ。最高裁の判決は障害者に好意的で、障害者の権利を認め、ネパールの障害者の地位をエンパワメントさせる歴史的な優位性を確保した。



シュダーソンは最高裁の判決を報償だと捉えている。彼は、正義に対するこの勝利に大きな希望と夢を感じた。1歳と6ヶ月でポリオを患ってからずっと、彼の人生は、自らを平等な社会の一員であることを証明するため過酷に闘わねばならなかった。幸いなことに、シュダーソンには強い正義感と起業家として才覚のある父親がいるという利点があった。彼は、西ネパールのバルディヤ村に初のコミュニティー・スクールを立ち上げる際に、父親がどのようなイニシアティブをとったのか思い出した。「父は施しを信じていなかった。私は森に行って、彼が市場で売る野菜を採ってきたことを覚えている。そうやって彼は学校のお金を貯めたのだ」とシュダーソンは説明した。シュダーソンの父は村の裁判官でもあった。「正義という概念は、父に正義を求めてやってくる村人たちを見るまで僕には分からなかった」とシュダーソンは話す。このように社会性や道徳観に晒されてきたことが、彼の権利闘争を形成するのに重要な役割を担った。「社会のなかで馬鹿にされる、ということが怖くて以前は縮み上がっていた」と彼は言う。しかし家族の支えと、自分が不当な扱いに隷属させられているという自覚が大きく

なり、彼は少しずつ殻を破って行った。

歴史的に、ネパールの為政者は医療、基礎衛生、もしくは教育などへ一度も大きな投資をしてこなかった。このようなインフラストラクチャーやサービスの欠如は、医療ケアやサービスへのアクセスができない障害者にとって深刻な問題となっていた。WHO（世界保健機関）の推計によれば、ネパール国民2900万人のうち5～10%が障害を持っている。しかし2001年の国勢人口統計では、ネパールの障害者人口はわずか0.45%とされ、また一方で国家計画委員会は同じ年に1.63%としている。WHOとネパールの2つの政府機関との間で生じた数値の違いは、障害者人口を正確に計ることへの完全なる怠慢を表している、とシュダーソンは信じている。シュダーソンは、障害を恥と捉える家族らによって正確に障害者の数を計ることが難しくなっていると説明する。シュダーソンの独自調査から、彼はネパールの障害者人口は300万人以上いると推測している。そのうちわずか5%の人しか雇用されていないと、シュダーソンは憤る。彼はこの現状こそが、障害者が依存して生きていると社会から言われ具体化されている証拠だと考えている。

ネパール社会では、障害は運命という視点で捉えられている。それはカルマ（輪廻）の結果として考えられている。障害は、人が良いカルマを積むための手段という捉え方はまだ良い方で、大抵の場合、障害者は社会に対する重荷のようなものとして扱われる。また障害は前世の罪とも考えられていることから、障害は個人の問題とされ、障害者とその家族が対処すべき問題であり、国が責任をもったり対応したりするものではないと考えられている。障害者を単純に罪もしくは重荷と捉えるような環境で育てられると、ネパールの大半の障害者が自尊心に欠け、自分自身の能力を信じないことは驚くに値しない。

1990年代を通して、シュダーソンは、彼らに幻滅するためだけに、人権や障害者支援に取り組む様々な団体で働いた。ほとんどの人権団体は障害者の人権を重要と考慮せず、またネパールの障害者団体は障害の特定の事例を扱うことだけに特化していた。彼は旅をしながら障害者に会ううちに、ネパールの多くの場所で彼らが非常に不利な立場に置かれていることに直ぐに気がついた。障害者は、ネパール社会の態度と障害者の権利を保証するはずの貧弱な行政組織の両方から差別に苦しんでいた。たとえもし障害者が自分たちのために立ち上がる勇気と度胸があっても、障害者を無益な存在と考えている多くの人たちから絶え間ない差別に直面するだけだろう。シュダーソンは、この不正義に対し根本的に衝撃を受けた。

シュダーソンは、障害者も社会の平等なメンバーとして自らの権利のために立ち上がるべきだと考えていた。障害者が自分自身のために立ち上がったときだけ、社会の障害者に対する態度を変えることができると彼は強く信じていた。障害者は、「サービスに依存する受け手」から、「権利と恩恵を得るに値する自立した存在である」へ、まず自分たち自身の物の見方を変える必要があった。彼は同時に、国の制度も障害者の基本的権利を保障しなくてはならないと認識していた。国で障害者の権利が認められれば、ネパール各地で障害者が啓発やロビー活動、権利の要求を行う際に、その権利が障害者の希望の灯火となることをシュダーソンは予見していた。この本質を見抜く力が、シュダーソンを真の先見者になっている。



彼のビジョンを叶えるため、2000年3月にシュダーソンはDHRCを設立した。アドボカシー、メディアへの広報、法制度などを活用して障害者の人権と法的権利を訴えるネパールで初めての団体だった。シュダーソンはこの組織を障害者の権利を政府にロビー活動したり、他の団体や機関、企業に対して障害者問題に敏感になるよう働きかけたりする手段と考えていた。そして何よりも、自分たちの権利を掴み、人生をコントロールするために、障害者をエンパワメントする方法だった。

団体を設立して最初の5年間、DHRCは少ない予算で活動し、最初の収入創出の試みである「障害者の声(Disability Voice)」という雑誌で何とかやりくりしていた。2003年5月の創刊以来、「障害者の声」は障害者問題、権利、政策に関する情報を広めてきた。情報コミュニケーション省やネパール新聞協議会などからの確かな情報源として認知されるようになり、この雑誌は直ぐに全国的な雑誌として認識されるようになった。現在約3000部が刊行されており、全国で読まれている。そして、直接または間接的に障害の分野で活動する75の様々な団体が購読している。シュダーソンは、障害者は希望や励みを必要としていること、また雑誌では多くの人たちに届けることができないということに気がついた。そのため2002年4月に、DHRCは雑誌「障害

者の声」にちなんで同名の一般ラジオ放送を開始した。当初はラジオ・ネパールを通じて配信され、ネパール全土をカバーしていた。そしてDHRCがこれまで雑誌を通して届けることができなかった人たちに、情報を届けられるようになった。放送開始以来、DHRCはネパール全体で5000人以上のメンバーを有する245以上のラジオ・リスナーズクラブの設立に成功した。「障害者の声」の各ラジオ・プログラムのリスナー数は200～300万人と推測されている。

「障害者の声」は、雑誌としてもラジオ番組としても、ネパールで初めてのものだった。両方も障害者問題に特化しており、またより重要なことは、障害者によって完全に所有され、運営されている初めての報道機関ということだった。障害者が報道機関を運営し経営しているという事実は、障害者コミュニティの人たちにとって計り知れない刺激の源となり、「自分たちも何かできるかもしれない」と彼らを信じさせるものだった。このプログラムとその対象範囲を広げる目的で、DHRCは連続してジャーナリズムの研修ワークショップをネパール各地で開催した。結果として、「障害者の声」は彼らのために働くよく訓練されたジャーナリストのグループを持つことになった。雑誌「障害者の声」が開始されてから、障害者問題にフォーカスした新たな雑誌が3つ創刊された。障害を持つジャーナリストが10人存在し、ネパール全土の10ヶ所の地方ラジオ番組を運営しており、また別の20人は一般の報道機関で働いている。

2001年、DHRCで働きながら、シュダーソンはネパール法科大学の学士課程に入学した。卒業論文の研究中に、すべての障害者の無償教育に対する権利を保障している障害者福祉保護法（1982年）を偶然発見した。「本来無料とされていた授業料を払っていたことは全く知らなかった。どんなに驚いたか想像できるでしょう？」とシュダーソンは説明した。彼は続けて「まず大学の事務局に行ってその規定について説明した。でも職員はその様な規定など知る由もなく、その実施も嫌がっていた」。シュダーソンは次に教育省に出向き、すべての障害者は無料で教育を受けられるとする条項の即時実施を求めた。教育省はシュダーソンの訴えを記録はしたものの、何もしなかった。

2003年に、シュダーソンはDHRCを代表し、大学、教育省、そしてネパール政府に対し、裁判所に正式に提訴した。訴えは公益訴訟として最高裁の審議とされ、障害者の権利を主張する訴訟として、ネパール史上最初で最大の注目を浴びた。最高裁は、シュダーソンとDHRC、障害者の権利に好意的な判決を下した。それは障害者の人権を訴える活動家たちにとって歴史的な勝利であり、障害者の問題を国民全体に強烈に印象づけた。シュダーソンは、この勝利を主要な報道機関とともに「障害者の声」のラジオ・プログラムと雑誌で効果的に公表した。

これ以降、3,000人以上の障害者が政府によって保障されている無償教育を受けることができた。最高裁の判決は政府を突き動かすことになり、教育法の改正につながった。法律は、現在、障害者に対しより良い教育基準を保障しており、特定の障害の場合、試験時間が通常より1時間延長されるなどの特例措置も認められている。

2005年に、シュダーソンは有望な社会起業家としてアショカに推薦された。最初にアショカから連絡を受けた時、彼はアショカについて、また社会起業家についてもまったく聞いたことがなかった。厳しい審査過程を得て、彼は同年アショカ・フェローに選定された。これによりシ

シュダーソンにいくつかの新しい扉が開き、彼は障害者の権利に関するあらゆる面で、突然自分が注目の的となっていることに気がついた。「僕の長年の夢は、いつも障害者問題のリソースセンターを作ることだった」とシュダーソンは語る。その意志を胸に、DHRCは世界中から300冊以上の障害に関する法律や立法の書籍を集め、障害者の問題と権利に関するリソースセンターを立ち上げた。そしてDHRCとリソースセンターを通して、シュダーソンは障害者の能力開発研修を実施した。研修によって、彼らも自分を成長させ表現する機会をつかむことができる。密度の濃い研修プログラムとワークショップを通して、DHRCは30人以上の障害を持つジャーナリスト、200人以上の障害当事者団体のリーダー、そして100人以上の障害と人権擁護者を輩出することができた。

「きちんとした技術や研修がそろっていても、アクセシビリティや移動の問題から、多くの場合、障害者は職を得ることが難しい」とシュダーソンは嘆く。障害者に使いやすいように建物を建てることを保証するのは政府の責任だと彼は信じている。シュダーソンは国家障害者サービス調整委員会の一員として、政府の障害関連政策のアドバイザーという重要な役割を担っている。この委員会を通し、彼は政府高官と密接に働きながらネパールの障害者5ヶ年計画の草案に携わっており、またネパール初となる障害者に配慮した建築規則の草案にもすでに貢献している。規則の制定以降初めて計画された女性・児童・社会福祉省の建物は、完全にアクセシブルなコンセプトで設計されている。民間セクターの意識を喚起するために、シュダーソンはマチャプチャ銀行に口座をもつすべての障害者から支援を得た。「障害者にも使いやすい銀行にならなければ、我々の預金をすべて引き出して他の場所に預けるぞ、と我々は銀行に話した」とシュダーソンは言う。それに対して銀行経営者は、すべてのATMを障害者に使いやすくした。この銀行に対する挑戦は多くの注目を集め、一般の人々が障害者問題へ関心を高めることをさらに促した。団結することの力をシュダーソンは無駄にすることはなかった。それとは対照的に、彼は障害を持つ人々の権利を啓発するための共同戦線となる60以上の障害者団体のネットワーク、障害者権利フォーラム（Forum for Rights of People with Disability: FRPD）を設立した。

「まだまだやるべきことはたくさんある」とシュダーソンは言う。彼は、2005年に在外ネパール人協会とネパール商工業会議所連盟による「変革のチャンピオン」賞を受賞した。「受賞は、この問題への関心を高めるための有効な手段です。でも私たちは、まだなんとか表面に触れただけに過ぎない。本当に差別に苦しんでいる人々にはまだ届いていない」とシュダーソンは謙遜しながら続けた。彼はいま、HIV/エイズのように障害の中でもこれまで見落とされてきた分野に焦点を当て、彼らの人権も擁護される手段を探っている。2008年3月、DHRCはネパールの主要な障害者団体をすべて集め、障害者の全国大会を実施した。この大会で、憲法制定会議による新しい憲法で国連障害者の権利条約の早急な批准と実施を求める「カトマンズ宣言2008」が作成された。この宣言はまた、助成財団や国際NGOそして国内NGOによって実施される主流な開発事業に、障害問題を統合することも訴えている。

シュダーソンが幸せを感じる理由がある。たとえば、自分の仕事にますます社会的な関心と支

援が集まること、新たに発見した自信を持った障害者がどんどん社会に進出していくこと、そして政府の政策決定レベルを含む、社会のあらゆるレベルで障害者の社会参画が進んでいること、などである。彼の仕事は、ネパールの障害者にとって希望の光となるだけでなく、国際的にも彼らを刺激している。「障害と開発パートナー(DPP)」というイギリスのNGOは、DHRCの事業をイギリスでも再現できるように事業協定を結んだ。いまでは10年以上障害者の権利擁護のために活動してきた経験から、シュダーソンは、障害者の権利は社会構造そのものの一部であり、よりインクルーシブで公正な社会を保証するための手段と考えている。



「シュダーソン・スベディと彼の団体であるDHRCは、権利ベース・アプローチで障害者問題に取り組んだ始めての人たちだ。2003年の歴史的な最高裁の判決は、彼の評価をより強固なものとし、障害者の権利を守るための重要な一歩となった。シュダーソン自身は間違いなくリーダーである。彼のリーダーシップと信念、献身的な努力がなければ、最高裁の勝利はずっと起こりえなかったかもしれない。しかし、その後の彼の業績の方がより感動的である。それまでの障害者団体間の派閥主義や政治的な争いにも関わらず、彼はすべての障害者団体をひとつにまとめ上げることに成功した。そして、新しい憲法下で国連障害者の権利条約の即時批准と実施を求めた『カトマンズ宣言2008』に署名するように説得した。シュダーソンがいなければ、このような出来事が、今もそして近い未来でも起こったかどうか、想像することも難しい」

ニラ・ワディ、
国際連合人権高等弁務官事務所、人権オフィサー

シュダーソン・スベディ、37歳、既婚、娘と息子がいる。ネパール障害者人権センター（DHRC）の設立者および代表者。障害と人権運動を動員し、ネパールの障害者を代表して公益訴訟を起こした。障害者の権利を啓発するため、1000人以上の活動家を育て、250以上のローカルラジオ・リスナーズ・クラブを設立した。また国内と国際的な人権ネットワークを活用し、障害者の権利運動をエンパワメントするために働いた。国家障害者サービス調整委員会のメンバー。ネパール障害者の法的状況に関する書籍を出版し、国内外のメディアを通し100以上の記事を発表している。2005年からアショカ・フェロー、2007年にアジア・ソサイエティのフェローに選ばれた。ネパール政府、在外ネパール人協会、ネパール商工業会議所連盟から「変革のチャンピオン」賞を受賞した。

DHRC - Nepal Disabled Human Rights Center (DHRC - Nepal)

Mail: Post Box No 19408, Kathmandu, Nepal

Phone: +977 1 4493211

Fax: +977 1 4461364

Mobile: +977 98510 59360

E-mail: dhrc@wlink.com.np, shudarsons@gmail.com,
subedi_ashokafellow@yahoo.com, ssubedi@dhrcnepal.org.hp

Web: <http://www.dhrcnepal.org.np/>

アメ・ティアム

ゼネガル・ハンディキャップ協会／セネガル
2008年よりアショカ・フェロー

The Handicap.sn ポータルサイト：障害者のためのアクセシブルなITサービス
ウィルマ J.E. ランドル著

とある都会の混み合ったコミュニティ・センターの一室で、全員の目がアメ・ティアムに向いている。彼は床の中央に立ち、コンピューター・トレーニング・ワークショップを行い、強いインパクトのあるコミュニケーション・メディアを創るために、コンピューター・グラフィックスをどうやって使うか熱心に語った。

一見すると、これは均一的な仲間の集まりだった。参加者は全員黒人で大体10代～20代前半の若者であった。男女数もほぼ半々である。しかし部屋をよく見渡してみると、少し目立っているものがある。皆に行き渡るコンピューターの数が足りず、1台を2～3人で共有している。そして何台かの機械の台には、松葉杖が立てかけられている。

アメ・ティアムが部屋を見回すと、目に入るのは可能性である。ここに集まった若者の能力とコンピューター技能の可能性であり、自分たちの生活を向上させ、エンパワーする情報へのアクセスの可能性である。特に障害者にとって。

ティアムはコンピューターと情報技術に情熱を注いでいる。彼は勉強だけでなく、周囲、特に自分と同じ肢体障害を持った人に、自分の得た知識を教えることに熱心である。30歳のティアムは、3歳のときにポリオに罹り障害者となった。ただ時も経ち、手術を何回か受けて、歩行の時たまに杖を使うことはあっても、今は不自由なく動くことができる。

2007年に、ティアムはハンディキャップ・セネガルの創設に情熱を注いだ。ハンディキャップ・セネガルは、彼の国セネガルで初めて障害者に情報通信技術（ICT）の提供と研修を行う協会である。ハンディキャップ・セネガルは、社会に変革を起こすためにコンピューター技術を利用した革新的な事業に取り組んでいる。

2008年、ティアムは、この革新的な試みによってアショカ・フェローに選ばれた。セネガルで初めて、恐らくアフリカでも初めてとなる障害者を対象としたポータルサイト(www.handicap.sn)を開設したからである。このポータルサイトは、セネガルの障害者を情報スーパー・ハイウェイに繋げ、セネガルだけでなく、アフリカや世界中の障害者にとって、接続ポイントとして、また手軽な情報源として利用できるように設計されている。

「長い間、セネガルの障害者は社会から差別されてきました」とティアムは言う。「物理的にインフラを利用できず、保健や雇用、教育といった基本的な社会サービスも受けることができませんでした。政治的に、障害者は通常すべての分野で無視され続けてきました」。

ティアムは、モロッコ人を母に、セネガル人を父に、男3人、女1人の4人兄弟の長男として、1978年にモロッコで生まれた。ティアムは幼少期の大部分を海外で過ごした。それは、父親がセネガルの外交官だったというだけでなく、個人的な医療に関する理由があった。

ティアムは、コンピューターが高価なおもちゃとして、また勉強道具として考えられていた世代に育った。「同い年の他の男の子は、外で鬼ごっこや駆けっこ、サッカーなどで競っていたけれど、僕はできなかったし・・・」と彼は昔を思い出した。

「とても早い時期にコンピューターを手に入れました」と彼は続けた。「父が僕の10歳の誕生日にくれま



した。父がくれた中で最高の贈り物でした。僕は以前、ただプログラミングのマジックを見るために、作曲したり、絵を描いたり、プログラムを書き換えたりして、基本プログラム言語を使って遊んでいました」。

14歳の時、ティアムの家族がセネガルで生活していた時、フランスに住んでいた叔父の友人が休暇でセネガルに来て、彼の家族を訪問した。彼女の滞在中、話がティアムの健康とポリオの治療に及んだ。「当時フランスでは、ポリオ患者が筋肉を使えるようになる、と言われている新しい手術技法が試されていました」とティアムは説明した。大人たちは話し合いを重ね、フランスへの帰国日が近付くと、この女性、ジョシアンヌ・サッターは、ティアムも連れて帰ることを提案した。

ティアムは1年間生活を共にしたジョシアンヌのことを、とても優しく人間味あふれた人だと語った。そして診断と手術を待っている間、彼はその小さな町で高校にも通った。

彼のフランスでの保護者は、ティアムに、大きくなったら人生で何かよいことをするだけでなく、「自分が授かった恩恵を、周りに分け与えること」を約束させた、と彼は思い出し、「僕は必ず実行すると誓った。だからこれは彼女への恩返しなのです」と付け加えた。

異なる文化で生活してきて、ティアムは世界に存在する経済的・社会的格差に、幼いときから気づいており敏感だったと語った。そして、ビジネスとコンピューターに興味を持っていたけれど、この分野の人と人をつなげる部分にいつも魅了されていたのです、と彼は説明する。「私はいつも人と一緒に働くことに、そして人助けができる仕事に興味があるのです」。

セネガルの家に戻って、ティアムは少なからずカルチャーショックを経験した。交通機関や社会サービス、経済的支援などに対し、平等なアクセスを用意するという点に関し、障害を持つ市民のニーズと権利に対応しているドイツのような国に住むことは、どの程度当たり前のことなのか、と意識し始めた。



セネガルはアフリカ大陸の西に位置し、大西洋に面した比較的小さな国だ。開発統計的にみると、貧困が蔓延し、国民の大多数が一日二ドル以下で生活をしている。教育や識字率、基礎保健としてのケアやサービスなど、いわゆる典型的に途上国の問題が山積している。それに加え、政府による社会保障などは基本的に存在しない。このような環境で、いつも苦しい状況に置かれるのは女性と子どもであり、そこでは障害者は社会的弱者の中でもっとも差別を受けている人たちである。アフリカ社会の多くで見られるように、障害者、特に生れながらに障害をもつ人に対する伝統的な迷信や恐怖が広まり、古い偏見とスティグマが生きている国である。

セネガルの推定人口約1100万人に対し、障害者の正確な数は把握されていない。憶測しかできないが、活気ある人口密度の高い首都ダカールを一度歩いてみると、障害者の数は非常に「多い」と思われる。

物乞いに送り出される大半は男児であり、若者や子どもたちが日に日に増しているようだ。また、多くが車椅子に乗った若い女性、時には盲人の女性で、往々にして赤ん坊や子どもを連れている人々も目につき、人数も増えている。彼女たちは、明らかな身体的な弱さを除けば、健康そうに見える。しかし身体に障害のない者の働き口がほとんどない社会で、彼らが生き抜くためには、物乞いをするしかない。

障害を持つが、経済的に困窮していないその他の障害者にとって、アフリカや他の途上国の多くと同様に、セ

ネガルは、公共交通機関や公共施設、社会サービスへのアクセスに関し、基本的にアクセシブルではない環境である。教育は義務であり公教育は無料だが、学校は障害者が利用しにくく、それを改善するための法律もない。

経済状況とは裏腹に、皮肉にもセネガルはアフリカで最先端の情報通信インフラを持つ国のひとつである。携帯電話は広く普及し、このわずか10年で、1時間1ドル以下のサイバーカフェも着実に増えている。

2005年、自国の現状をもっと理解し、社会改革に向けて自分に何ができるのか探るため、ティアムは国内の障害者支援団体のひとつ、SOSハンディキャップに入会した。ティアムは団体初のホームページを開設し、ディスアビリティ・スケッチという障害をテーマとした、国で最初の機関誌の作成にも関わった。

ティアムの活動に刺激され、文化省の職員だった団体の会員がセネガル初の障害をテーマとした情報と芸術の文化祭典「ハンディ・フェスティバル」を開始した。このフェスティバルは恒例行事となり、毎年12月の国連国際障害者デーに合わせて行われている。ティアムは、プログラムのマーケティングの観点で支援しながら、プロジェクトへの協力を続けている。特に、イベントをもっと広く周知するために、イベントのウェブサイトを開発し、更新している。(www.handifestival.com)

ティアムは、ハンディキャップ・セネガルはウェブ・ポータルサイトwww.handicap.snを通して、セネガルのすべての障害団体や関連団体を地域、大陸、そして世界と連携させるインターネット情報センターとして役立つことを意図している、と説明する。この事業で、ティアムはさまざまな団体を交流させ、様々なグループと分野を超えて働いてきた。

「実際、インターネットで手に入るセネガル独自の情報が不足すれば、多くの障害者は連携が取れず、互いに孤立してしまう」とティアムは嘆く。

「コンピューターとインターネットはとても民主的で開放的だ」と彼はいう。「インターネットによって、コミュニティの結束を高めることができる。しかし今は、」と彼は続けて「セネガルには障害を扱うウェブサイトが5つもない。それらはほとんど国際NGOや他の国際団体のウェブサイトだ」。対照的に、「95%以上のセネガルの障害者のための団体は、インターネットに出ていないし、ウェブサイトもブログもEメールも持っていない」。

しかしポータルサイト (www.handicap.sn) は、有益なウェブサイトとのリンクを含む、広範で様々な障害関連の情報を単に提供するだけではない。近々、雇用情報や障害当事者団体が製造した製品を販売するオンラインショップによって、障害者の収入創出を特集していく。

技術革新という観点でも、ティアムのウェブ・プロジェクトは、障害者にアクセスを提供するため、また障害問題関連情報のためにモデルとなることを望んでいる。このウェブサイトは視覚障害者や肢体障害者も閲覧しやすいように、アクセシビリティの国際標準を満たしている。視覚障害者がウェブサイトを訪れても情報が入手できるように、音声読み上げソフトや点字スクリーン、拡大鏡、音声認識ソフトなどにも対応している。

ティアムのプロジェクトや事業に対する評価は非常に高い。ポータル案の支援者であるセネガル障害者団体連盟 (FSAPH) のラバ・シセ・ディオップ会長は、「このウェブポータルは、人々に様々な団体を紹介している。そして、これまで団体に関わりがなかった人にも、彼らに関する情報を提供している。すばらしい取り組みだ」と評価している。

ディオップは、2000年に設置された、アブドゥラヤ・ワデ大統領・障害問題特別アドバイザーでもある。連盟は1997年に設立され、現在は26の全国障害団体で構成されている。「このウェブサイトによって、政府の指導者に対しても、障害問題や関連問題について関心を向けさせる手助けとなった」とディオップは付け加えた。

ティアムによると、彼の団体が成功した秘訣は、あらゆる分野の人たちと協力したことである。「たとえば、私がCRE (近隣の青年にコンピューター技術訓練を行う政府が支援するコミュニティ・センター) を利用しなかった時、使用料を払わなくてはなりませんでした」とティアムは言う。「しかし、僕には払うお金がなかったのでセンターと交渉して、僕がコンピューターを教える代わりにセンターを無料で使えるようにしてもらいました。もちろん、あらゆる研修には、障害者の参加を許可するようにも要求しました」。

ティアムは、インターネットを活用してアフリカの開発を促進している団体、デジタル・ソリダリティー・クラブ (CSN) にも入会した。ティアムが加入したことによって、CSNは2008年のテーマを「障害者のための情報技術へのアクセス」とし、ウェブサイトでのこのメッセージを発信した。

ティアムに出会う多くの人々は、プロジェクトとその背景にある彼の人柄に感心する。「僕がティアムと知り合ったのは、彼がアショカ・フェロープログラムに関係してからです」と2001年にアショカ・フェローに選ばれた、CRE(テストボード・リサーチセンター)マネージャー、アブデュラマネ・エムベンゲは当時を懐かしむ。「彼はとてもまじめな青年で、セネガルとアフリカの障害者のために多くのことを変えることができる人」とエムベンゲは言う。

ティアムは、全国運動障害者協会（ANHMS）の全メンバーの中から、7人の女性障害者をコンピューター・グラフィックの研修に招いた。「女性障害者は、より酷い差別を受けていることが多い。だからあえて招待しました」とティアムは語る。

「研修に参加し、コンピューターの知識を深めたり、コンピューター・グラフィックを使ったりして名刺やパンフレットなどを作成する機会が得られて、とても嬉しかった」と、全国身体障害者協会女性部門のセイナボウ・ティアム副事務局長は言った。

アフリカでは今、障害者のニーズに対する注目が強まっており、ティアムの障害分野での活動は時機を得ている。ただ国連が1983年～1992年を「障害者の10年」と宣言したにも関わらず、これには長い時間がかかった。アフリカでは、運動家が政府にさらなる行動を求めるロビー活動に成功したこの時期のあとには、ほとんど変化はおこらなかった。アフリカ連合は社会の意識を高めるため、またできれば障害者の問題とニーズを取り上げ、彼らの生活の質を改善する法律や政策の実現を促すために、1999年～2009年「アフリカ障害者の10年」を宣言した。

セネガルは、障害者の権利条約をまだ批准はしていないものの、いち早く賛同した国のひとつである。ハンディキャップ・セネガルのウェブサイトは、条約の批准に貢献できるとティアムは考えている。「まずそれに関する社会の認識を高めてから、みんなで結集し、批准に向けた啓発活動を行わなくてはならない。ポータルサイトは、政治家など、あらゆる人たちが出会える最適な場所です。なぜなら、必要な情報がすべてここに集まっているからです」と彼は強調した。



アメ・ティアム

2008年からセネガルのアショカ・フェロー。ハンディキャップ・セネガル協会の代表。

セネガル障害に関するポータルサイトの創設者。セネガル初の国際的な障害者のためのフェスティバルとなった「国際ハンディ・フェスティバル」の創設に関わった。彼は障害に関する団体やプロジェクトのために、ウェブサイトを作成した。障害者の情報社会への参画を促進した。ポータルサイトは、フランス外務省の支援プログラムであるADEN基金（デジタル・インクルージョン育成）からの助成を受けている。

Association Handicap.sn

Mail: 355, lot. Djily Mbaye, Yoff - Diamalaye, Dakar, Senegal

Phone: +221 33 867 92 11

Mobile: + 221 766 33 73 00

E-mail: ame@handicap.sn

Web: <http://asso.handicap.sn>

エステラ・ビラリアル・ジュンコ

ユニドス（UNIDOS）／メキシコ
2003年からアショカ・フェロー

障害者のインクルージョン達成のために社会を変える
カルロス・デヴィッド・サリナス・オラスコアガ著

エステラは、自分たちのサマーキャンプにボランティア、もしくは受益者として、800人以上の人が申し込んだと知ったとき、自分の目を信じるができなかった。たった15人の参加者と30人のボランティアがユニドスのサマーキャンプに参加した21年前の時の記憶がよみがえり、その時に自分が蒔いてきた種が、本当に驚くべき勢いで育っていることを実感した。メキシコの都市のモンレーの社会に障害を持つ自分の兄妹を参加させたい、という夢として始まった活動は、ユニドスとして知られる社会的にインクルーシブなモデルに発展し、今では10以上のメキシコの都市に存在する。テレトンメキシコ（訳注：メキシコのチャリティー・ショー）のような他団体の関心も引いた。実際に、過去数年間で数々の団体がユニドスのモデルを実践するようになっていく。



「サマーキャンプ」の考え方はシンプルだ。年に一度、エステラが率いるボランティアグループが、普段と同じ環境で障害者といくつかの楽しい活動を企画、実行する。エステラの言葉では、目的は「彼らがやったように、世界に障害者も活動を楽しめるということを見せること。我々の目標は、障害を持つ友人たちを現実の世界に連れ出して、楽しんでもらうこと。こうやって、社会の障害者に対する認識を変えたかったのです。言い換えれば、私たちは、障害者と接する時に、ほとんどの人々が感じる恐れを取り除こうとしたのです」。しかし、特に障害に関するいくつかの問題に直面している国メキシコでは、もっとも重要な問題は密告の恐れなので、これは簡単なことではなかった。

WHO（世界保健機関）によると、メキシコの人口1億2千万人の10%の人々が精神あるいは身体の障害に苦しんでいる。うち45%の障害者は手や足に制限があり、29%が全盲か影だけが認識でき、17%がろう者か補聴器を使用しており、10%がその他の障害を抱えている。この社会集団を世話している団体の多くは、精神や身体といった一つの障害、そして特定の年齢層を対象にしているが、その反面、ユニドスはサマーキャンプや他の社会的レクリエーション活動（ベスト・バディー・プログラムや遠足など）を通して、年齢を問わずあらゆる種類の障害を持つ人々を参加させている。他の団体がリハビリテーションに焦点を当てる一方で、ユニドスは社会の障害者に対する認識と態度を変えることで、障害者の社会化とインクルージョンを中心に取り組んでいる。いうなれば、ユニドスは社会のリハビリテーションを目指し、したがって他団体の活動を補い、また土台を提供するメキシコでかつて見たことのないタイプの団体をつくらうとした。

社会の障害者に対する態度を変えるために、すべてのユニドスの活動は、ボランティアと受益者の間に継続した絆が生まれるように考えられている。ユニドスの活動モデルはこの21年間で進化を続けてきたが、全国で7,183人の注目をあびた活動の核にある「優しさ」というコンセプトに対する信念は変わっていない。ユニドスの理解による「優しさ」とは、生き活きとした気持ち、感情、共感、情熱や熱意を指す。それは質の高い親しみや愛着も表し、結果的にユニドスの受益者、つまりユニドスが支援する障害者だけでなく、ボランティア自身にも明るさや活気、居心地の良さをもたらす。

したがってユニドスの活動において「優しさ」が成功した成果を生むには、慎重な事業計画が不可欠である。だから障害の種類や年代によって異なる20のグループが作られた。このグループでは、ボランティアと障害者の親密な交流が保障される。また同様に、特に活動がユニドスの1エーカーの公園の外で行われる場合、たとえば参加者全員がひとつの場所に入りきらない場合でも、彼らがすべての活動を最大限に楽しむことができるように保障もされている。各グループは、ボランティアと障害者が相互に心を通わせる方法として、通常は大声

で歌う特色のあるかけ声によってそれぞれ識別されている。

心を通わせることが、ユニドスが促進するインクルーシブ・プログラムの根源的な目的である。それは、ボランティアにとって「この社会グループに対する我々の態度を変えるために、障害者と親密に関われる機会を得ること」を意味するとエステラは言う。心を通わせることはボランティアを変える。そして今度は、彼らがユニドスの理念の大使となって、日常生活のあらゆる活動で平等を訴えることで、ボランティアが社会を変える。エステラは、サマーキャンプや旅行、映画鑑賞、夜の外出など、ユニドスが推進している活動を通じて実現したいいくつかの重要な変化を確認している、

■ボランティア人数の増加や、自信、社交性、熱意、創造性、GPP-I（ゴードン人格適性指標）に基づく本来の思想などの彼らのリーダーシップスキルの向上

■ユニドスへの参加を他の人に呼びかけるボランティアの率直さ

■ユニドス関連の活動を実施するための、あらゆるサイズのより多くの場所に対する願望

■ボランティアとの身近な交流や様々な場面で、一年中行われる多くの活動によってつくられた自尊心が前向きに高められた結果、ユニドスが世話した障害者が思い切って現実の世界に出ていく決心をした。



結果的に、心を通わせるという考えは、普遍的なものと変わらないとエステラは強く確信している。それは、世界を変えようと真剣に努力しているどんな協会や組織にもあてはまるかもしれない。実際この21年間で、障害者を見る目という意味で、エステラは社会が少しずつ変わってきていることを実感している。その証拠に、ユニドスはモンレーで始まったが、現在、そのモデルの優しさと心を通わせるという衝動が、社会的フランチャイズとして、また障害者を支援する他の組織と連携して、メキシコの10州で変化を生み出している。エステラの評価では、これがユニドスのもっとも輝かしい実績となってきた。またそれ以上に、その実績により、彼女は他の国、特にメキシコと同じような状況にあり、まだやるべきことが多く残っている国々で、このモデルを再現したり応用したりして、さらに広めて行きたいという気に強くさせられた。彼女の目標は、「何らかの障害に苦しむ人と接することへの恐怖を取り除いて、我々は夢や希望を共有していることに気づいてもらうこと。なぜなら、単純な事実として、私たちは皆同じ人間であり、同じように幸せを願い続ける存在だから」とエステラは説明する。

世界を変えようとする事業の大半がそうであるように、ユニドスはある程度の成功を収めたが、道のりは平坦なものではなかった。初期のほとんどの活動は「手作り」だったと、エステラは振り返る。ユニドスの初めの数年間、大半の活動の企画・実施・監督の責任を、彼女は一人で背負っていた。活動が広がるにつれ、障害を持つ子どもや兄弟をユニドスに連れてくる家族も増えていった。活動数や規模が増えていったが、彼女はまだまだ多くの活動計画や実施を自分で進めたいと考えていた。組織を運営していくためにはもっと人を巻き込むべきだと気づくまで、しばらく時間が掛かった。やがて彼女は、任命された理事会によって運営される組織に、ユニドスを改革するという重要な決断を下さなければならなかった。すなわち、エステラがすべての意志決定をするのではなく、事業を動かすためには理事の合意を得なければならなくなった。この決断を機に、ユニドスは飛躍的に成長を遂げることになり、また毎年いくつもの活動を支援している。結果として、ユニドスは創設者に依存しない、本当の意味で活動的な組織になり、社会的なリーダーや企業家、寄付者などを巻き込んでいった。

ユニドスが自分たちのモデルを他の社会起業家たちにフランチャイズ展開し始めたころ、新たに重要な課題が

浮上した。エステラは、モンレーで実施したモデルと全く同じ方法で再現して欲しかった。彼女の説明によれば、これは「矛盾していました。異なる条件やアイデアを基盤として活動する団体が、モデルを実行する上で違いを受け入れるのがどんなに困難だったか」。そうして、ユニドスは地域の社会起業家のやり方を尊重すること、そして彼ら自身のコミュニティでの成功を確実にするため、事業モデルに必要な修正を加えることを奨励することさえ学ばねばならなかった。ユニドスが達成した最大の功績は、公正な社会というユニドスの夢を共有しているNGOで構成されるネットワークを通して、ユニドスのモデルを再現したことだとエステラは感じている。そのNGOは、ネットワークの中でノウハウを提供し、間違っただけのスタートが起こる確率を減らすことによって、モデルの実現とその応用を行うために、ユニドスはコーディネーターの役割を担っている。

ユニドスは社会事業と呼ばれるまでに成長したが、元々の目標を見失ったことはない。「我々の最終的な目標は、メキシコで障害に関する文化的変化を達成すること。このメッセージをできるだけ多くの人に伝えるためなら、我々はどんなことでも実行します。これは私が21年前に抱いた夢であり、使命にしようと思ったことなのです」と語るエステラは、自分の夢を制度化することが目的達成の手段だと考えている。優しさをないがしろにしなければ、一緒に親密に働くボランティアと障害者に奉仕する一方で、人間らしさや配慮をユニドスが失うことはないと言っている。

ユニドスを通して世界を変えるという夢を叶えるために、これまでやってきたことを振り返ると、やるべきことはまだ多く残されているとエステラは感じている。ユニドスが次に何をすべきか、事業モデルをどう進化させるか、毎日彼女は思いめぐらしている。従って、エステラとユニドスが日々直面するもっとも大きな課題は、変わり続ける障害者や社会のニーズに合わせて事業モデルを発展させ、適応させ続けることである。それを実行するために、ユニドスはボランティアに頼っている。

ボランティアはユニドスの心であり魂なのだ。ボランティアは、サマーキャンプに毎年参加し、ユニドスのあらゆる活動に参加することを楽しみにしている障害者に、忘れられない体験を提供する責任者である。突き詰めていけば、ボランティアはユニドスの優しさを社会に広げ、障害者にそれを届けることを可能とする責任者である。将来のリーダーとなるボランティアの若者達の努力によって、社会は大きく変わり、いつの日か障害者が健常者と共に生きることが可能になるとエステラは強く確信している。

ユニドスで活動した若いボランティアたちが、ネットワーキング、集団行動、連帯や協力といった社会的なリーダーシップスキルを身につけてきたことは特筆しておきたい。ボランティアが彼らの日常生活の中でも、社会の団結と抱合を促進して行くことが、ユニドスの究極の目標である。

社会起業家であることは容易ではないとエステラは知っている。社会起業家として成功するための単純な公式はないことを踏まえつつ、それでも世界を変えたいと決心した人には、以下の指針が助けになると彼女は信じている。

既成概念にとらわれない：人と異なる意見を持ち、枠組みを変えることを恐れてはいけない

人の心を動かす：まず自分自身が自らの理念を深く信じ、その情熱で周囲の人と心を動かす

目的を貫く：決してあきらめず、いつも自分の最終目標を胸に抱いておく。どんな経験からも何か学びがあることを忘れないでおく

一歩先に行く：一つの目標を達成したら、自分とプロジェクトが次に何をすべきかを考える

21年前の発足以来、ユニドスの社会インクルーシブ・モデルの発展と進化の背景にはこの4つの指針があった。障害者に対する社会の認識を変えるようなターニング・ポイントを、ユニドスは現在までにいくつか達成してきた。それでも行く手に多くのことがあることをエステラは知っている。それゆえ、より公正な社会となるための探求を、彼女が諦めることはない。



エステラ・ビラリアル・ジュンコ

2002年からメキシコのアショカ・フェロー。ユニドス（International Affairs of UNIDOS Lo Lograremos, A.C.）の創業者兼国際部代表。障害者の社会参画に取り組むNGO。二人の兄妹との個人的経験から情熱を得た。20年以上に渡り、メキシコの多くの都市に活動を広げている。ユニドスの彼女の活動に対し、INDESOLの「24人の全国社会事業賞」「未来のグローバル・リーダー」、またいくつかの「市民功績メダル」など、数多くの賞を受賞している。

UNIDOS

Mail: Dr. José Luna Ayala #108, Col. San Jerónimo C.P.

64640, Monterrey, N.L. México

Phone: +52 81 80 48 98 00

Fax: +52 81 80 48 89 39

E-mail: unete@unidos.com.mx

Web: www.unidos.com.mx

ホワード・ウィンスタイン

レガル・コンサルティング／ブラジル
2008年よりアショカ・フェロー

沈黙を破る人

ラファエル・バリフォース著

2002年1月24日の朝。ボツワナの南にある人口3,500人の村オツェに着いて3日目、ホワード・ウィンスタインは戸を叩く音に気がついた。そこにいたのは、地元のろう学校の教師と1人の生徒。教師は、カナダ人の起業家が低価格の補聴器をつくるためにこの町に来たと聞きつけ、生徒のためにひとつ欲しいとやってきたのだ。「彼女の名前はサラ。17歳です」と教師は言った。それは偶然にもウィンスタインの娘と同じ名前前で、同じ年齢だった一もし娘が脳動脈瘤で6年半前に亡くなっていなければ、「私がこの場所に来たのは何か理由がある」と、彼は思った。

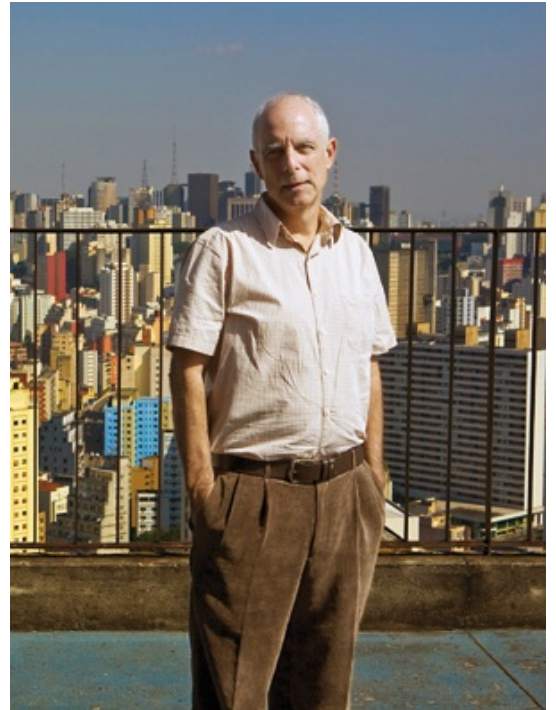
1978年に彼は小さな配管業の会社を買い、15年後に大企業に転売し、その会社のカナダ支局の管理職として残った。湖を望む田舎の別荘を持ち、モントリオールの高級住宅に暮らす彼の人生は、多くの人がうらやむものだった。1995年6月6日の夜までは。いたって健康だった娘のサラが、眠っているうちに亡くなったのだ。一週間後、ウィンスタインは仕事に復帰すると、解雇を言い渡された。「私は会社に、これ以上利益をもたらせないと判断されたのです」と彼は語る。「ビジネスの視点から見れば、確かにそのとおりでした。絶望の中で、まるで霧の中を歩いているようだった」。

ウィンスタインは1年間を休養にあて、精神療法を受けた。その後、障害者のためのトイレ用電動便座を製作する会社を立ち上げた。しかし、家と貯金、他の財産もなくし、自己破産してしまう。「身が入らなかった」と彼は言う。そして、起業家としての自分の経験を社会問題の解決に活かそうと、途上国に向かうことを決意する。彼は、女性が子どもを医療ケアに連れて行けるように、また彼のような苦しみを味わわなくていいように、彼女たちに収入を提供できるようになりたかった。「自分は、アイデアを現実に変える術を知っているビジネスマンだ」、彼はそう思っていた。2001年、彼はアフリカの田舎にボランティアとして招かれた。そこで彼は小額の生活費だけ稼いで、住まいはワンルームの土壁の家で、でも太陽電池で稼働する低価格の補聴器を製作するために、地元のろう者の女性を雇用しようとしているNGOの立ち上げを支援した。アフリカにはこんなことわざがある。「祝福は、傷みのすぐそばに訪れる」。「これは自分のための仕事だ」と、彼は思った。これは神に与えられた祝福となりえた。

サラに補聴器をあげられるまで、1年の月日を要した。オツェに到着した当時、彼は、低価格の補聴器、充電式電池、ソーラー・エイドと呼ばれる太陽光充電器などの新技術の開発にむけ、エンジニアと一緒に働いていた。ゴディサ・テクノロジーというアフリカNGOは、アフリカで低価格の補聴器を製作するたった一つの団体で、そして世界で唯一その制作にろう者を雇用していた。ゴディサは、現地語で「他の成長のために行動する」という意味だ。このソーシャル・ビジネスのコンセプトは、キャンフィル・ビレッジというアフリカの障害者支援を行うNGOによってつくられた。この特別な村から、ゴディサは生まれたのだ。

世界保健機構（WHO）によると、世界で補聴器を必要とする人の数は2億7800万人いるが、毎年製作される補聴器の数は600万個にしか満たない。必要とする人の3分の2が途上国で暮らしているのに対し、途上国で売られる補聴器の数は、製作数の12%にしか過ぎない。途上国における聴覚障害者の大半は、耳の感染症が原因であることが多く、廉価の抗生物質で治療が可能だ。しかしこれらの国々で、薬や治療を手に入れることは難しく、ましてアフリカの田舎となると不可能に近い。

また別の問題もあった。当時、補聴器の値段は500ドル～5,000ドルくらいした。そして大抵は、両耳に使う



ため、2個必要になる。世界の聴覚障害者の大半にしてみれば、高価すぎて手が出ないーアフリカであればなおさらだ。補聴器を手にしても、ほとんどは1週間後に電池が切れてしまい、もう使えなくなってしまふ。標準的な補聴器に使われる電池の寿命は平均1週間。価格は約1ドルで、途上国では首都のような大都市に行かないと売っていない。これらの問題を同時に解決する手段が、太陽光のみで充電可能であり、かつ電池寿命が2～3年という、低価格の充電式補聴器だ。太陽光なら、アフリカにも豊富にある。

ワインスタインは、聴覚学に関してはまったくの素人だった。彼いわく、「デシベル（音の強さ、聴力を表す単位）とティンカーベルの違いもわからなかった」。彼がしたことは、持続的なビジネスモデルの手伝いをすること、資金を提供してくれる財団に電話をかけること、電子機器の専門家や製作者と協議することだった。ボツワナのアフリカ開発財団（ADF）は、初めは彼の提案を断ったが、ワインスタインはあきらめなかった。企業での経験から、彼は知っていた。「だめだ」というのは、ただ「今はだめ」という意味であって、「永遠にだめ」ではないことを。彼はADFの会長に会うためにアメリカへ飛び、太陽電池の試作品を見せた。その説得効果は大きく、ワインスタインは25万ドル（約2500万円）の資金提供の約束を得て帰路に着いた。

ゴディサの運営が安定するまでに2年かかった。補聴機能、電池4つと太陽光充電器、そして従業員10人の給与、必要な教育と研修を賄うだけの利益を、すべて込みで100ドル以下の販売価格におさえなければいけない。障害者自身が、その機器をつくる。手話で話そう者は、視覚と手の動きの連動性が標準よりも高い。細かい電子機器の組み立て作業には最適だ。6週間に渡った選考と、イギリスの補聴器メーカーによる技術トレーニングの結果、10人の候補者が選ばれた。「最初は半信半疑でしたが、彼ら自身のプロジェクトなんだと理解するにつれ、態度は変わりました」とワインスタインは語る。サラも、この選ばれた中のひとりに入っていた。



このカナダ人の事業家は、まるで自分は新しい従業員の叔父のようだと思っていた。家の玄関で初めて出会った少女とは、「パパ」と呼ばれるほどに特別な関係を築いていった。サラは従業員の中でもリーダー的な存在となり、一緒に働く仲間を励ます役になった。ある時、ワインスタインが聴覚学の会議に出席するためブラジルに行くことになると、他の人は皆、ブラジルからお土産を買ってきてとねだったのに対して、サラは「ブラジルのろう者を助けるために、行ってらっしゃい」とだけ言った。

今年、ホワードはアメリカ聴覚学会から2008年人道賞を受賞した。選考委員長のシェイラ・ダルゼルは、「彼はこの分野の専門家ではないが、問題を理解し、解決策を見つけた」と評した。「それは一時的な努力によるものではない。このプロジェクトは、人々の生活に長期的な影響を与えるものだ」と確信している。

ワインスタインがサンパウロの新しい家で、ボツワナで過ごした5年間の話を語ってくれたのは、2008年5月のある午後のことだった。地域中の人が集まる盛大な結婚式と、それよりさらに広い地域から人が集う葬式が記憶に残っている。ワインスタインは、契約終了まで勤め上げることができなかった。「あまりに死が多すぎた」と彼はいう。「毎週、誰かがエイズのために亡くなる。そのほとんどは子どもたちでした」。ボツワナ滞在中に、住んでいた地域のひとりが彼の腕の中で亡くなっていった。彼の精神は、再び崩壊に向かっていた。去るときが来ていた。

ワインスタインが着任したとき、彼のオフィスは1室に数脚の椅子と机があるだけで、製品もお金もなかった

。彼は、順調に運営されている非営利ビジネスを残した。6年間でゴディサは、1万個の補聴器と、1万5千個の充電器、2万個の電池を売り上げた。「これは世界の他の地域にも転用できる、ユニークなモデルだ」と、北西ライオンズ視覚・聴覚財団との協働プログラム「オーディエント」代表のマイケル・ランアウト氏は語る。「ヘルスケアの大きなニーズに対応しようという、ワインスタインの強固かつクリエイティブな努力には脱帽する」。ボツワナを去る前に、ワインスタインはゴディサが確実に持続できるよう準備を整えた。オツェに到着した初日から、彼の後継者となるべく、起業家のノウハウを36歳の事務担当のモDESTA・ザブラに教え込んだ。彼女は、従業員に自信と、新しいアイデアを試す裁量を与えるのが得意だった。モDESTAは今や、ゴディサの運営の全面的な責任者だ。「ホワードは私たちスタッフにとっても愛されていました。それは、彼が周りにいるすべての人にやる気を与えてくれた人だったからです」と彼女は言う。

ボツワナでこのカナダ人は、キャンプヒルでダウン症の住人が関わり、成功した景観プロジェクトも含まれる、3つの新しい持続可能なビジネスの開発も支援した。「私は社会の考え方を変えたかった。障害を持つ人であっても、世界標準レベルの仕事ができるということを示したかった」と彼は語る。「我々は、彼らが持つ特別な能力を尊重し、彼らが採用されるために、他の企業にも、このすばらしい人たちの仕事とプロジェクトの成果を見て欲しかった」。彼がボツワナを離れた頃には、35人の障害者が雇用されていた。

2003年、ワインスタインはジュネーブのWHOが主催する聴覚障害会議に招聘された。「関連する委員会が15年間に渡り議論し続けたのに作れなかったものを、我々はたった9ヶ月で開発してしまった。その開発された製品を、多くの人が見たがっていました」。この会議の席上で、2人のブラジル人聴覚機能訓練士に、毎年行われる全国会議での講演を頼まれた。その全国会議で彼はサンパウロ大学で聴覚学の高名な教授であるデボラ・フェラーリ博士に出会い、ゴディサのプロジェクトを別の場所で広げないかと話を持ちかけられた。ブラジル地理統計研究所（IBGE）によると、ブラジルには5百万人の聴覚障害者がいる。2006年、休息を求めて彼はボツワナを離れ、パナマから陸路でカナダのモンテリオールに戻った。カナダで2ヶ月を過ごした後、彼は人生の次のステージを始めるため、ブラジルに行くことを決意する。「アフリカの絶望からも、北米の表面的な生活からも、ちょうど中間地点にあるのがブラジルだ」と彼は語る。

ワインスタインがサンパウロに住み始めて約3年になる。それはゼロからのスタートだった。新しい充電式電子補聴器や次世代の太陽電池式充電器、2種類の新しい充電型補聴器用電池の開発に加えて、地元のカウンターパートと必要な資金も探さなければならなかった。そしてリード・パートナーとして、彼はブラジルの新しいNGO、CEFAC研究所を発見した。彼らは使命と理想を持っており、またプロジェクトを抱えるための資金もあった。ワインスタインは、追加資金として外国からの支援金20万ドルを集めた。技術開発が進められ、2009年1月から生産が開始される予定だ。ラテンアメリカ版の3点セットの中身は、新しい充電式電子補聴器、充電式電池と次世代の太陽光充電器だ。約125米ドルの販売価格で、ラテンアメリカ中で政府やNGOを対象に販売される予定である。2年間使えば、バッテリーの購入価格よりも安い。少し高くなるが、世界中のどこからでも、どの企業でも、この補聴器を購入することができる。充電器や電池だけの購入も可能で、それは昔彼らが販売した補聴器でも、今販売している補聴器でも使用することができる。このプロジェクトの中で、ワインスタインが個人的に喜んでいることは、ボツワナのろう者がブラジルのろう者のトレーニングにやってくることだ。現在の技術研修は、北（訳注：先進国）から南（訳注：途上国）であり、南から北、また南から南はほとんどないし、国際的にろう者からろう者もありえなかった。サラは現在24歳で、ブラジルの新しいろう者の従業員の研修のために、ゴディサから派遣される3人のうちの1人だ。

ワインスタインは、カナダにおける起業家と、途上国における社会起業家との違いをこう語る。たとえばカナダでは、研修を受けた技術も教育もある従業員を簡単に雇うことができる。さらにカナダでは、仕事をするための最適なインフラ基盤に加えて、社会的、経済的、政治的な制度も整っている。一方、ブラジルやボツワナでは、事業を立ち上げるための資金を見つけるのも、適した人材を探すのも、彼らを訓練するのも、膨大な時間がかかる。加えて、インフラ基盤や官僚主義も頭が痛い課題だ。カナダと途上国を比べるのは「ジンジャー・ロジャーズ（訳注：アメリカの映画女優）になるようなもの」と、ワインスタインは笑いながら言う。「ハイヒールを履いて、後ろ向きにダンスして、かつフレッド・アステア（訳注：1930～50年代にハリウッドで活躍したアメリカ人ダンサー）のようにうまく踊れなくてはならない」。

WHOによると、南米では人口の5～9%が聴覚障害を持っているというが、その南米全体に対して、ブラジルが低価格の補聴器と充電式電池を提供する予定である。次の2つのプロジェクトは、ヨルダンとメキシコだ。アル・クアッズ音響テクノロジーという中東プログラムには、ヨルダン、パレスチナ、イスラエルから若いう者が一緒に働くことで、平和構築の要素も入っている。またワインスタインは、パキスタン、インドネシア、ベトナム、フィリピン、中国、ロシア、そしてアメリカのNGOも既に訪問し、また面談を行った。ひとつ

ひとつのプロジェクトは、共通のミッションと理想をもっている—それは、障害を持つ従業員へのエンパワメントと彼らの手で作り出した製品を貿易対象地域に広めることだ。たとえば、メキシコのプロジェクトでは中米とカリブ海全域に行き渡るように流通させる予定だ。ヨルダンからは、中東と北アフリカに。アフリカ大陸の他の国々は、ボツワナがカバーする。独立した個々のNGOが、製作過程で必要な部品をまとめて大量購入することにより、価格の低下が実現できる。「競争相手が助け合う。新しいビジネス方法論です」と、彼は語る。「しかし市場は大き過ぎて、ひとつの国でグローバルな需要に対応することはできないのです」。

ブラジルでみられるように、他のプロジェクトにおいても新しい技術が開発されている。ヨルダンでは、学校の授業で使用されているマイクが補聴器に支障を与えるのを解決するために、Bluetoothの技術を導入する予定だ。こうした新技術は他のエンパワメントの手法とあわせて、各プロジェクトの間で、無料で共有される。特許はつかない。「我々の発明を、もし大企業が複製してくれたら素晴らしいことです。彼らは私たちと比べようもないほど大きな販売力を持っています。結果として、より多くの人々の手に低価格補聴器を届けることができるし、毎年廃棄されている何億もの亜鉛電池の無駄がなくなります」。

ワインスタインがブラジルで出会ったのは、新しい挑戦だけではなかった。新しい恋人にも出会った、41歳の聴覚学者、モニカ。2008年にふたりは結婚し、現在は彼女とともに暮らし、11歳のステラと15歳のルイザの継父となった。ステラは、サラが亡くなったのと同じ年齢。父親としての人生を再びスタートすることになる。ボツワナでもそうであったように、他の社会的プロジェクトも手がけている。今回は妻と一緒に。「彼女は物事を広い構図で捉え、糸口を見つけ出してプロジェクトをまとめあげるのが上手いのです」とワインスタインは言う。リオ・デ・ジャネイロにあるカンタガロのスラム街で、地元の青年団体とともに、トレーニングや経験、収入を彼らに与え、そして何よりも健康と地域の治安維持の動機づけを行う持続的なプログラムと一緒に作っている。若者自身が選んだ3つのプロジェクトを開始するための資金をふたりは集めた。ひとつは写真、ひとつは家庭から出る油を再利用した石けんづくり、そして地域で出た紙ゴミをリサイクルしてつくる再生紙のプロジェクト。若者に指導するためにプロのカメラマンが雇われた。写真が印刷された再生紙でつくられた飾り箱に、香りつきの石けんが収まる。最初に立ち上げた3つの事業からの収益を元に、将来的に持続可能なプロジェクトを創り出していこうというのがモニカとホワードの考えだ。すべてのプロジェクトが、経済、社会、環境、そして教育の課題にからんでいる。なぜすべての問題を同時に解決しようとするのかと尋ねると、彼は答えた。「その方が楽しいし、それが可能なら、やった方がいいじゃないか」。

新しい家の中庭で、バーニーズ・マウンテン・ドッグのドナと遊ぶワインスタインは幸福そうだ。「残りの人生はブラジルで過ごそうと思っている」。かつての経営者は、社会起業家に生まれ変わり、その新しいライフスタイルを気に入っている。彼の見解では、直面する課題は伝統的なビジネスとなんら変わらない。人々にやる気を出させ、うまくまわすこと。彼は人生の13年間を振り返って、自分がこの道を歩み始めたのは、娘の死に何か意味を見つけるためだったと感じている。しかしそれは翻って、彼自身の人生に意味をもたらした。「以前、私はただの金持ちだった。今の私は、内面も豊かだ」。

ホワードは、社会変革を成し遂げるために、4つのアドバイスを挙げている。

- 1)成功からよりも、間違いや失敗から学ぶことの方が多い。失敗を恐れてはならない。
- 2)あなたが行うプロジェクトは、あなたのためのプロジェクトではない。
- 3)馬鹿みたいに頑固でいることは長所であり、成功に導いてくれる。
- 4)すべては愛につながっている。ひとつの言葉が、我々を人生の重みと痛みから救ってくれる—その言葉とは、愛だ。—ソフォクレス（古代ギリシャ詩人）の言葉。



Howard Weinstein is a Canadian-born, 58-year-old man from Quebec. He is outgoing and has a quick mind, with a strong entrepreneurial spirit and creativity. He is thoughtful and has international negotiation skills, maintaining a forward-looking attitude in any environment. He is optimistic and can provide support to those around him. He has the ability to build relationships and trust within multicultural communities, and has grown through this process. He is trilingual and can also provide hand-to-hand support.

受賞歴：

世界大学国際ボランティア賞[World University International Volunteer of Year 2005]

2008年アショカ・フェロー <http://pcastilloashoka.webng.com/howardweinstein/>

アメリカ聴覚学会人道賞2008

レメルソン・アショカ・フェロー2008

Legar Consulting

Mail: Rua Senador Vergueiro 334, Sa?o Paulo, Brasil 04739-060

Phone: +55 11 5523 6578

E-mail: strolltheworld@gmail.com or howard@solarear.com.br

Web: www.legar.com.br, www.solarear.com.pl

監訳者あとがき

1980年代から入り込んだ障害者の世界では、知り合った障害を持つアジアのアショカ・フェローは名刺に明記するほどその名を大切にしていた。アショカとは何なのかわからずとも、障害者の功績を認めてくれているいい団体だとの認識はあった。そのため、たまたま知った本書の出版をぜひとも紹介したいとウェブに載せたことが発端となり、翻訳の運びとなった。

監修という仕事を通しAshokaはより身近なものとなり、また本書に何人かの友人も取り上げられているのを発見し親近感 はさらに増した。彼らには今年セミナーや国際会議で顔を合わすチャンスがあり、日本語版の出版を伝えたところ、日本語で自分たちの活動が知られることをとても喜んでくれている。

中西由起子

(DPI日本会議/アジア・ディスアビリティ・インスティテート)

編訳者あとがき

「力強い障害者リーダーがアジア途上国にも数多く存在する」というメッセージをいつか伝えたいと思っていたところ、アショカから出版された本書に遭遇しました。本書には、障害を持つ変革者が8人と、障害者のために社会を変えようとする変革者が8人紹介されています。どの変革者も、障害者は多くの可能性を秘めながらも、社会から十分な機会が与えられていないためにチャンスを逃している、というメッセージを伝えようとしているのだと思います。彼らを変えようとしているものは社会そのものであり、現代社会が持つ「障害者の負のイメージ」なんだと思います。さてこのような変革者は、日本にもまた アジア途上国にも数多く存在していると私は思っています。今後はそんな途上国の変革者を紹介していきたいと思っています。

最後に、本書の翻訳に監訳者として粘り強く付き合ってくれた中西由紀子氏に深謝申し上げます。数ヶ月で終わると思っていた作業に、結局2年近くも費やしてしまいました。また翻訳に協力してくれた、私の元同僚、日本財団の粟津知佳子、橋本 朋幸、本多真紀、山崎美加にも改めて感謝申し上げます。本当にどうもありがとうございます。そして、これからもよろしくお願いします。

千葉寿夫

著者

ラファエル・バリフォース、ラマ・チャリ、アル・エトマンスキー、アンナ・ギャラガー、マハ・ヘラリ、キャロライン・ハイデンハイン、アンドレアス・ハイネッケ、キャタム・マルカウィ、グエデル・ンボッジ、カルロス・デヴィッド・サリナス・オラスコアガ、オケチャク・オゾワル、ウィルマJ.E. ランドル、レオナルド・シヨクロン、エレナ・セヴィラーノ、プラナブ・マン・シン、ピョートル・スタニスロスキー

監訳者

中西由起子（なかにし・ゆきこ）

訳者（五十音順）

栗津知佳子（あわづ・ちかこ）、千葉寿夫（ちば・ひさお）、橋本朋幸（はしもと・ともゆき）、本多真紀 Vicky（ほんだ・まき・ヴィッキー）、山崎美加（やまさき・みか）

校正

渡邊奈々（わたなべ・なな） Founder and Chairperson、アショカ・ジャパン

DTP・電子書籍化

西田栄子（にしだ・えいこ） クールタイガー

クリエイティング・チェンジ

2012年12月25日発行

発行者 DPI日本会議

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-11-8武蔵野ビル5階

本書は非売品です。

©中西由起子ほか、2012

本書に関する問い合わせは、creatingchangejapan@gmail.comまでお願い致します。

アショカについて

アショカ(公益のためのイノベーター)は、仕組みの変革を謀る解決法をもって、世界でもっとも差し迫った社会問題に取り組む人々のグローバルな連合である。1980年の創設以来、アショカから継続的な支援を受けてきたソーシャル・アントレプレナーは、70カ国以上に住む2000人を超える。「アショカ・フェロー」と名づけたこれらの人たちに、スタートアップの給付金や専門的支援を与えるだけでなく、彼らをトップレベルのソーシャル・アントレプレナーやビジネス・アントレプレナーのパワフルなグローバル・ネットワークの一員として迎えている。さらに彼らの変革を世界に広げる手助けをしている。

(ディス)アピリティ・イニシアティブは、アショカ・スタッフとほかのリソースの支援と関与により発足し、運営されているアショカ・フェローの国際的な連携プロジェクトである。このプロジェクトは、真に国際的な性質と継続性により、アショカ・フェローの協力のモデルとなっている。

Ashoka

c/o McKinsey & Company

Pl. Piłsudskiego 2, 00-073 Warszawa

tel.: +4822 820 58 74, 71, faks: +4822 820 58 00

E-mail: info_pl@ashoka.org

インテグレーション協会の友人について

インテグレーション協会の友人は1995年にピョートル・パウウォフスキー、1996年よりアシヨカ・フェロー、によって設立された公益の非政府組織である。協会は障害者とその家族、情報や仕事の活性化、教育に特化したクリエイターに専門的な支援を提供している。ポーランドの障害分野で一流の社会団体として、協会は世論に影響を与え、法律改正を促進し、法律違反があるときに注意を呼びかけている。

Friends of Integration Association

ul. Sapieżyńska 10a, 00-215 Warszawa

tel.: +4822 536 01 35, +48 519 066 476,

faks: +4822 635 11 82, E-mail: integracja@integracja.org

クリエイティング・チェンジ - 障害の世界から生まれたイノベーション

<http://p.booklog.jp/book/73411>

著者 : hchiba

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hchiba/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73411>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73411>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ